

落

點

丹羽文雄作



落

鮎

丹羽文雄

落
鮎

昭和二十四年七月十日 印刷
昭和二十四年七月十五日 發行

定價 二五〇圓

著者 丹羽文雄

發行者 栗本和夫
東京都千代田區丸ノ内二ノ二

印刷者 正木正家
東京都豊島區高田南町一ノ三五七

東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ノ内ビルディング五九二區
發行所 中央論社

電話(23) 五三五・五三六番
丸ノ内(23) 五三七・五三八番
振替口座 東京三四番

落

鮎

二階正面の席につくやいなや、舞台のボックスから音楽が湧き上り、緞帳がするするとあがつた。場内の騒々しさが吸ひとられて鎮まつた。舞台はスペインの街の風景だが、二階から見下すせるか、舞台の奥行が浅く、埃つぼくて、お粗末な印象である。小峰烈は端正にソフトを膝にのせ、舞台に向かつてゐた。小鬢に白髪をまじへる彼は、どの踊子が杉杉子であるかと、隣席の章あきらに尋ねるやうな眞似はしたくないと思つてゐる。杉杉子が、自然と判るといふ氣がした。章が結婚

したいといふ相手である。父親の自分に、相手の踊子が自づと判るといふ神祕じみた暗合も、また許されてゐるやうに思ふ。左手から踊子が数名、同じ衣裳で唄ひながら登場した。右手から、ちがつた衣裳の女達が、唄ひながら舞台のまん中でゆきちがつた。

「どの子でせう。あの中にあるのでせうか」

左の席にある昌代が、肩を押して、小峰に囁いた。小峰は小さく頸を振つた。それとなく右隣を見ると、章が少年じみた動搖を示して、からだを二つに折り、胸の下で腕を組んで、何かに耐へる姿勢にあつた。舞台に杉杉子が登場してゐるかのやうな思ひつめ方であつた。

一人の女が、舞台中央のバルコニーから唄ひながら現れた。端役ではない。小峰はどきつとなつた。が、ちがふやうな氣がする。

「あの人？」

昌代が再び訊く。頸を振つて應へる。まるで小峰烈が、杉杉子を知つてゐるか
のやうな否定の仕方であつた。長男の妻となる女は、もつと美しい人だと、長男
に味方する旨ひた思ひがしきりと動いた。そのくせ、長男からもち出されたこの
話には、小峰は事後承諾を強ひられた形であつた。劇場にのぞむまでには、手き
びしく品定めしてやらうと、杉杉子の欠点をさがし出すことに意地悪な情熱すら
抱いてゐた。生活環境がまるでちがふ。自分は、氣に入らないにちがひない。そ
れが、いつか變化してゐた。小峰は、白紙になるべきだと努めた。白紙で、杉杉
子を眺めたいと願ふ。章に対するいちばん素直な父の態度である。これだけの心
の變化すら本人には意外であつた。何がかく仕向けたのか。章が思ひあまつて舞
台を見つめてゐる熱心さに、ほだされたためか。父親の最後の審判を迎へるわが
子のいぢらしさのためだつたか。いづれも違ふやうである。彼は昌代の人の悪い
好奇心に張り合つてゐる。それから章を少しでもかばひ立てようとする微妙な利

己的な思惑が去來した。彼も劇場にはいるまでは昌代と同じ心であつたことは否定出來ない。昌代の辛辣な批判では、初めから結果が判つてゐた。昌代の批判には、情容赦がない。親らしく章の心の側に立つてやるといふ思ひやりは、露ほどもない。ないので、あたり前であつた。あれば、嘘になる。小峰は、昌代の二十八歳を感じた。

「スターですね。だからなかなか登場しないのでせう」

「役柄が限定されてゐるから、さういふ舞台でないと現れないのだらう。唄つたり、芝居をする子ではないさうだ」

「何んだか、じらされてゐみたいで……」

衆人の中で昌代と隣合つて腰かけると、二十八歳と並んでゐるやうな氣がする。二十八歳の觀念につまづく。膝がふれてゐるといふわけではなかつた。一定の間隔は保たれてゐるが、鮎が身をふるはせて急な瀬をのぼる時のある緊縛した

若さが感じられる。傍若無人な、かちつと固い果実である。それにしても、若し昌代が母親であつたならば、自分以上に章に味方し、見ない内から杉杉子に厚意を示すにちがひないと、この場合、母親の分まで引きうけた自分を、小峰は皮肉に感じる。舞台は歌劇といふよりも歌謡曲風に自在に換骨奪胎されてゐるが、筋は想像することが出来た。その内に、杉杉子の登場となるわけである。主役はほとんど出てゐる。杉杉子は、思ひがけない役にちがひなかつた。

舞台は酒場の場面になつた。裾の長い、色とりどりの女達が唄つたり、踊つたりした。俄かに場内から拍手があがつた。どよめきが起つた。左手から裸体の女が、はしり出た。全身にびつたりと合つた薄いものをつけ、顔が判らない。彼女は牛の面をかむつてゐる。可愛い角をつけてゐた。彼女が一種独特な踊りをはじめると、舞台は忽ち彼女の一点に凝集された。女達は彼女をとりまいた。彼女はひとりで踊つた。跳ねたり、両手をあげて舞つたり、脚を曲げたり、腰を歪めた

り、その踊りは全身から湧き上るリズムに憑かれたやうに見えた。音楽は彼女にひきまはされて聞えた。この踊りは、舞台を二倍の廣さに感じさせた。

小峰は、ちらりと章を見た。章は両手を握つて、舞台にのめりこむやうに凝視してゐる。小峰は、苦笑を浮かべた。それが杉杉子であると氣が付いたのは、踊りはじめて、踊りの中の異様な情熱、速度、形、抑揚に心をとらへられた瞬間である。彼はしきりと歪曲と飛躍を聯想する衝動をうけた。踊りそのものは、それほどをかしくなかつた。小峰はよろづにつけ、直感に訴へる場合、をかしいか、をかしくないかで本物か二流かの區別をつけた。名人藝を聞いてゐても、をかしく感じる場合がある。をかしくなければ、それはもうそれだけで立派である。絵を見ても、音楽を聞いても、芝居を見ても、をかしいといふ印象をあたへるものは、一流ではなかつた。杉杉子の踊りは、それほどをかしくなかつた。日本人にはめづらしく腰が高くついてゐる。闊達自在に踊りまくるが、己の魅力を十分に

知つてゐる小づらにくさもあつた。日本の女の裸も、あそこまで踊れるのだといふ感じだつた。

「いいからだですわ。ひとりで舞台を押へてしまつて……あの人でせう？」

昌代が、顔を寄せた。頷く。が、長男の嫁として目鏡にかなつたといふ意味ではなかつた。言はば、一個の藝術品である。をかしくない踊りが、人間性に何かを與へたといふ鑑賞の問題であつた。小峰は、章の妻としては考へてゐなかつた。牛の面をかむつてゐるではないか。

拍手に送られて、彼女は舞台から消えた。牛の踊りだけが、杉杉子の持役である。乳臭い歌謡劇の中で、彼女の踊りだけが大人だつたといふ印象を小峰はうけた。

陽はまだ空にあつた。小峰と昌代は、銀座に向かつて雑沓を歩いてゐた。長身な小峰は、いつも黒つばい服を着てゐる。英國風の紳士の型である。昌代が軽く

小峰の腕に手をかける。外出の彼女の洋装は、どこかショウウィンド的であつた。生活感覚がとけこんでゐない。家庭にゐる時の方が、はるかに巧みに着こなしてゐるが、どちらかといへば、和服の方が似合つた。

「踊子を奥さんに迎へるといふことは、小峰家にとつて大冒険ですわね。章さんも、いい時代に生れていらしたわ。よく中野が承知しましたわね」

「自分らの昔を思ひ出したからだらう。親のいひつけで嫁してきたことが、どんなに不自然で、非人間的かと、骨身に應へて味はつてゐるからだらう」

通りに面した西洋料理店に、よつた。昔の資生堂を思はせ、上品な静かさが室内に漂つてゐた。猪熊弦一郎描く模様化された裸婦が、壁間をかざつてゐた。銀座に出ると、小峰はひとりの時もここに寄ることにしてゐた。室内は氣に入つてゐるが、窓外はいけない。銀座の台所をのぞくやうで、表付きだけ立派で、裏へまはると、舞台裏さながら索莫すぎる。

「やがて来る頃だが」と、小峰は腕時計の袖口を直した。「普通の客に呼ばれて来るのでないだけに、彼女も緊張するだらう。悪い印象を興へまいとして……しかし、すでに舞台上で、彼女の裸同様の正体を見てゐるのだから、この上は、如何にそれを粧つてゐるかといふことを、確かめるだけだが、……二十歳だからね」

「踊子といへば、とかくの噂がありますけれど、あのからだからうけた感じでは、生活も健康なやうですわね」

「僕も、さう感じた。あれも一つの藝だから、舞台上に立てば、人間がちがつたやうに立派に踊れるといふことはあるが、不健康な生活をしてゐると、踊りの間で、微妙にそれが感じられるからね。あの子は、見るからに生氣潑刺として、わるびれず、闊達自在に踊つてゐるが、濁つた経験のない強さを感じた。あの人の踊りは、濁つたものを健康なものに変化させる力をもつてゐる。こんな批評はをかしが」小峰は間を置いて、微笑をうかべた。「息子の嫁を、かうして品定めする

年齢にいつか自分がなつてゐたといふことは、感慨無量だ。若いつもりであるが「あたしは、章さんと同じ年齢ですわ」抗議の眼差である。

「うん、君は若い」その顔をまじまじと見やつた。「二十三だ。君の若さは、鏡が反射するやうだ。一抹の翳りも許さないでみんな反射してしまふ明るい若さだ。八つの子供があらうとは思へない。お世辞ではない」

「いまさらあなたにお世辞をいはれても、嬉しくありません」

「君の若さのため、ついふらふらとこちらまで、若いやうな錯覚にとらはれてゐたのだ。ありがたい錯覚。章らに逢ふと、いつも氣持が老けて、いけない」

二人は、サンドウイッチを行儀よく食べた。そこへ、章と杉杉子が階段を上つて來た。章は上りきつたそこから、室内を見渡したが、派手な昌代の顔がすぐ目についた。二人が近付いたと知つた時、小峰は外國流に立ち上つてゐた。

「父」と、小さく言ひ、「杉さんです」振分けた。

「先程、あなたの舞台を拜見しました」

章は、昌代を紹介する時に、

「岸さんです」

昌代の姓を言つた。不断、章は岸さんと呼んでゐた。昌代は苦い棒をのみこんだ顔になつた。そのため、杉杉子にお世辞をいふ氣がなくなつた。昌代は正面にかけた杉杉子を、無遠慮に眺めやつた。美貌とは言へなかつた。そこらにいくらか見かける平凡な娘の顔である。あれほどの見事な体格も、服で包まれると、單に大柄な、どこか垢抜けのしない感じを與へる。このひとの一番美しい時は、裸だと思ふと、昌代は微笑を禁じ得なかつた。南洋でないのが、残念である。じろじろ見られてゐると思ふと、杉子もつい、昌代を氣にしないわけにはいかなかつた。人みしりしない杉子は、昌代の顔に眸を置く。路傍の人を見るやうであつた。昌代のうけ唇が、第一の印象だつた。細面、腫が大きかつた。長い睫毛であ

る。眉が濃い人は、氣性もしつかりしてゐるといふ。長くて、きれいな指を昌代はもつてゐた。杉子は、羨しいと思つた。神経質らしい。病的なほどの身ぎれいな感じである。襟足には、一本の乱れ毛もない。塗つたやうに、細い襟足が青白い。髪床から出てきたやうな髪型には、或る種の職業女の習性を聯想させるのである。さういへば、ドレスの着工合も、普通人とはどこか違つてみえた。杉子は章から、岸昌代の生れについては、くはしく聞いてゐなかつた。

「家庭人になつたら、舞台はやめると言つてますよ」

章が言ふと、杉杉子が頷いてみせた。

「それは惜しい。あれだけの踊りを犠牲にするのは、惜しいですね。もつとも結婚生活も、考へやうによつては、大事業ですから」

「舞台人で家庭をもつてゐる人をいく人か知つてをりますけれど、大抵どちらかが犠牲になつてをります。あたしは、それほど大決心で舞台に立つたのとは違ひ

ますから」

「踊子も、職業婦人としての限界をもつからですか」

そこまでの意識はなかつたが、さう言はれてみれば、それにちがひがないので、杉杉子は初めあいまいに頷いてゐたが、終りに深い調子で頷いた。小峰はこの女性から、他日お父さまと呼ばれることを想像した。似合はないやうでもなかつた。彼はこの素人素人した娘に、好意をもつた。

2

その夜、章は樂屋の出口で彼女を待ちうけてゐた。新婚の妻が舞台上で踊つてゐるのを待つてゐる良人のやうな氣がする。他にも青年や娘たちが、踊子のかへりを待つてゐた。彼は街路樹のそばで、姿勢正しく立つてゐる。痩せ型で、長身で

ある。小峰烈を若くしただけである。一分の隙もない身だしなみだが、端正にふるまふことが生地なので、わざとらしい感じは與へない。ざつくばらんにふるまふことの好きな人からは、さぞ疲れるだらうと見られるが、本人はかへつてかうふるまふことがいちばん氣が樂であつた。五六人の青年を影絵にしてみると、一ト目で判断ができる。ぶつてゐるのではないが、ぶつてゐるやうに中学生時代から思はれてゐた。杉杉子が他の踊子とまじつて出て來た。目ざとく見付けて、彼の腕をとつた。省電の駅に向かふ。

歩廊に上ると、杉子が二米ほどはなれて、章を眺めやつた。そして、感に耐へないといふ顔をする。

「まるでそつくりね」

「何が」

笑ひながら、近付く。

「あなたのお父さまにお目にかかるまでは、あなたは、半分はぶつてるのだと思つてたわ。お逢ひした初めの頃、ごめんなさい、あなたつて人は、お便所にはいつても氣取つてゐるのではないかと想つてたの」

「ひどいことをいふ」

「お父さまに逢つて、さうでないことがよく判つたわ。お父さまがさうなのね。笑ふにしても声を立てない。はめを外さない人。いつも毅然と、毅然といふのは強すぎるけれど、つまりお行儀がよいのね。あたし達があんまり行儀が悪くなつたせるね」

「僕は小さい頃から、さういふ育てられ方をしてきた」

「鷹揚で、行儀がよくて、身だしなみがよくて……段々、骨董的な價值が出てくるでせう。ふふふ、そんなあなたが、何故裸同様で舞台上で踊りまくるあたしが好きになつたのか、判るやうな氣もするわ」

そこへ電車が来た。二人は、並んで吊皮をもつた。

「あなたも内心では、時々行儀悪くしてみたいのでせう」

しばらく考へてゐたが、章は頸をふつた。

「思ひすぎかも知れないけど。行儀悪くふるまつてみたい誘惑を感じたからではないの。裸つて、家庭では、行儀の悪い部類でせう。行儀の悪い姿で踊りまくるあたしに、ふつと誘惑を覚えたのではないの。あなた自身あんまりお行儀がよいから」

「極樂に生れることの出来た人が、あんまり毎日が平和で何事も起らないので、ふつと地獄をのぞいてみたいかと考へた、といふ小説があつた。それと同じ、君の見方は文学的だ。そんなときもあるかも知れないが、君の踊りは、行儀のよい悪いを超越してゐることだ」

「だけど、魅力を覚えたきつかけが、案外そんなところにあつたのではないかし

ら。あなた自身に気が付いてゐなくとも」

「まさか」

「もつともそれがあんまりはつきりしてゐては、かへつて困るわ。人妻になつてからも、しよつ中裸で足をあげたり、腰を曲げたり、とびまはつてばかりしてはゐられないんですものね。着物を着ると、平凡な女になるでせう。これが、生地よ。かまはない？」

「かまはない」

「もつと何とか色よい返事をなさいよ。なるほどなあと、騙されるやうなうまい言葉を仰言い」

頸を振つてゐると、東京駅に着いた。のりかへである。雑沓に流されて、二人は地下道を渡る。杉杉子は吉祥寺、章の家は中野にあり、同じ中央線である。一台をやりすごしたあと、二人は並んで腰がかけられた。

「本当はあたし、お行儀のよい人が好きよ」

「ありがたう」

美貌ではないが何となく好感のもてる顔がある。杉子がそれだ。温い、柔和な顔を見詰めてゐた章が、その表情の奥のものを引き出すやうにして言つた。

「君は言ひたいことを氣がねしてゐるね。君の顔は、父のことより、行儀のよい悪いの問題よりも、あの二階で逢つた岸さんのことを訊ねたくてしやうがないと言つてゐる」

上目使ひに、氣持を出した。凶星だと、本人もみとめることになつた。

「するいわ、何故あなたの中から説明して下さらないの」

「何か、遠慮するものがあるからだ。素直に言へないものがある。どうせ判つてしまふのに、君にまでかくさうとする。をかしな心の動きだ」

「悪いけれど、あの方、普通のお嬢さんではないのでせう」

「やつぱり、すぐに判るのだね。僕の聞いてゐる範囲では、あの人が藝者に出てゐたのは、二三年だつた。子供を生む前からすうつと、父と一しよにくらしてゐるのだが、二三年の昔の履歴がいまだに消えてゐないといふことは、おそろしい。もつともあの人の姉さんも、藝者だつた。今では財閥の和歌山家の正妻に納まつてゐるが、僕ははじめて父の家であの人に逢つた時、どういふ事情の人か、見当がつかなかつた。あの人の友達は、みんな金持階級だし、教養もあり、見識も高くて、どこかの財閥の出とばかり思つてゐた。父がどこかのお嬢さんと自由恋愛したのかと思つた。藝者上りの派手な生活ぶりには、何かでお里の知れるものだが、そんなものが微塵も感じられなかつた。すくすくと育つた楓の木のやうな印象をうけた」

「何とお呼びになるの、あなたは？」

「岸さんといふ。出来るだけ呼ばないやうにしてゐるのだが、おばさんでは、を

かしいだらう」

「あなたと同じ年齢とは思へないわ。若いわ。でもあなたよりどつしりしてゐるわね。つまり経験者といふ意味よ」

「僕の頭にある父は、母を通しての父だ。だから岸さんと一しよの父を眺めると、何んだか妙な氣がする。一座してゐると、自分が何か酷薄な眞似をしでかしさうな強迫観念に怯かされる。今に、失礼なことを口にするのではないかと、こはくなる。つい、父に対しては第三者の立場になる。第三者がとるだらう態度になる」

「別居して何年目」

「十年になる」

「その間、一度もお父さま、中野にいらつしやらないの」

「やむを得ない用の時は、来る。母も慣れたものだ。親戚の人でも迎へるやうに迎へる。僕らには考へられない一種の妥協が出来てゐるのだらうね。大抵のこと

は、電話がかかると、僕か、母か、伊豆子が、用を足す」

「離婚問題は起らないのかしら」

「おこす必要がない。母は三人の子供と一しよにくらしてゐる。生活には何の心配もない。いまに孫でも出来たらと、それだけが母の行手に待つてゐる。死別したと思へば、すむことだらう。或は母は、自分の一生は失敗だつたと思つたかも知れないが、女の生涯の中で、女の要素同様に母親の要素は根強いものだと思ふ。女は女を殺すことは、割合らくに出来るのではないか知ら。男が男を殺すよりは、上手に出来る。女もまた女なりといつて、四十前後の未亡人の女をゆすぶつて、火をつけることは、かへつてその人に迷惑かも知れない。母親だけで終る母を見てゐても、それほど氣の毒だとは思はない。母は満足してゐる。だからいま母親をとりあげて、女の自由が與へられたにしても、母は少しもよろこばないだらう。母は、僕と同じ年齢の岸さんと一しよになつてゐる

父を、むしろ氣の毒に思へてゐるかも知れない。そして、安心してゐるだらう」

「安心？」

「父は若い頃、随分道樂をした。岸さんとめぐり会つて、やつと落着いたのだから、その点では、僕らも岸さんには感謝してゐる」

「長男の自由結婚に、寛大な理解をもつ理由が、よく判りました」頭を下げて、笑ふ。

「ところが、父としては、決して安らかではないらしいのだ。岸さんのところには、節といふ子供がゐる。腹ちがひの僕の弟だ。学校に上るやうになつてから、父と母の姓のちがつてゐる事実が、生活の中にはいつて來て、父は困つてゐるらしい。一つには、岸さんの姉の美和さんが、和歌山家に正妻にはいつてゐるため、正妻の位置を求めるのは、人情としても当然だからね」

「そのこと、お母さまはご存知？」

「まだ知らない。知れば、このままではをさまらない。世間体やら、意地やら、プライドやらで、これは大変なことになる」

「と言つて、あなたはそれほど心配らしい風でもないのね」

「僕は、新精神」

「新精神？ それ、何のこと」

「僕らのこと。新精神による人生試験、人生冒険だけを考へてをれば、よろしい」
「もつと説明して」

「これは、父の言葉のうけうりだ。君のことを父に話した時、言下に、よろしいと言つた。原則的によろしいといふ意味だつた。つまり二十代の世代の精神をみとめてくれたのだ。そして今日、君の品定めといふことになつたのだが、あの父だから、長男の嫁の裸姿を見ても、大してびつくりもしなかつたらう。随分思ひ切つた紹介の仕方だつたね。父は生活理論として、先づ自分がさがし求めてつか

んだ人と結婚生活にはいれといふのだ。その生活が、たとへ失敗しようとして、いつかうに差支はない。成功すれば、これにこしたことはないといふ趣旨だ。成功不成功を度外視して、生活をはじめるところに、新精神の意義があるといふ見解だつた。父親として、十分な援助はするといつた。経験者の忠言は、その場合、若い精神を怯懦にするだけだと言つた。経験者の成功不成功を、大して参考にするなといふところが、父の思想のみそなんだが、かなり変つた意見だらう」

中野を乗り越して、吉祥寺の自宅にまで杉子を送り届けるのが、近頃の章の習慣になつてゐた。乗越料金を拂つてゐる彼を待ちかね、改札口を出ると、杉子は腕をとつた。五分ほど歩くと、彼女の家があつた。まだ店を開けてゐる。客はゐなかつた。

「いらつしやいませ。いつも送つて載いて、すみませんね」

色白く肥つた母親が、椅子から立ち上つた。夏間は、氷屋となり、冬の間は和

菓子を並べ、大豆のはいつた安物のコーヒーをのませる店になつた。壁には、さまざまなスチールと、短冊形の品目がところせましと貼りつけてある。冬の間も、氷あづき、アイスクリームの札はかかつてゐた。

「何を差し上げますか」

長身の父親が、奥から顔を出した。杉子は父親似である。子供の七八人も生みさうな、柔和な感じは、母親からうけついでゐる。やがて章は、きちんと腰かけて、大豆まじりのコーヒーをのんだ。彼は行儀よく目をあげて、壁のスチールを眺めた。どれも舞台に於ける杉杉子の姿であつた。女の姿体の中には、このやうな大胆不敵な、それでゐて美しいポーズが発見出来るのかと、スチールに向かふ度に章は、心を洗はれる。豊潤な感じをうける。それには、視角の問題もあつた。舞台を仰ぎ見る場合は、思ひもよらぬ美しい線を発見する。日常茶飯事のない身の動かしの中には、どきつとするほどのみごとな曲線を示す。杉子はみごとな曲

線を、ふんだんにもつてゐる。彼女の心の中にも、今まで人目につかなかつたみごとな線を多分にひそめてゐるやうな氣さへした。

コーヒーの馳走になると、章はかへつていく。両親と杉子が門口まで送りに出る。彼は舞台の人のやうに周囲の目を意識した風に歩いていく。

「感心だよ。小峰さんは、鷹揚で、品があつて、いつだつてきちつとしてゐる。何んて身だしなみがいいんだらうね。カラーに皺のあるのを見たことがない。いつだつてあの人のシャツは、白く光つてゐるよ。靴にも、泥一つついてゐない。胸からのぞいてゐるハンカチも、毎日とりかへるのだらうね。あれだつて、安物ぢやない。少しは見ならふんだね。洋服の脱ぎつばなしはしないでさ」

「あの人、あんな風にしかふるまへないの。氣取つてゐるんぢやなくて、生地なの。あれ、一つきりよ。口惜しくつても、あたしのやうにだらしくふるまへな

「ほんたうにまあ、あんな立派な家柄の方が、どうしてお前みたいなものを嫁にほしいと仰言るのだらうね。玉の輿だが、母さんは、心配だよ。三日目に出されはしないかとね。かうと判つてゐたら、もう少し行儀よく育てるのだつた」

「あたしがあの人に行儀のよさのところまで上るのでなくて、あの人があたしの流儀に降りて來てもらふことに、きめたわ。今日ね、あの方のお父さまに逢つたの」
「お父さま？」

父親以外の人に娘が逢つて來たかのやうな顔を、母親はした。

「章さんをそのまま年とらせたやうな人だつた。章さんも二十年経つたら、あんな人になるのかと思つて、安心しちやつた。いい感じのおちいさんよ。散歩する時には、いつもきちんと帽子をかむつて、ステッキをついて、よそゆきのやうに歩くにちがひないと思つた。外國風にね」

父親が、表戸を閉め始めた。電車が着いたのか、帰宅する人々が、俯向いて、

足早に、幾人も通りすぎた。

3

子供はとうに二階の寢室にひきあげた。應接間兼居間の洋間の静かな空気に、先に、先程からたばこの烟が立ちのぼつてゐる。壁に据ゑつけの長椅子が、二つ、直角になつてゐる。入口の左手には、和風の床がしつらへてあり、栖鳳の軸、白磁の壺は富本謙吉作、草花が投げ入れてあつた。モザイク風の床に絨氈が、濃い緑色で二タ筋走つてゐる。椅子のセットが二タ組。庭に通じる大硝子戸には、ベルベットまがひの重いカーテンが、かつたるさうに垂れてゐた。小峰は長椅子の一つにかけてゐた。昌代は中央の椅子に、ふかく腰をかけてゐる。金杉橋に近いこの邸は、戦災をまぬかれた。門には、小さい看板だが、古典研究所と申訳風

は揚げてある。研究生にはちがひないが、組織立つて、大勢の同好者が集まるといふのではなかつた。何かのまじなひのやうな看板である。もつともこの家にある外國ものの文献は、素人の蒐集の域を脱してゐるので、その藏書を見ただけでも、門の看板がでたらめでない証據にはなるだらう。小峰は、フランス文学古典の研究者である。

女中が、温いレモンテイを運んで來た。昌代は茶碗を鳴らしながら、とりあげた。置く時にも、感情的な硬い音をたてた。彼女は昂奮を抑へようと努めてゐるが、さう努力するしりからぶるぶると顫へた。レモンをのみほした。

「今度のことは、疎開先で、姓名がちがつてゐるのでをかしいと不審がられたことぐらゐでは、すまされないのですからね」と彼女が言つた。「いつかは、解決されなければならぬ問題でした。一日のばしにのばして來たから、こんなことになつたのですわ。今度のことは、いづれ節の問題にもなります。節が結婚する

時に、岸と小峰では、をかしいでせう。姉さんは、いそがすとも、時が解決してくれると言つてくれますが、その時を、ただぼんやりと待つてゐるのでは、死ぬまであたしは岸昌代で過ぎてしまひます。節のことを考へると、あたしも覚悟をきめる必要があります。いつまでも能なしではないつもりです。自分の心からあなたをもぎ放してしまふことは、これでも出来ませんからね。あなたは今日までに、いつたい何を犠牲にして來たのですか。結果は、みんなあなたに都合のいいやうになつてゐるにすぎません。あなたのわがままが入れられて、周囲が泣きね入りしてゐるのにすぎません。いつたい何を、犠牲にしたと仰言るの。家庭が二つある。子供はそれぞれ立派に成人してゐる。自分の趣味は守つてゐられる。食へることに心配はない。あたしは、若さを呈供したのですよ。あなたとこの家を維持していくためには、親不孝のそしりもあまんじてうけてきました。十年間、あたしは生母に逢ひません。逢つてはいけなないと、あなたが言つたからです。あ

たしの犠牲の半分も、あなたは拂つてゐないではありませんか」

小峰に向ける眸は、濡れてゐた。

「あなたはこのままで行けると思つてゐるのですか」

「いや」

「章さんの結婚式を、こちらで挙げるわけにはいきませんか」

「それは、無理だらう」

「それなら、あなたは中野で挙げる結婚式に立ち会はないで下さい」

「章は長男だし、彼がさがした妻を、祝福してやりたい。僕が欠席するわけには
いかない」

「十年も昔から夫婦でもない中野で、あなたは夫婦のやうな顔をして、式に立ち
会ふのですか。それほどまでに世間体を大切に思ふのですか。中野は、あなたを、
敵のやうに思つてゐるでせう。それを、世間体だけに、いかにも夫婦らしい顔して、

神前に立たうと仰言るのですか。あたしは、がまんが出来ません。あなたに、そんな風に良人らしく振舞つて戴きたくありません」

小峰は心を乱されてゐた。覚悟がつかぬ。そのことを彼は、手輕に考へてゐたからである。昌代の不幸を今さらにつきつけられて、言ひ紛らすことが出来ず、立ち上ると、室内をあちらこちら歩き始めた。歩く場合も、彼は端然としてゐた。

「君のいふことは、もつともだ。よく判る」と彼は言つた。「章を祝福してやらないわけにはいかない。章を社会人として送り出してやるためには、小峰家がさうすることは、動かすことの出来ない約束だ。小峰家で挙げる結婚式だ。あれの母は、現存してゐる。あれの母は、この結婚式がたのしみだつたのだ。結婚式から、あの母を除外することは出来ない。遠慮すべきはむしろ僕だらう。しかし、章は、若し僕が列席しなかつたならば、どんなに悲しく思ふだらうか。一生に一度のことだ。今度の結婚は、僕の許可をうけたことで、勇氣が出、母親を説得出

來たのだから、僕が欠席するわけにはいかない。十年間、僕が中野に足を入れてゐないわけでもないのだからね」

「あなたが中野にいらつしやるのを、あたしは何氣なく見送つてゐるとでも思つていらつしやるのですか」

「いや、だから、僕も出来るだけ行かないことにしてゐるではないか」

「財産もまだ正式に分けてないといふあなたのやり方が、情なくて、忌々しいのです」

「それには、技術的な面倒もあるから……」

「そんなものにつながつてゐるから、いつまでもはつきりと出来ないのせう。

中野は、財産を押へてゐるから、平氣で、あなたを手放しておくのです。あなたなんか、要らないのです。新しい法律に従つて、財産を分けてしまへばよいのです。意味ない中野に、いつまでも小峰を名のらせておくのですか。あの人はもう

小峰ではない筈です。そのくせ、小峰の財産を食べてゐる」

「何をいふか、馬鹿なことを」と小峰は叫んだ。「僕から月々生活費を中野がうけとらうが、うけとるまいが、章、伊豆子、丹の母親である以上は、断じて、当然に権利があるではないか。同じことだ。中野は子供にひかされて、十年前、さわがずに僕を手放したのだ。諦めたのだ。周囲で随分けしかけたのもゐるが、おとなしく中野は目をつむつてしまつたのだ」

「あなたが金持だからですわ。あなたが他の女と同棲しようと、子供についてゐる財産、やがては自分のものになる財産の目あてがあつたからです。若しあなたにお金がなかつたらどうなります。案外、子供もすてて、とび出してしまつたでせう。実家にかへつたかも知れないではありませんか」

「仮想することは、よさうではないか」小峰は憂鬱さうにいつた。「仮想すること、問題を発展させたところで、現実の解決にはならない」

「若しかしたら、中野は、いつかあなたが中野に戻つて来ることを当てにしてゐるのではないか知ら」

「馬鹿なことを！」

「ないとは言へません」

小峰は、長椅子に戻つた。この時、昌代は小峰の言訳を思ひ出して、また身を顫はせた。何故この時に思ひ出したのか、自分にも判らなかつたが。昌代を紹介する時、訪問客が若い昌代の妻らしくふるまふのに不審を抱くと、

「若い頃のあやまちです」

客は納得した。その度に、昌代はかあつと血が頭に上つた。あやまちの延長ではないか。あやまちのくりかへしをつづけてゐるやうな印象を、客に與へるのである。昌代の言ひ分では、むしろ三人の子供をなした中野との結びつきの方が、手のこんだあやまちだつたと、小峰の口から言つてもらひたかつた。果して本人

は、あやまちのつもりでゐるのか。問ひつめると、否定された。しかし、窮余の釈明として、時々この言葉が使用された。この言葉の意味をなくするには、昌代が小峰を名乗る以外にはなかつた。小峰と名のれば、「あやまち」も笑つてすまされるだらう。

「一つの財産を、中野とこちらでつつき合つてゐる。たまらない。あなたつて、何てデリカシイのない人でせう」茶碗を口にもつていつたが、すでにレモンはからであつた。いつそう肚立たしくなつた。「財産を二等分することが、どうしてそんなに惜しいのでせう。怖いのですか。新しい法律では、何等分になるか知れないけれど、半分にされても、とても貧乏になつちやふやうな氣がするのでせう。貧乏したことの無い人は、貧乏をこはがるわ。戦争に敗れたら、自分らのやうな階級はどうなるのだらうかと心配してゐたあなたではありませんか。おかげと、あなたの財産はとりあげられずに、あらかた残つたけれど、あればあるで、また

執着……大切なものは、十年間依然として中野に残しておくといふそのやり方に、がまんが出来ません。疎開からかへる時、農家のおかみさんが、今度来る時には、小峰さんになつておいでなんしよと言つてくれた言葉を、あたしは忘れてはゐないのです」

「実質的に僕はここにゐるが、君の言ふことを聞いてゐると、十年間が無意味だつたやうだ」

「山の中で二人ぎりに住んでゐるのとはちがひます。世間があります。岸に電話がかかつて来て、一應それをたしかめておいて、次に、小峰さんいらつしやいますかと、誰だつて訊くわ。その度に不快になつてゐるあたしの氣持も、少しは判つて戴きたいの。いつまでこの不愉快を経験しなければならぬのか、悲しいわ。いまさら中野につくす義理も何もないくせに、あなたの優柔不断のおかげで、あたしはしよつ中肩身のせまい思ひを味はつてゐるのです。これが一年や二

年ならともかく、十年ですわ。あたしもよく辛抱したと思ひます。あたしは、まだ若いのです。いつまでもこの日蔭ものに耐へてゐたくはありません。今度のことは、いい機会です。あなたが結婚式に出席するかしないかで、あなたの誠実と良心をはかります」

「そんなにつきつめて考へなくともよいではないか」

「いい加減に、ちやらんぼらんにしてゐて、かまはないのですか。あなたなんかどうだつていいと、あそびまはつてゐても、かまはないですか。あたしがちよつと男の人と街で逢つてゐたなどと聞くと、顔色変へて、根ほり葉ほり訊くのは、どこのどなたですか。二タ言目には、もとがもとだから安心がならないと、さもあたしが、だらしのない、やくざもののやうなことを仰言るではありませんか。節の事前、恥しい思ひを度々してゐます。まるであたしには、心が許せない、いざといふときの切札のやうに、中野とひつかかりをのこしてゐると邪推されたつ

て、言訳がお出来になりますか」

應へるやうに小峰が、置時計を眺めやつた。そして、立ち上つた。

「もうおせい。その話は、明日にしよう」

「二階に上らないで下さい」

と言ひ、昌代の右手は次の部屋の扉を指した。

「一しよのベッドに休むことは、お断りします。心苦しいんです」

小峰は黙つて、次の部屋にはいつていつた。そこは客用の小さい部屋である。

ホテルの一人の部屋のやうに、椅子と机、寢台には白い蔽ひがかかつてゐる。壁には、マチスの小額があつた。壺には花がない。

「ゆつくり考へて下さい」と扉越しに声があつたが、すぐと、「考へるまでもないことだわ」吐き出した。

「まるでお仕置に遭つたみたいだ」

といふ声が聞えた。昌代は扉に背をつけて、青い、こはい顔をしてゐた。そこにゐる小峰を睨みつけるやうに、兇暴な衝動が胸の中を駆けまはるのを、息をつめて暫く感じてゐた。隣室で、小峰が歩いてゐる氣配だつた。昌代は勢ひをつけて背をはなすと、その拍子にどンドン歩いて、應接間を出た。習慣的にスキツチを切つた。二階に上る階段のところで、

「さち、きよ」

「はい」

「もうお休み、ご苦労さん」

彼女の態度は、いつもと変らなかつた。節の部屋の扉をあけ、闇の中をのぞいた。おとなしく睡つてゐるらしい。夫婦の寢室につづいた自分の居間にはいると、三面鏡に向かつた。無意識に、右の手首を握つてゐた。冷たい。脈も弱く、不整な氣がした。彼女は本氣で、脈をしらべはじめた。

すつぽりとからだのはいりこむ安樂椅子に、半ば寢ころんだ小峰は、夕景の中に点火されていく街を眺めてゐた。丘の上に灯のかたまりの一廓があつた。屋外照明燈も一つ二つ点火されてゐるが、白つぽい、洋風の建物の輪郭はまだ十分にとめられた。以前は水交社として、特殊な人間だけの集まる世界であつたが、今日では日本人以外の人々に使用されてゐる。専用バスが、道路を横切つて出入するのも望見される。この丘と向かひ合ひの丘に、ソビエト大使館が、低く、黒々とうづくまつてゐる。夕方になると赤い旗は下ろされた。二つの丘の間の、谷間のやうなところを電車が走つてゐた。終戦以來、家々は建ち並び、一應街の顔をつくつてみせたが、一步家の裏に出てみると、舞台裏のさむざむしさが展げ

てゐる。夏草が茂つたままに立ち枯れた焼跡、瓦礫の山は、いつ片付けられるのか判らない。ぎつしりと壽司づめに家が建ち、各自の生活がひしめき合はなければ日本人の世界は当分戻つて来ないやうである。

以前は、近くの病院の影で二つの丘を眺めることは出来なかつた。病棟が焼失したために、小峰家は思ひがけない視界を拾つた。ラッシュ・アワーには、壽司詰めの電車が眺められた。視界の中にはいまだに壕内生活者がゐるらしく、錆びたトタンの小舎から、朝夕、白い烟が立ちのぼつた。その小舎を前にして、食料品店と運送業が、新しい大きな看板をあげた。代用燃料車が始動のためにもやす白い煙と、小舎の炊事の煙が混同して眺められる。互に無関心と沈黙のうちに、互の憎悪を生みつけてゐるのではあるまいか。

家の中は静かであつた。子供はどこにゐるのか。昌代は何うしてゐるのか。置き忘られたやうに静かであつた。洋風の建物は、一室ごとに祕密めいて、物音を

殺し合ふ。小峰はいつか星を眺めてゐた。

——お前さんは若い人だ。だから考へだつて若いんだ。炉の中に起こした火の中に、女の顔を見てゐなざるが、わしは火の中に、石炭が見えるきりだ。

——人間の生涯がもう、或る好みの境涯で縛られた習慣に過ぎなくなる年齢が、必ずやつてくるものだよ。

小峰は、ぎよつとして安樂椅子から身を起こした。声にならない声を聞いた。夜はとつぷりと落ちてゐる。原書の中の言葉だつたのか、誰かの翻譯の中でひろつた言葉だつたのか、思ひ出せなかつた。誰の言葉であつてもかまはないが、彼は自分の言葉として聞いた。どういふことからの聯想だつたらうか。胸の中で、しのびやかに昂奮してくるものがあつた。

かういふ時には、きまつて彼は吉祥寺の画家、今泉暁を思ひ出すのである。精神が消耗してゐる時に限る。健全な時には、今泉のことを思ひ出しもしなかつ

た。何かで屈托すると、小峰は吉祥寺に出かけた。南画を描く今泉のそばで、小峰は漫然と話を交はす習慣である。戦争の初期に知合つた友達であるが、小峰より五つ年下であつた。

「あなたは政治に、とくに関心をおもちですか」

小峰は肩を竦めた。

「いけないと思ふのですが、今日は、教育委員の選挙の日でしたね。たうとう棄権してしまいました」

「忘れてゐたのでせう」

「さう、忘れてゐました」

今泉は画筆を措いて、しげしげと彼を見つめながらかう言つた。

「これは、巴里であつた話ですが、或る日、一人のブルジョアが掴つたのです。

コンミュンの話ですよ。すると掴つた男が大声で、みなさん、聞いて下さい、私

は今日まで政治といふものに、これっぽつちも関係してゐなかつたのですと抗議したさうです。それだから尙さらだと、捕へた方の男が答へて、その場でブルジョアは片付けられてしまつたといふのです。私も本で読んだのですが、妙に印象に残つてゐます」

「私だつて、政治に関心はもつてゐないではありません。しかし、一人の私の関心が、果してどうなるのでせう」

「あなたは戦争中、とても心配してましたね。この戦ひのあとが、どうなるのか。つまりあなたの生活がそのまま継続出来るかどうかといふ問題で、ひどく悩んでゐられた。財産が、地位がどうなるか。生活を根柢からくつがへされるのではないかと、さうまるで子供のやうに恐怖に怯えていらしたですね」

「さうです、そのため度々あなたの意見を伺ひに、やつて來ました」

「天皇が残る以上は、あなたの財産は多分大丈夫でせうと、私は答へました」

「仰言つた通り、一應は私の財産は残りしましたが、今度は税金でさんざんな目に遭ひました」

「しかしあなたの生活は変らない。結構なことぢやありませんか。もつとも金利生活者も、これからが辛いでせう」

「問題はそれなんですよ。私にはものを生産する能力がない。生れた時からさういふ能力が興へられなかつた。現在の生活が正しいものだとは少しも考へてゐません。しかし、政治に関心をもつたにしても、さて、どうすればよいのか。私も捕へられて、それだから尙更だと、あつさりと片付けられてしまふ組です。銀行に預けておいた金が、知らないうちに金を生んでくれる。株は配当をまはしてくる。さうした金でくらしをたててゐました。そのもとの金も、私が汗水たらして貯へたものではなく、父親が残していつてくれたものです。あなたの仰言る皮肉は、身にしみて判りますが」

「いや、多分判つてゐないでせう。失礼な言ひ分ですが。私のいひたいことは、終戦となり、あなたの生活の中で突然何かが變化した、といふやうなものが、少しも私に感じられないのです。二十代のあなたと、五十歳のあなたとは、何の相違もない。五十歳だけに考へること、悩むことは深まつてゐるにちがひないのでせうが。私はあなたがただお金持だといふことを非難してゐるのではありませんよ。つまり、いつでも、いつまでも、あなたは人間として結構な生活をしてゐるといふことです。それを問題にしたいのです。たとへば、あなたの極く近くの人の中でも、人間らしく生きてゐない人だつてゐるだらうと思ひますがね」

小峰は安樂椅子の中で、この日の会話を思ひ出してゐた。この友の家に行くとき、かへりには、いつも自分が洗ひ立てられたやうな氣がした。時には耐へがたく、自信を失つてしまふ。或る時には、腹立たしかつた。が、友のしつかりとした口調には抵抗が出來ず、友の言葉を自分がまつ先に承認してしまふのである。不思議

議と逢ひたくなる時があつた。虐められることが判つてゐるにもかかはらず、出向いた。精神的に一種の錯倒した快感が與へられるからであらうか。しかし、そこまで詮索する必要はないだらう。今泉の抽象論が意表外といふのではない。その言葉はどれも、小峰の胸に一應浮き上つてゐる言葉にすぎないのである。

誰かが廊下を通つた。節か。女中だつたやうである。高いスタンドに照らされた彼の姿が、書棚の硝子戸に映つてゐた。三方の壁一杯に書棚がつくられてゐた。七八段もある書棚で、一番上には眞鍮の太い管が横になつてゐて、それに梯子の先をひつかけるやうになつてゐた。三十年間の藏書であつた。この部屋にゐる時の小峰烈が、一番彼らしく見えた。尨大な藏書は、彼の價値を保証してゐるやうに見えた。書物から得たもので、彼の頭脳が豊富になつてゐるといふよりは、書物の方が彼の部分を一冊毎に分担して、あづかつてゐるやうに思はれる。彼は書物に、己の知識と教養を預け放しにしてゐる工合であつた。この部屋にゐる

る時が、彼は一番安心の出来る氣持になれた。

大学を卒業した時、フランスに行きたいと申出たが、父親が許さなかつた。一人子のせりもあり、しかもすでに妻帯してゐた。二十一歳で小峰は、親のいひつけに従ひ、たき子を妻に迎へた。たき子は、岐阜在の大地主の娘である。翌年、章が生れた。彼は己の青春が妻のために束縛されてゐるといふ風に感じた。妻帯してゐることが、学友に知れわたるのを恥ぢた。章は、両親に任せきりだつた。二十二歳の彼が、章を抱いてゐる図は滑稽であり、何かの痛切な諷刺のやうであつた。しかし家庭を嫌つて、放蕩をするといふことも出来なかつた。子供が出来ても、小遣は母親にもらつてゐた。自分で金をかせぐとか、稼いでみたいといふ意慾をもつことから全く切りはなされた生活環境に慣らされてゐた。

大学を一しよに出た友達は、それぞれ自分の力で生活をたててゐた。譏諷家になるのもあり、新聞、雑誌記者となるのも、会社につとめるのもあつた。小峰だ

けが、何もしなかつた。同窓会があり、出席すると、友達はそれぞれの生活に従つて、それぞれ変り方を見せた。彼らは生きた現実の中にとびこんでゐる間隙のない烈しさを挙措動作に現した。恋愛で苦しんでゐるのもあつた。新婚で、幸福らしいのもあつた。小峰だけが旧態依然として、誰よりも自分が年をとつてゐるやうな錯覚に陥ちた。

「小峰のフランス語を、そのまま埋めておく手はないぢやないか。何か訳したらどうだ。俺の社でもらつてもいい。金持の道樂にしちや、小峰のフランス語は、全く惜しいからね。もつとも金持だから、翻訳で食ふ必要もない。自分ひとり原書でたのしんでをれば、すむのだらうね」

小峰は、ただ微笑してゐた。

母校で先生をしるとすすめる友達もあつたが、講師となるにも、それぞれの手づるが必要であり、單に語学力が優秀であるといふだけでは、講師に就職できる

ものではなかつた。政治的に教授間にわたりをつけねばならなかつた。そんなことまでして講壇に立ちたいとは思はない。

父親が死んだ。翌年、あとを追ふやうに母親が、急性肺炎で亡くなつた。彼は一家の責任を背負はされたが、背負ふほどの重味は感じられなかつた。利殖のためにあくせくとする必要はなかつた。銀行では、ひとりでに金が生れてきた。地代が上つてくる。貸家賃が流れこむ。不在地主である彼のもとには、田舎から米や金子が送りこまれる。有利な株は、ひとりでに配当を重ねる。彼はただ、はいつてくる金を始末すればよかつた。金が自由になるところから、友達に誘はれ花柳界に足を入れるやうになつた。忽然と愉しい世界がひらけた。しかし、彼は耽溺をしなかつた。彼の放蕩を妻が知るところとなり、家庭騒ぎになつた。伊豆子と丹が生れてゐたが、妻は度々実家に戻つた。妻の自尊心を傷つけたといふ理由のために、放蕩をやめる氣はしなかつた。妻の憤怒におそれをなして、放蕩をし

ないと誓ふ氣にもならなかつた。彼は彼だけに通じる口実で、家庭を大切にしているつもりであつた。

一ヶ月も岐阜の実家に戻つてゐる妻が、突然に戻つて来る。小峰はそれほど安心もしなかつた。離婚などは毛頭考へられなかつた。第一、離婚といきまゝ妻の心の持ち方が、滑稽に思はれた。女の自尊心と屈辱が、單に男の放蕩にかかつてゐるといふ限定が、をかしいのである。それ以外に、女性には屈辱を感じる余地と、能力がないものであらうか。もつとちがつた、のつびきならぬものの存在もあるやうに思はれる。

派手ではないが、小峰の放蕩は続いた。花柳界だけでなく、銀座の酒場を歩くやうになつた。学校友達の中には、立派に大学の教授となつたのもあり、雑誌の編輯長、翻譯家として名を馳せてゐるのもあつた。小峰は何もしてゐなかつた。

戦争が大仕掛になつた頃、小峰は昌代を知つた。彼は四十三だつた。二十二年

下の彼女は、長男と同じ年齢である。座敷で逢つてゐる時には、それほどなかつたが、初めて函嶺に泊つた時、小峰は牝豹を感じた。これまでの生活感覚にないものを感じて、これは大変なことになるぞといふ氣が強かつた。それだけに昌代を知つたよろこびは大きかつた。

落籍した。そのことが、妻に知れた。

「いつまでも女狂ひでもないでせう。聞けば、今度の相手は若くて、章と同じ年といふではありませんか。恥しいとはお思ひになりませんか」

小峰は、一ト言もなかつた。

「お母さまがおなくなりになつてから、急にあなたの身もちが乱れはじめました。監視がなくなつたので、急に氣がゆるんでしまつたのでせう。あの時、思ひ切つて実家にかへつてゐましたならば、この年になつて、こんないやな思ひはしなくて済んだのでした。いつまでもやまない主人の恥を、さうさう、岐阜へ報告

しにいくことも出来ません。私の決断力のなかつたことを、悔むより他はありませんわ。今からでも遅くはありません。その相手とお別れにならなければ、私は別居させて貰ひます」

「何もそれほどのことではないではないか」

「さう仰言るのは、殿方の方の理窟です。女親としては、子供の教育の手前もございます……」

「別居しては、かへつて子供たちに父の醜聞を知らせるやうなものだ。それでは、世間体も困る」

「何の造作もないことではございませんの。あなたがその相手にお金をやつて、手をお切りになれば済むことですわ」

「ところが、もう遅いのだ」

「どう遅いのでございますか」

「妊娠してゐる」

妻は睡をのみ下して、蒼白になつた。

「お金で万事が片が付く世界ではございませんか」

「考へさせてほしい」

妻の氣性は、いつたん腹を立てたとなると、一週間も口を利かないいつこくなところがあつた。それでゐて子供達に対しては、いつもと同じである。笑ひ興じるといふことはないが、ふだんから妻は、笑ひ興じるといふことがない人間である。笑つても、僅かに顔が崩れるだけで、小さい笑ひは顔に現れなかつた。小峰はそれをいいことにして中野の家をとび出した。何日もかへらなかつた。

赤羽橋近くの洋風建を買ひ、小峰は中野から藏書を移した。妻は泣きね入りである。彼は週に一回は、中野にかへつた。泊ることもあり泊らない日もあつた。妻とは、いつからか夫婦でなくなつてゐたが、妻はいつこくな氣性をますます深

め、もはや自分ではどうにも手のつけやうがなく、こじれてしまつた。こじれたままで一應は表面協調が出来たやうに見えた。夫婦でなくなつた夫婦が顔を合はせても、それほど不自然に映らないやうになつた。妻の内訌する性格を、彼がまんまと利用したといふ結果になつた。父の残した書画骨董や、株券、預金その他の大切な証書などは中野に残し、必要に應じて取りにくることにしてゐた。彼としては、中野の家も大切にしたかつた。子供をないがしろにしてゐるのではないといふことを、さうすることで、自分にも言ひきかせておきたいのである。妻はすでに、家の附録にすぎなかつた。

もつとも彼にそれだけの思ひ切つた眞似をさせたのには、いい参考があつた。古い友人で、最近妻と別居したのがゐる。社会評論家で、子供が二人もあつた。秘書として女を雇つてゐたが、友達は秘書の聰明を愛するやうになつた。年は妻より少しだけ若い、顔もすがたも、妻の方がすぐれてゐた。

「女の魅力は、顔立ちだけではない。心の問題だ。頭の問題だ」

と、友がしきりと言ふやうになつてゐたが、祕書に次第に心を惹かれてゐた最中である。妻は子供をかかへ、絶対安全の立場に立つてゐる。安心し切つてゐる。良人の心に今更に何等作用を與へる必要も心配も感じない。安堵して、油断をしてゐる。祕書は友の性格をのみこみ、共鳴感を友達の中の心の中に呼びさましてしまつたのだ。友達の心そのままに考へることが出来るやうになり、行動がとれるやうになつた。祕書がゐなくては、片時も友達に心が休まらなかつた。分身といふ言葉がある。友達が朔太郎の詩を暗誦する。すると祕書は美しい声をはりあげて、唱和する。妻は頭痛がするといひ、頭をかかへて、四疊半にうづくまつてしまふのだつた。祕書をつれて、友達は度々講演旅行に出た。その結果、友達は妻と別居することになつた。祕書が友達をそそのかしたのではない。友達の心が自づとさうしないではゐられなくなつたのだ。妻には、月々の生活費を送る固い約

束であつた。

「主人の女ぐるひは、何も今にはじまつたことではありませんわ。もう二十年近くも、女出入りで苦しめられてきました。でも、今までは、必ずかへつて来てくれました。いつかはかへつて来てくれますので、苦しい思ひは辛抱して來ましたが、今度だけはさうはいきません。今度は主人の仕事と関係のある相手ですから、戻つてくることはないだらうと、諦めてゐます」と、妻は語つた。

愛情を失つた家庭を解消するにも、やはり勇氣は要るものである。愛のない生活は虚偽であり不自然だと改めて主張はしなくとも、辛抱が出來なくなれば、自分の本心に従ひ、別れる妻に対しては出來るだけの合法的な責任をもつて処置をとることは、また聰明な生き方にちがひない。家事審判所も、それ以上の解決は下せないではないか。友達は月々妻子がくらししていけるに足る金を、送つてゐるといふ。世間体をおそれたり、己の優柔不断から、自分も妻も祕書までも、泥田

にはまりこんだやうな苦惱をなめる生活は、不聰明である。小峰は、友の勇敢に刺戟をうけた。

急用がある時は、章が、赤羽橋の家に父を訪ねて來た。
そして、節が八歳になつた。

5

呼鈴が鳴つた。女中が扉を開けると、和服の、顔の小さい夫人が立つてゐた。
「お待ち申上げて居りました」

女中が引きかへすのにぶつかる勢ひで、應接間から昌代が出て來た。紫地に、大輪のきくをあしらつた袷である。大柄なので、いつそう若々しく、襟足は強く搔き上げられてゐた。そこが蒼白い。

「お電話ありがたう。待つてたわ」

姉の手をとり、

「あたしの部屋にいきませう」

「小峰さんは？」

「留守」そして、ふふふと笑つた。

「何かあつたのね。意味ありげな笑ひ方？」

頸をふりふり、二階に上つたが、その表情が肯定してゐた。

「一しよになつて初めてのやうな言ひ争ひをしちやつたの」

「いけないわ。おとなしい小峰さんをいちめては」

「虐められてゐるのは、あたしよ」

「節ちゃんは？」

「学校」

子供への土産を、そのテーブルにのせた。

「何といつたつてあなたには、節ちゃんがあるからいいの。子供のないのは、淋しいわ」

「もともとあたしつて、鼻つばしが強いんだけど、節がゐるため、いつそう烈しいやうね。ゆうべも、そのことを考へてたの。節のためにも、ぼやぼやしてゐられないつて」

「いつたいなにが起こつたの」

「つまり独占慾の問題ね」

よく判らないといふ顔を、美和はした。

「章さんが近く結婚するのよ。その時には、中野の奥さんと小峰が、夫婦となつて列席するといふので、爆発しちやつたの」

姉は頸を傾けてゐたが、

「形式的でせう」

「それが、癢にさはるの。いまさら何の形式？ 奥さんでもない人を奥さん扱ひにするといふのも、結局は、小峰の弱氣がさせることではないの。いつまでも中野とくされ縁をもつてゐるから、こんなことになるんだわ。別れたのならちやんと別れてしまへば、いいのよ。相手の奥さんだつて、さだめしくすぐつたいだらうと思ふわ。そんなことして、いつたい誰を欺すつもりかしら。みんな知つてゐるとでせう。大神宮さまを騙すつもりか知ら。誰だつて、内心をかしがるだらうと思ふわ」

そこへ、女中がレモンが紅茶にとける匂ひを運んで來た。

「だけど、章さんは小峰さんと中野の間に出來た子供だから」

「それは、常識論よ。あたしがこの間小峰と衝突したのは、もつと本質的な問題だつたわ。愛情の問題よ。お姉さんもやはり家といふことに、拘泥るのね」

「それぢやどうするの。どうしたいの」

「結婚式には、小峰に出て貰ひたくないの。どうしても出席したいのなら、あたしをつれて出て貰ひたいの。結婚式を二度あげたらいいのよ。そんなに拘泥するな。よ。大神宮さまは、悪く云ふかも知れないけれど、正直に振舞つた方がいいのでせう。一つは、中野の奥さんだけの式で、もう一つはあたしと小峰が出るのよ」

「そんなこと出来ないわ。第一、世間体が……。わざわざをかしなことを吹聴するみたいでせう」

「一方を披露会なみにすればいいでせう。それでも妥協が出来ませんか」

「あたしは、小峰さんに同情するわ。父親役をつとめるのだから、その日だけ小峰さんを貸してあげると考へたら、いいでせう」

「貸賃は、高いわ」

「昌代さんは、少しわがままよ」

「正直なのね。お姉さんは、古いわ。相手が何かしてくれるまで、ちつとおとなしく待つてゐるといふ性格でせう。さういふ生活は、あたしには出来ないの。総てが、さうでなかつたら無よ。節のためにも頑張る必要があるんだけど、本当はあの人を独占してしまひたいの。さびしいわね、あたし、この頃とてもやきもち焼きになつたわ。年をとれば、嫉妬は弱くなるものと考へてゐただけど、あべこべね。小峰が中野にいくのが、がまんならないの。章さんがお嫁さんを迎へると、当然中野が賑やかになるでせう。伊豆子さんや丹さんもゐる。そんな賑やかな生活に、ふつと小峰が愛情を感じて、これからしよつ中出かけるのではないかと、怖い。節がお嫁さんを貰ふには、まだ十五六年もあるんですね。小峰の五十歳が、段々と怖くなつて來たのよ。かういふ氣持、お姉さんに判る？」

「昌代さんに信賴が足りないからではないの。愛情が足りないのと違ふ？ あたしは、和歌山を信賴してゐたわ。たとへ生涯かけの人間でもよいと、あの人を信

じて、愛してゐたわ」

「そんな心細い生活は、がまんが出来ない。だから男が、いつまでも、いい氣になるのだと思ふわ。信賴するには、それに報いるだけの裏打がほしいわ。このあたしにつくしてゐてくれるといふ証據がほしいの」

「さういへば、昌代さん、お母さんのこと聞いてる？」

「いいえ、お母さん、どうかしたの。ちつとも消息を聞かないわ。聞かない約束で、あたしはこの家に來たんだけど」と言つてゐる内に、あらたな火の手があがるのだつた。「あたしは、自分の生みの親と絶縁を承諾したのよ。小峰は、そのことを忘れてゐるのか知ら。お母さんのやうな人が出入しては、困るといふので、あたしがこの家に來た時に、以後出入をとめると、お金をやつて、お母さんを諦めさせたのぢやないの。あたしは、そこまでがまんしてゐるのよ。そんなことつて、ある？　あたしは、自分の幸福のために、生みの親を侮辱してしまつたわ。」

出入するなとつき放してしまつたのよ。それもみんな小峰がさうしろと言つたからよ。親子の關係が、金銭で片がつくと考へてゐるのか知ら。あたしもまだ若かつたから、その時のお母さんの心持を理解することが出来なかつたけど、娘の仕合はせのためなら、自分は今後一切出入はしませんと引きさがつたお母さんの心持が、今ではよく判るの。悪いことをしたわ。それはあたしたちのお母さんは、下町育ちの、口やかましい、品の悪い、娘を藝者に出すやうな親だから、小峰家とはまつたうな交際は出来ないでせうけれど、あたしの親であることには間違ひないんですものね。親を侮辱するだけでなく、あたしまで侮辱してしまつたんだわ。お母さんが何故そのやうに侮辱されなければならなかつたのかといふと、つまりお母さんは、貧乏で、飢ゑといふものを経験したためちやなかつたの。人間として豊かに生活してゐる人間と、人間らしく生きてゐなかつた人間との相違だつたのでせう。どうして八年昔に、小峰のいふままにお母さんと絶縁してしまつ

たのか、不思議でならないわ。さうでなかつたら、お母さんのやうな人間は、いつまでたつても苦しめられてゐることになるんですものね。それで、お母さん、いま何してるの」

「茂一が何かブローカーして、ひどく損をしたんですつて。資本を融通してほしいらしいの。お母さん直接の話でなくて、人を介して話して來たの。今日は、その相談もあつたの」

「遠慮はいらないから、あたしは、公然とお母さんを援助してやるわ」

「あたしは、小峰さんにも相談するつもりだつたの」

「あの人、いまさら何を出すのですか。お金持つて、けちね。普通人以上に、けちけちするわ。この間、銀座に出てお友達に逢つたものだから、あたしがおごつちやつたのよ。二千円ばかりよ。さうしたらお友達の中に若い男もまじつてゐたと知つて、おごる必要はなかつたと言ひ出したの。おごるなら、男のゐる相手

の方だつて。あんまりしつこいから、それぢや今からいつてその金を返してもらつて來ますといふと、いますぐいつて返してもらつて來いだなんて……賣言葉に買言葉だつたけど、呆れちやつたわ」

「小峰さんは、何も仕事をしていらつしやらないから、お金が大切なのね。そこをよく判つてあげなければ、お氣の毒よ。これが、何か仕事してゐて、何万とはいつてくるやうな生活だつたら、あなたのお小遣にもさうけちけちなさるものですか。あなたのところでは、やはり筍生活でせう？　持物が豊富だから、筍生活も慘めに感じられないでせうけど」

「さうなのよ。小峰が五十になる今日まで、生活能力を何一つもつてゐなかつたといふことが、不思議だわ。でも、いざとなれば、翻譯だつて出來るんだから。でも、それさへしないのよ。をかしな人ね」

昌代が椅子をはなれた。恰度その時、女中が果物を運んで來た。昌代が一冊の

本を、テーブルにのせた。美和がとりあげると、新しい民法の早判りといふ本であつた。

「こんなものよんで、どうするの。單なる勉強？」

「小峰をおどかしてやるの。個人の自由を主張する時に、役立つわ。いざとなれば、家事審判所にもちこめばいいのでせう。さうすると、小峰の財産の三分の一は、あたしのもことになるわ。小峰はあたしを、裸のままはふり出すことは絶対に出来ないんですからね。法律が味方してくれるからと言へば、あの人の優柔不断な、八方美人の考へ方も土台から崩れてしまふでせう」

「この本をよんでゐること、小峰さん、知つてるの」

「知らないわ。自分ではさかんに勉強してゐるけど。お金持には、また別の心配もあるらしいわね。財産を分けることが、また一ト苦勞らしいわ」

「それに愛情がからんでは、ますますむつかしくなるばかりね。昌代さんは、そ

の本をすててしまつた方がいいわ。新しい民法を知ることが、大切だけど、それをふりまはすことは、別ですからね」

「それぢやこの本お姉さんに上げます」

「ありがたう。あなたと小峰さんの場合は、もつと美しい筈よ。きれいなものよ。金銭だけでつながつてゐるのではないわ。いまにあなたの安心の出来るやうになると思ふわ」

「籍の問題でせう？」

「さう、それも自然と片付くでせう」

「新しい民法では、姓がちがつてゐてもよいことになつてゐるのだけど、あたしは頭が古いのかしら。やつぱり小峰になりたいの。さうすることが、小峰を完全にあたしの方に引つぱることになるんですものね」

呼鈴が鳴つた。間を置いて、

「ただいま」

節の元氣な挨拶がひびいた。学校へ出ることが、両親のためだといはぬばかりに、当てにした声であつた。昌代がとび立つやうに廊下に出ていつた。

6

間に六曲一双の金屏風が、両家の顔顔をかくしてゐた。誰も話をしない。やがて結婚式場に案内されるのを、役者が舞台の出を待つてゐるやうに待つてゐる。右手の先頭が新郎の章、次が仲人の松川博士、小峰烈、妻のたき子、伊豆子、丹、叔父、叔母、屏風の向ふ側は、新婦の杉子に仲人の松川博士夫人、父親、母親、長男、親戚、杉子の友達で踊子の松枝江子。めいめいが金屏風を眺めてゐた。結婚式といふ生涯に一度の嚴肅な感激を味はふために、呼吸をととのへておく必要

があつた。小峰は、平凡な感慨にふけつてゐた。三十年前、彼も新郎として夢のやうな昂奮を味はつたものである。その日の列席者は数へ切れないほどの盛会であつた。自分の結婚式でなく、両親の式のやうであり、小峰家のためのものであつた。結婚の自覚など、まるでなかつた。彼は大人の言ひつけに従つて、大人の眞似をしてゐるにすぎなかつた。新婚旅行には、年とつた女中がついていつた。家のために結婚させられた不合理を思ひ知るには、夫も妻も三十年を経験しなければならなかつた。小峰は、長男をそつと眺めやつた。自分の若い頃に面影をそのままにうけついでゐる章は、さすがに昂奮から、いつもより窮屈な顔をしてゐた。三十年間の無駄をもたない小峰のまたの姿のやうである。しかし、妻の胸中にも三十年間の苦い後悔が去來してゐるであらうと考へると、小峰は何氣なく妻を眺めることも出来なかつた。

やがて、一同は式場に案内された。新婦は洋風の花嫁姿である。清淨な白の包

みに、杉子は包まれてゐた。彼女の両親は、借物の紋付に身を固めたやうで、いかにも商人くさくみえた。小峰家の財産や地位に対して、恐縮しきつてゐる。卑屈なくらゐるだが、ほかのどのやうな表情を借りたところで、卑屈以上に似合ふとは思はれなかつた。小峰家に思ひこまれたことが、何かの間違ひであつて、この訂正はいつでも発言されるのだと、それをおそれてゐる風であつた。いつそ、訂正された方が両親はかへつて安堵するのも知れない。が、新婦は両親の不安を裏切つて、自信にあふれてゐるらしい。舞台生活に慣れてゐるせるか、彼女はおびえず、恥しがらずに、小峰一族の顔を眺めやつた。その仕方は傲慢でも、浅薄でもなかつた。二十歳が、誰もが承知しないではゐられない特権のやうなものが感じられた。小峰烈は、氣持がよかつた。少くとも新婦は、章をとりまく生活環境に対して怯えたり、卑屈になつたりはしてゐないのだ。言ひかへるならば、彼女の若さが小峰家の家の資格をみとめてはゐないのである。彼女が目ざしてゐる

のは、章ひとりである。その氣配がわがままに卒直に判るので、小峰は心丈夫であつた。

新郎新婦は、嚮導する紋付の女性にみちびかれて、中央の席についた。仲人も中央に移つた。式は、すすめられた。祝詞があげられる間、一同は屹立して、頭を垂れた。小峰は、上目使ひに、神殿の模様を眺めやつた。三室に土のついた野菜がのつてゐた。神殿は何百、何千組の挙式で、結婚式すれがしてゐるやうだ。

小峰は、三々九度の盃を交す章をうしろから眺めて、胸中、何が去來するだらうかと想つた。うるさい式の形式に反撥を感じてゐないとも限らない。結婚式を嚴肅に印象づけるためには、式の面倒も或る程度必要であらうが、これからは、もつと簡單にならなければいけないと思つた。最近友達が仲人をして、弟子に当る男に妻を迎へさせたが、式場も友の家であり、友の妻が三々九度の盃をみたす役割をうけもつた。友夫婦と新夫婦の四人で式をすませた。それでも結婚式の本質

にもとつてゐるわけではない。金を出し、割込み、いそがしく挙式するよりも、尊敬する先輩を仲人にして、自宅で式を挙げる方が、どんなに本人には神聖な感激が味はへるかわからない。友の妻は三々九度の方法を忘れたといひ、その日までに結婚式の参考書をよんで、暗記したといふ。

「親族固めの盃を、お願い申します」

嚮導役の声で、一同は盃をあげた。その時には、小峰家の列に杉子は章と並んで掛けてゐた。小峰は商人じみた夫婦に心から頭を下げ、盃をあげた。

記念写真をとる段になり、小峰は、この写真は昌代に見せてはならないと、昌代の顔を思ひ出した。今朝から昌代は、外出してゐる。小峰の列席をとめることが出来ないとなると、行先を告げずに家を出た。妥協の方法はなかつた。どう妥協がつくものか。シャッターが切られた瞬間、小峰は憂鬱な表情をしてゐた。

ひきつゞいての披露宴では、小峰は杉子の父親と並んだ。仲人が形式的に、新

郎新婦の紹介から、その両親の上にもまで及んだ。やめてくれればよいと、小峰は苦にした。妻は不断のやうに表情に乏しく、喋らなかつた。伊豆子や丹が話しかけると、仕方なしに返事をするといふ程度で、章の結婚式をそれほどよろこんでゐるとは見えなかつた。或る程度の満足をしてゐるにはちがひない。小峰は妻の様子を氣にかけないことにしてゐる。妻はさういふ性格である。近頃、贅肉がついた。顔にも肩にも腕にも、もりもりと肉がつき、精神的にも或る種の自覚をもつた風である。妻の役目を放棄して、母親だけの役割になれば、女性のからだはかうも変るものか。小峰は笑はない妻を見て、ふと、三十年前、小倉百人一首をとりに合つたときのことを思ひ出した。小峰も小倉かるたには自信がある方だつたが、妻は詠み人の名がよみあげられると、とたんに手を出した、これには、敵はなかつた。今でも小倉かるたの詠み人をいちいち覚えてゐるだらうか。

明るい内に、彼らは引きあげることが出来た。妻は中野にかへつた。弟妹と杉

子の友達、それに小峰烈が東京駅に送ることになった。二台に分乗し、あとのに小峰と章と丹が乗った。

「章たちは、今後出来るだけ自分らの力で生活をたてるやうに努力しなさい。七千五百円のサラリーで、生活はむづかしいが、不足の分は勿論補助してあげる。しかし、己の努力で自分らの生活を営んでゐるといふ自覚だね、それを忘れてはいけない。これは、私の悲願でもあるのだ」

章は靜かに父の顔を見た。

「お父さんには、それが出来なかつた。出来なかつた人間としての欠点に、いまごろになつて痛切に思ひ知らされてゐる。私の時代は、私のやうな人間も、いつでも、いつまでも人間として結構な生活がしてゐられた。不合理だつたわけだ。お金があつたからだ。そのため私は貧しくなつてしまつた。判るだらう？ 丹にも、判るだらうね。丹は二十一だ。私が結婚したのは、恰度丹の年齢だつた。そ

んなことが丹に考へられるだらうか。三十年前の二十一と現在の二十一歳が、それほど違つてゐるとは思へないからね。お父さんが五十年かかつて、この心の中にうちこんだ感情の中で、いま残つてゐる強いものは、自己保存の本能だけだつた。しかし、それも親からゆづられた財産をいかに保存するかの本能だけが發達してしまつたやうだ。滑稽だらう。つまり虚栄心だけだつた。しかし、それもどうやら段々と終末に近付いて來てゐる。お父さんのやり方では、財産保存の本能すら役立たなくなりさうだ。世の中の動きの方が、早くて烈しすぎるからだ。おそろしいものが、そろそろ頭をもたげかけてゐる。それも仕方がない。私の過去は、一方で金に執着しながら、一方では浪費と華奢と快樂を追ふだけの生活だつたからね。私は、典型的な消費者の生活だつた。どうだ、お父さんの顔つきは、消費だけで生きてきた顔だらう？」

内容ほどの重苦しい調子でなく、小峰は二人の子供に笑顔をふり分けに向けた。

「お父さんはいつたい何がいひ出したかつたのか。さうだ、章に私に出来なかつたことをしてもらひたかつたからだ。いまの章のサラリーでは、勿論食べてはいけない。食べられないところを補助するのは、親の役目だが、問題は、自分の汗で生活を建てるといふことを強調したかつたのだ。平凡なことだ。小峰家の財産を当てにしない精神だ。判るね。お父さんも、大学を出た時にどこかに勤めに出ればよかつた。何でもないことだ。誰もがしてゐることだ。いいかね、手段といふことはいつも結果と混同されるものだが、魂とか、精神といふものの存在を軽視してはいけないよ。結局は人間生活は金銭で動かされるものであるにしても、魂や精神の存在まで無視することは出来ないからね。これはお父さんが身をもつて経験して來てゐる。結婚の門出にとんだ抽象論をもち出したが、お父さんは、章が世間人としてちゃんと働いてゐて、そして結婚してくれたといふことが、嬉しいのだ。自分で自分の妻をさがしてくれたことが、何よりも嬉しい。小峰家と

すれば、それ相当の家柄の娘をと考へるのが常識だが、章が勇敢に、こともなげにそれを打ち破つてくれたことが嬉しいのだ。お父さんの生活の裏返しを歩いてくれるのが、ありがたいのだ。何のことはない、お父さんの最近の心境を語つたといふことになつた……」

二人の子供は、おとなしく聞いてゐるだけであつた。話は切れた。自動車が東京駅についた。

着換へした杉子を中心に、友達と伊豆子が笑ひながら男たちを待つてゐた。

伊豆子はもとからの友達のやうに、杉子に話しかけてゐる。伊豆子の方が二つ年上だが、家の形式では、姉さんと呼ばねばならないのだらう。前もつて伊豆子と丹は、章に相談して、姉さんと呼ばないことに極めてゐた。その方が自然だといふので、兄妹の間では快く極まつた。杉子も名を呼ばれることに賛成である。年下の人間が姉として振舞ふことから、何かと不合理が生じる。家の觀念が、その

不自然に味方して不合理を深めるといふ愚は避けたい。呼び方一つにも、思ひがけない、違つた雰囲氣は生れるものである。

新夫婦を送りこみ、小峰は子供と杉子の友達をつれて銀座に出た。フルーツ・パアラ―を出て、小峰は子供たちと別れた。

丹と伊豆子が、銀座を歩くことにした。

「お父さん、苦しんでゐるらしい。自動車の中で、珍しく昂奮してゐた。何かあつたのぢやないかしら」

「別れる時、そんなにたのしさうでもなかつたわね。あたしの想像では、今日お父さまが結婚式に出られることを、赤羽橋の女性は、機嫌よく出してくれなかつたのではないかと思ふの」

「さうかも知れないが、お父さんの悩みは、もつと深いところにあるのではないか。つまりお父さんが、古い型といふことになるのさ」

「あたし達は、お父さまの行動を、一定の距離をつけて眺めてゐられるけれど」
「だつて、姉さんはお父さんのことで、センチになつたり、泣いてたこともある
ぢやないか」

「少女時代は、あれでいいの」

「今ぢや、いのちと力ではり切つてゐるといふの？」

その頃小峰は、屠所にひかれる羊の思ひを味はつてゐた。

7

扉の上に、角燈がはめこみになつてゐる。玄関の内側と外側を同時に照らす。
普通よりは明るめの灯がはいつてゐる。不断は消えてゐるが、主人の外出には、
あかあかとともつてゐた。小峰烈は呼吸を整へて、呼鈴を押しした。廊下を駆け出

してくる小さい足音が聞えた。

「僕が明ける。僕がする。お父さんだ。きつとお父さんだ」

節が、女中に代つて鍵を外した。

「お母さん、まだかへらないの。僕、ひとりでごはん食べちゃつた」

「さうか、感心、感心」と小さい頭に手を置いたが、小峰の顔付は暗れなかつた。

「どこへ出かけるとも、言ひのこさなかつたのか」と女中に訊いた。

「奥さま、何とも仰言らずにお出かけになりました」

章の結婚式が挙行された今日、昌代がずつと家にゐられなかつた氣持は、よく判る。二人の間では、その話についてゐなかつた。小峰が強引に、押し切つた。

さうするより他はなかつたのだが、昌代の心に兇暴な火をつけてしまつたのはたしかである。己が仕業だと、臍をかまねばならない。小峰が手を洗つてゐる間も、節は何といふことなしに父のそばにつきまといつた。夜になるまで、両親に捨てて

おかれた淋しさを取りかへすためには、節としてはもつともつと何とかしなければならなかつた。

小峰が食堂のテーブルにつくと、向かひ合つて節が腰をかけた。テーブルに両肘を張る。小峰は箸を動かすよりも忙しく、節に應へねばならなかつた。

「章兄ちゃんのお嫁さま、ダンスの大先生だつて本当？」

「大先生はをかしい。ダンスはたしかにお上手だ」

「お母さんよりお上手？」

「お母さんもダンスには、なかなか自信のある方だが、章のお嫁さんのダンスは大勢の人に見せるダンスだから、同じ踊りでも、性質がちがつてゐる」

「丹兄ちゃんも、伊豆子姉ちゃんも、ダンス、お上手になる。僕も、覚えよう。

僕、ピアノはいやになつちやつた」

「いけません。ピアノはつづけてやらないと、指が固くなる。お父さんのやうに

なつてからは、とても弾けない。今の内は、お父さんたちに無理やりにやらされてゐるのだけど、節が大きくなつたら、きつとお父さんたちの強制をありがたいと思ふやうになる。ピアノはやめてはいけない。ダンスもピアノも、どちらも大切な音楽なんだから、一方だけをして、一方をすてることは出来ない」

章夫婦がいづれ近い日に挨拶に現れるであらうと、その時のことが彼にはまた一ト苦勞であつた。昌代が素直に歓迎してくれるとは思へなかつた。昌代に強ひることは出来ない。それは彼女の性格を、ねち曲げることであり、昌代でない女に仕向けることであつた。ねち曲げられたり、変る必要があれば、彼の方でいくらも変化してしまひたいのだが、出来事は彼の過去が勝手に成人して、当然行つたことであり、過去にさかのぼつてまで、わが身を変へることは不可能であつた。どうにもしやうのないことだつた。しかし、或る期間が過ぎれば、それほど氣にかからなくなるだらう。と言つて、今日一日の出来事を、昌代に辛抱しろと

か、小さく考へよと強ひることは、出来ない相談だつた。小峰は、子供の就寝時間、間に気がつくと、二階に送つていつた。子供は自分のベッドにとび上つた。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

枕許のスタンド・ランプを消して、小峰は廊下に出た。ついでに夫婦の寢室をのぞいた。見慣れた調度品が、そのままにあつた。寢台のカバーは清潔であり、夫婦の愛情が逆流してゐるといふものものしさは、どこにも感じられなかつた。馴染みぶかいものであり、心を静めてくれるもろもろの準備が、不断どほりに出来てゐる。一投足、一挙手で、小峰は安らかな平常の心境にもどれさうな氣がした。彼には突然、この部屋の主人公が、不案内な、逞しい女性に感じられた。以前のやうな、細つそりとした、脆さうな、顔の蒼白い娘ではない。いかにも成熟した、美しい、力強い女性であつた。節が生れた当時、彼女の胸は巖のやうに頑

丈に、そこだけが特別に大きくつき上げるやうに太つたものである。段々と胸の
不均衡な太り方は直つていつたが、いつなん時、再びあのみつともない鳩胸に肉
をつけるか知れないのである。油断の出来ない肉体であつた。自由にならない別
の生き物であつた。逞しい若い肉体に、憤怒と憎悪が獣のやうな息をはいてゐる
のだと想像すると、小峰はスキツチを切つた。闇の中に、一匹の獣がうづくまつ
てゐるやうに感じられた。隣室に二人の仲の子供がゐるのだといふことを考へて
みても、この瞬時の恐怖には何の効きめもたらさなかつた。階段を降りる彼の
足には、力がなかつた。書齋にはいつた。

手あたり次第の洋書を、開いた。歴史物であつた。ジョゼフ・フーシェとロベ
スピエールとの争鬭の條であり、この一七九四年のフランスの出来事は、小峰に
は興味のもてる年代であつた。が、頭の一部がまつたく別のことに占められてゐ
る。その感じを読みながらひりひりと感じた。分裂して動いてゐる精神の状態

が、よく判つた。彼は本を伏せると、

——いま頃は、章たちは、海の鳴る宿で、話合つてゐることだらう。

さう想つたが、少しもたのしくなかつた。父親らしくおめでたく章のあとを追つてゐることが、何となくうしろめたいのである。さしせまつたことを、わざとあと廻しにしてゐるといふ思ひに責められた。彼は中野の家を想像した。切炬燵に派手な友禪の掛蒲團が、茶の間の半分を占めてゐる。丹も伊豆子も、式場からの昂奮を顔に現してゐる。彼らは母親を中にして、今日のことをいろいろと話合つてゐる。新婚旅行に出た兄のこと、新姉のことを話合ふ。陽氣である。たのしい雰圍氣の中で、母親は絶えずひかへめににこにこしてゐる。どこにもある特別な夜のいつ時である。それにくらべて、ここには、一人の父親が、父親であることを吹聴することが許されずに、若い妻の逆鱗にふれたことをひたすらに恐れてゐる。長男のよろこびを、父として卒直に喜べないのだ。彼は立ち上つた。書齋

を歩いた。

——妻はこはい。誰よりもこはいのだ。法律よりも社会よりも、妻の方がこはい。妻には法律も社会もない。秩序もない。妻には腕力も通用しないのだ。腕をふりあげたなら、みじめになるのは妻よりも良人の方だ。暴力などといふ單純な眞似は許されない。妻はこはい。抗ふ武器がないからだ。妻は一切の武器をとりあげてしまふ人間だ。妻はこはい。新聞を賑はせてゐたあれほど極惡の毒殺犯にしたつて、妻の顔を見ることが苦しくなり、すっかり閩を高くしてしまつたと告白してゐたではないか。惡党ですら、妻は慄へあがらせるのだ。妻に齒向ふ武器はない。妻は、良人の言分を聞いてはくれない。良人の都合のよいやうには、少しも判つてはくれない人種なのだ。それでゐて、妻の言ひ分を良人は承認しないではゐられなくさせるのだ。誰を無視してゐても、妻だけは無理が出来ない。妻が同居の世帯道具の一つだと、軽んじ、すましてゐられる良人は、おめでたい。

妻のおそろしさが身にしみて判らない可哀さうな人間なのだ。妻のこはさが、一ト度身にしみてしまへば、そんな軽卒なことは言つてゐられない。妻はこはい。そのくせ妻は、何か権力のやうに良人の頭の上にのしかかつて來るのではない。従順であり、やさしく、おそろしさを少しも感じさせない人間なのだ。それでゐて、おそろしい存在だ。始末におへない存在である。さういふことは、良人の錯覚ではないかと、君はいふのか。良人がさう仕向けるのだと、君はいふのか、違ふ。妻といふ存在そのものが、初めからさういふ風に出來てゐるのだ。二十代か三十代の良人ならば、若さの無分別から、妻の恐しさを無視出來るだらうが、四十を超えると妻のこはさがひとしほ身にしみる。身にしみてはじめて、自分が四十を越してゐることが判るのだ。つまり良人は己を責める武器をことごとく妻に手渡してしまふからだ。妻は、僕以上に巧妙に僕を責めるのだ。だからこはい。文句のいひやうがない。と言つて、何も妻は弁舌さわやかに、立板に水といふの

ではない。大抵は無言だ。黙つてゐても、どんな雄弁家よりも大いに喋るのだ。だから妻はこはい。良人にだけは、妻の言葉が聞けるからだ。良人が内心で、言葉にまとめあげるよりも先に、妻はすばりと言つてのけるのだ。妻とはさういふ存在だ。妻のおそろしさは、洋の東西を問はない。古今を問はない。どんな悪人も、妻には頭が上らないのだ。上らないやうにいつか知らない内に良人は自分で自分を仕向けてゐると、君はいふのか。或は、さうだらう。さういふものが、また夫婦ではないか。ことに浮氣でもして來てみるがよい。妻のおそろしさは、てきめんだ。真相をごまかして、妻のおそろしさをごまかしたと思ふのは、はかない良人の一時の氣休めだ。自分が浮氣をしてゐる間、妻のおそろしさはつきまとう。妻は決して強制はしない。束縛もしない。しかし見逃しはしない。見落してゐないのだ。妻といふものは、性生活の伴つた女中にすぎないと言つた小説家がゐるが、その人はおめでたい方だ。妻のおそろしさが骨身にこたへてゐないのだ

らう。さうした言ひ方は、單なる警句癖にすぎないではないか。警句ぐらゐで妻が片付けられるものではない。親よりも子供よりも扱ひに困るものだ。自分で自分の始末がつけられない以上に、妻は始末に窮する存在である。良人の分身であると同時に、独立した一つの人格でもあるからだ。妻はこはい。妻は寸分の余裕も見のがしも與へてはくれないからだ。法律よりも社会の秩序、世間態よりもおそろしいものだ。まったく妻はこはい。そのくせ妻は誰よりも良人にやさしく、親身で、さうだ、献身的といはなければならぬ。妻がこはいといふ言葉の中には、ありがたいといふ意味も含まつてゐるかも知れない。いや、やはりこはいといった方が、何となく妻の实体をつかんでゐるやうな氣がする。

さう言つた或る友の言葉が思ひ出された。小峰も、それを肯定しないわけにはいかないのである。忌々しくても、それに違ひない。中野の妻を思ふ。夫婦のまじはりを絶つた形式だけの妻に対しては、彼は一度もこのやうなはらはらする思

ひを味つたことがなかつた。三人の子供までありながら、妻のおそろしきは世間態のうるささと同視出来たのである。が、昌代の場合は違ふ。昌代のおそろしきは、彼が昌代を愛しただけに深さ、その年月だけの念が入つてゐるやうであつた。彼は夜おそくかへる昌代の身を案じて、落着けなかつた。それは、一途に昌代をおそれてゐる心とは、まったく別のものであつた。夜更まで自動車の走つてゐる町筋とは言へ、近頃は血なまぐさい氣風である。いつどこで、どのやうな不幸が起るかも知れないのだ。自分に向かつて今日一日腹を立てつづけた昌代の行動には、どこかに隙を感じさせられるかも知れないのだ。本人は氣が付かない。悪い人間に、どういふ風に乗じられるか、知れたものではなかつた。加害者だけを責めるわけにいかず、被害者にも必ずどこかに油断や手抜きがあるといふことは、大抵の犯罪の場合にははれてゐることである。恐らく今日の昌代は、災難をうけるには、一番ふさはしい心的状態に在るのではないか。小峰は、書架に本をかへした。

小峰は、應接間にはいつた。女中が、富有柿を一つ、白い皿にのせて來た。

「もう十一時だ。僕が起きてゐるから、お休み」

「はい、でも、奥さま、何とも仰言いませんでしたから、お待ち申して居ります。
十二時までには」

「せいぜい温かくして、居眠りでもしてゐるといい。氣の毒だね」

彼は、熟した実に小さいナイフを立てた。力があまつて、皿が高い音を立てた。どきつとした。たかが柿一つではないかと腹が立つたが、それほど怯えやすい心になつてゐるからだと判つた。彼はこの日の新聞の端から端までよんだ。昌代の歸つて來さうな氣配はなかつた。彼は帰宅した時から、一應昌代の姉のところへ電話をかけておかうかといふことは氣がついてゐたが、わざとすてて置いた。かへつて火に油をそそぐことになる。この時間まであそんでゐられるところは、姉の家以外にはなかつた。

——或は、かへらないかも知れない。

それならそれで二時まで待たう。申訳が立つ。自分自身に申訳が立つといふ思ひの方が、強いのである。自動車の音がすると、聞き耳をたてた。速度が落ちたやうに感じると、全身を耳にした。十二時近くになつた。彼は二時まで待たうと心をきめた。

「奥さま、おかへりになる様子もございませんが」

女中が顔を出した。

「代田に泊るつもりだらう。それにしても、黙つて出ていつたのは、困る」

「休ませて戴いても、ようございますか」

「お休み。氣の毒だつた。僕はもう少し起きてゐるから、お休み」

「お休みなさいまし」

と退きとつてから間もなく、家の前で自動車がつんのめるやうに停止した氣配だ

つた。女中たちが、あわてて玄関に出ていく。小峰は、どうしようかと立ち上つた。やがて、呼鈴が鳴つた。二三人のやうな騒々しい帰宅だつた。

「おかへりなさいまし」

「ただいま。まだ起きてたの？ 氣の毒だつたわね。すっかりおそくなつてしまつて……お姉さんところの車で送つて戴いたから、安心だつただけ。節は？」

「お時間にお休みになりました」

まだ何か言つてゐる。その間に、小峰はこつそりと應接間につづいた客用の寢室にはいつた。物音を立てないやうにして、ベッドにもぐりこんだ。何故、さうするのか。さうするより他はなかつた。妻をおそれすぎたために、対決の場を今夜だけでものがれたいといふ本能のやうであつた。様子をうかがつてゐると、妻は二階に上つていつた。扉を開け閉めしてゐる。多分節の寢室をのぞいたのであらう。自分の帰宅は、女中の口から聞いてゐるだらう。いや、聞かなくとも氣配

で判つてゐるのだ。妻は着換をしてゐるらしい。何事もなかつたやうな洋箏笛をしめる音がする。女中部屋は静かになつた。水道の音がする。寢る前に口をすすぐのが、昌代の習慣であつた。薄桃色の地に薔薇を刺繍したナイト・ガウンを着てゐるだらう。腰の深紅の太編みの絹紐がゆれてゐることだらう。嗅ぎなれた妻の香料が、漂つて來さうであつた。わざわざ寢室を別に避けてゐては、かへつて妻を逆上させるだけではないかと氣が付いたが、すでに遅すぎた。小峰は明日の朝、どういふ顔をして妻に会つて良いものか、見当がつかなかつた。

——妻の腹立ちも、尤もだ。自分だつて、その立場に立てばさう思ふだらう。これでは、彼の立場はどこにも見出せないわけである。

二階は静かになつた。腹立ちまぎれに、昌代はベッドにはいつた様子であつた。收拾のつかない一日であつたが、とにかくこの一夜が経てば、またどうにかなるだらうと、小峰は毛布に肩を包むと、スプリングが軋んだ。關の部屋で、そ

れが大きな音に聞えた。二階が静かになつたことが、せめてもの安堵だつた。この一夜はまだ自分のものである。彼は心の一隅で、妻が無事に帰宅したことをよろこんでゐた。

——章たちも、もう眠つたことだらう。

父親の口もとに、微笑が浮んだ。

——あの子は、極く素直に育つてゐるらしい。見るからに善良さうな両親だつた。素直が第一だ。口やかましい祖母でもついてゐたなら、あの子はああも素直に育ちは出来なかつた筈だ。しよつ中がみがみと母親がどなつてゐるやうな家庭の子ではなささうだ。ああいふ性格なら、全くちがつた生活環境にも、大して努力もせず、うまくとけこんでくれるだらう。自然にふるまつてをれば、それでよいのだから……

彼は、目をつむつてゐる自分に氣が付いた。醒めてゐても、腹の中では、目は

ひとりでに瞑るものらしいと、平凡なことに氣が付いた。闇の中で目を開いてゐるには、努力が要る。彼はうとうととなつた。

屋外も靜かになつた。時たま高級車がすべるやうに通る。どれだけか経つた。かちつと鳴つて、部屋が明るくなつた。小峰は、はつとなつた。部屋にあかりがついた。鍵のかかつた扉を、應接間の方からがちやがちやと鳴らしてゐた。今にも、扉をこはして、押し込みさうな氣配だつた。

「開けて頂戴。鍵をかけるなんて、卑怯ぢやないの。開けてよ、開けて頂戴」

鍵のかかつてゐることで、かあつとなつた昌代の、喉の匂ひをこめた憤怒が叩きつけられた。小峰は、半身を起した。鍵を外しにベッドを降りるつもりであつたが、立てつづけに鍵をゆすぶり、まるで家中をゆすぶりこはしてしまふ兇暴な音響に、彼もまた、むつとなつた。開けてなるものか。乱暴な響きが、彼の胸にそれに劣らない火をつけた。彼はベッドに仰向けにもどつた。習慣的に彼は鍵を

かけたものである。

「開けて頂戴。開けて頂戴。何故避けるのです。何故あたしがいっつては、いけないのです。開けて頂戴。開けなきや、こはしてしまふから」がちやがちやと、前後左右に、力をこめて捻つた。「開けて頂戴。こはしてしまふから」昌代の手が、扉を叩いた。スリッパのまま、扉を蹴りつけた。

その乱暴な振舞ひに、小峰は頭がくらくらとなつた。咎める意味からも、開けてなるものかと思つた。静かな家の中で、押込み強盜のやうな非常識な音響を立てるといふだけでも、十分に罰せられてよいのだ。さう考へたが、もうその時には、ベッドを降りて、鍵を外しにいく機会を逸してゐた。機会を失つたといふことを、彼は頭に置いた。どうなることか、胸がどきどきと鳴つた。そのくせ彼の姿は、ふてぶてしく仰向いてゐた。氣を動顛させてゐるのに、ベッドの寢姿は平靜に見えた。蒼白になり、眦をつりあげた妻のおそろしい形相が見えるやうであ

る。一分が経てば、一分だけ形勢が悪くなる。收拾がつかなくなる。それが判つてゐる。判つてゐながら捨ててゐるのは、自分である。駈け出して、今からでも鍵をひねるべきである。これでは檻に入れた獣を、檻の外から棒でつついて、怒らせてゐるのと同然だつた。鍵をひねれば済むことである。しかし、彼は横になつたままであつた。

「何故開けて下さらない？ そんなにあたしが憎いのですか。顔を見るのも嫌なんですか。たたきこはしてやるから。破つてしまふから」と叫びながらめくらめつぼうに叩いた。蹴りつけた。今にも扉が外れさうに、力をこめて鍵をひねつて、ひつばつた。

もう一方の扉には、鍵が下りてゐなかつた。それを、ふと彼は思ひ出した。昌代にしても、すぐとそれに氣はついたであらうが、かうなれば、この扉以外に出入口はないと思ひこんだにしても、もつともである。こゝをあくまで打ち破らね

ば、をさまらないのである。家中をゆすぶるもの凄い音響がしばらくつづいてから、突然、扉が開いた。鍵がこはれた。瞬間、小峰は毛布を頭からかむつた。

妻の氣配が、枕許に立つた。はげしい息遣ひだつた。激昂のため、すぐには言葉が出ないらしい。どうなることかと、小峰は死んだやうな氣がした。やにはに、彼が脱ぎすてた洋服が足もとからとりあげられて、床にたたきつけられたのを知つた。柔かで、重いものが、上半身にぶつかつた。

「何故、鍵かけた……開けてくれない……今日一日つらい思ひをしてゐたのに……ずつと怵へてゐたのに……何故開けてくれない……何故避けてゐる……何故……」

泣きじやくりながら昌代が、毛布の上から小峰の肩のあたりを打ちはじめた。一打一打が、應へた。びつくりするほどの力がこもつてゐた。どこを擲られるか判らないので、彼は毛布の中で両肘を振り、頭を防いだ。そのことだけを考へた。

すると、昌代の手が毛布をひんめくつた。

彼は妻の顔を、正視するに忍びなかつた。見たことのない顔であるにちがひない気がした。さういふ顔に自分がさせたのだと、そのことを改めて合点するのが辛かつた。不安と怖れと卑怯と優柔不断と弱気が、彼の目をつむらせた。

「鍵をこはさなくてもよい」

「何故開けてくれないの」

また一つ、ぴしつと小峰の肘が鳴つた。斬りつけられたやうに痛かつた。彼は打たれたところを、もう一つの掌で撫でた。

「ぶつてやる、もつともつとぶつてやる、憎い！ 自分で悪いことをしてきながら、知らん顔してる卑怯もの……扉に鍵をかけて……あなたには、あたしがどんなに悲しい思ひをしてゐたか、判らないのだ。エゴイスト。ずつと家にゐられなかつたあたしの苦しみが、あなたには判らないのだ。あなたといふ男は、さうい

ふ男だ。薄情もの、エゴイスト」

言ひながら、昌代は手をふりあげた。目をつむつてゐるわけにいかない。しまひに小峰は、うち下ろす手を宙で支へるやうになつた。痛い。耐らなく痛い。若い昌代が夢中にうち下ろす掌は、青竹でたたきつけるほどの疼みがあつた。彼の腕は赤くなつた。

「さうさういつまでも、あなたの都合のいいやうに目をつむつてゐるあたしではない。あたしは、あたしの道を歩きます。さうさせたのがあなただ。あたしの目をあけさせたのが、あなただ。あたしは勝手にする。したい放題のことをする」

そしてまた、二つ三つたたきつけてから昌代は、部屋を出ていった。喚いてゐるやうな発音が聞えた。二階の扉が、乱暴にしまつた。その時になつて小峰は、漸く、ぶたれたあとを、しみじみと眺めやつた。ぶたれたあとが、熱を呼んでゐた。彼は暫く、精も根もつきはてた人のやうに仰向けに寝てゐた。

彼は女に手をふりあげた経験は一度もなかつた。まして女から殴られたこともなかつた。五十年の生涯にとつて、初めての出来事であつた。しかし殴りつけた昌代を、少しも悪いとは思へなかつた。あの場合は、打擲以外に適切な行動はなかつたやうな氣がする。彼もまた、端的に妻の心に触れることが出来たのである。彼はぶたれてはじめて、自分の力では越えることの出来なかつた峠を越えることが出来たやうな氣がした。殴られて、よかつたと思ふ。しかし、まさか殴られるとは思はなかつた。

——昌代は二十八歳。自分は五十。しかも昌代は女にしては大柄で、腕力もある。眞劍にかかつたら、たうてい自分は敵はないのではないか。

殴られた小峰の胸中は、氣が抜けたやうに一應に片がついてゐた。この感じは、をかしかつた。正氣の沙汰とは思へなかつたが、実感である。しかし、腕をふりあげて、打ちつづけた時の妻の形相を描いて、彼は、人間が一しよけんめいな場

にのぞんだ時の表情は、凄じい限りだと、今更におそろしくなつた。あの形相に向かへば、誰の魂も眞向きにならざるを得ないであらうと思つた。

彼は外からのスキツチを切り、こはれた扉を閉めた。二階は、静かであつた。

——どうして先に寝ることになつたのだらう。しかも、鍵をかけた。應接間で起きて、待つてゐたらよかつたのではないか。

その時はまたその時で、ちがつた波紋が生じたであらうことは考へられた。

8

翌日から、昌代は小峰に目もくれず、口も利かなかつた。そのくせ、節にはあたりまへな口を利いてゐた。小峰は悪く刺戟してはいけなないと、つとめて妻を避けた。寢室は、前夜以來、別々であつた。

應接間に妻が何かを読んでゐるやうな時、彼がはいつていくと、妻は立ち上つた。わざとらしく振舞ふことで、憤懣のなみなみでないことを見せた。さすがに八歳の子供にも、両親のけはしい対立が判るらしく、母のあるところに父親が現れると、遠い眼差で小峰を眺めるのだつた。彼は節と、いつもの会話が出来なかつた。

書齋にひつこもつてゐる時間が、多くなつた。食堂に並んでも、女中がそばについてゐてくれる間は、小峰はほつとしてゐる。ゐなくなると、居たたまらなくなり、早々に椅子を離れる。あとでは、母と子や女中の、不断と少しも違はない会話や、笑ひ声が聞えた。

昌代も執拗だつた。固く蓋をしめてゐるので、小峰も妥協のきつかけが見付からない。小峰に用のある場合は、女中か、節が仲に立つた。戦争中や以前のやうに金銭につまらない時代はよかつたが、終戦後は財産税などで百万円も一時にと

られてゐた。商賣をしてゐるわけでもなく、彼が稼ぐといふこともないので、自然現金には不足勝ちであつた。焼け跡の土地を借りたいといふ申込みもあるが、高い権利金で貸したあとが、それ以上の税をとられるやうな氣がして、それも出來ないでゐた。金銭は小峰が押へてゐた。これは中野に対して同じで、重だつた入費となると、中野から誰かが取りに來た。彼は税金で金しぼりとなつてゐ、次第に細つていくのを感じてゐる。細りはするが、決して太ることのないのが今日である。何年かの後には、何々財閥といはれる身代も無一文にしてしまふ税のやり方だといふ世間の噂も、まんざらデマとも思はれなかつた。彼としては、決して無策に日を送つてゐるわけではなかつた。古い株は賣り、有利な株に買ひかへてゐる。しかし、一度税が來れば、その度に所有のものを手放すより他はない生活だつた。小学校の寄附にも、心を痛めた。焼け残りの邸といふ割当の寄附には、絶えずびくびくしてゐる。吉祥寺の画家、今泉曉の皮肉も忘れてゐるわけで

はない。天皇が残る以上は、財産は無事だらうと今泉は言つたが、天皇は現存してゐても、財産は次第に細つていく。一挙にとりあげられるか、徐々に無くなつていくかの相違だつた。金がなくなれば、天皇のあるなしは、問題にならぬ。さうなれば、誰も天皇のことは言はなくなるだらう。さう思ふ。

「丹さまがおいでになりました」

女中が書齋に言ひに來た。

学生服の丹が、まつすぐにはいつて來た。昌代に逢つてゐないらしいのを、小峰は感じた。

「松川博士にご挨拶にあがるのは、いつにしたらよいかと、お母さんが言つてました」

「さうだ、仲人には挨拶に出向かねばならなかつた。忘れてゐた」

「章兄さん達が新婚旅行からかへつて來てからにしようかと、お母さんは言つて

ます」

「お母さんと一しよに？」

「どちらでもいいんですつて」

「それちやお父さんが、ひとりでお礼に伺はう」小峰は、昌代の立場を考へた。

「お父さんのお礼と、章たちの挨拶とは別々だから」

女中が、紅茶をはこんで來た。

「節ちゃんは」

「学校」

「お父さんのところに、ヴォードレールはありませんか」

「原書か」

「いいえ」

「その三段目にあるだらう。さがしてごらん。そんなものを読んでゐるのか」

いつもなら、昌代がはいつて來るところである。丹は、きれいな学生だつた。三人の子供の中でも、昌代は丹に一番好意をよせてゐた。節が丹に似てゐるせゐもあつた。

「おばさまはいらつしやらないのですか」

さう昌代は、呼ばれてゐる。

「ゐるよ。かへりに挨拶していくといい」

小峰がなほも書齋にゐる時、昌代と丹が話しながら玄關に出ていく氣配であつた。昌代はその顔立ちのやうに、陽氣な声だ。

「さようなら、ご機嫌よう」

「さようなら」

昌代は、小峰を無視してゐる。無視とみせかけて、その実全身で一刻の休みもなく張り合つてゐた。初めの間は、互に不自由を感じ合つたが、不便な思ひもま

た快かつた。

四日が終つた。

小峰は、とうに悲鳴をあげてゐた。無言で對抗してゐることの馬鹿馬鹿しさにやり切れなかつた。食事の時、何氣ない風に、妻に話しかけた。昌代は冷淡な返事をした。妻の城壁は堅固である。城内から門を開いて出てくるきづかひはなかつた。女には、それが出来ないのである。しかし、妻にしても無言の對抗のくだらなさ、不自由には音をあげてゐるにちがひないのである。卒直に、さうだと白状の出来ない性をもつ。これは男の方で、誘ひ出してやらねばならないものである。何氣ない世間話や、家事上のことで、いつたん妻の口から冷淡な返事を聞いてしまへば、あとは小峰が徐々に妻の氣をほぐしにかからねばならないのだ。一挙にいろいろなことを話しこんではいけないかつた。妻の心を少しづつときほぐしていくのである。忍耐がいる。しかし、蒔いた種は己の手で刈り取らねばならな

い。

食事時や、何かの時で、顔を会はずと、小峰は殴られた夜のことは忘れた顔で、何かと話しかけた。妻は返事をする。まちがつても、結婚式のことには触れてはならない。あの夜のことには触れてはいけないのである。妻の口を動かす機会が、度重なった。もうその頃には、妻は應接間にゐても、俄かに立ち上るやうなことはしなくなつた。そこに節でも居れば、いつまでも残つた。しかし、昌代からは一ト言も口を利かなかつた。

女中が、珈琲をはこんでくる。親子三人が、のむ。節を中心にして、あたりさはりない話を交した。

それでも、一週間が経つた。小峰は依然として階下の客用のベッドで眠つてゐた。

「旦那さまのおねまき、とりかへて？」

と言つてゐる妻の声が聞えた。その以前に、女中がとりかへてゐた。彼がこの日頃一番心にかけてゐることは、どうしたら昌代の心を完全にとり戻すことが出来るかといふことにかかつてゐた。妻の心に大して屈辱を與へずに、不自然を感じさせずに、余儀なくもうこれ以上はおこつてゐられないのだと折れて出るやうにも、ちかけたかつた。妥協することは、妻の負けとなる。その負けを負けと際立たせては拙いのだ。そして、その負けもやむを得ないと自然に納得させるやうに持ちこみたかつた。長椅子の昌代のそばに腰かけることも、たしかな方法であつた。

「わるかつた、ごめんよ」

おだやかに言ひ、妻の手に軽くふれたならば、まさか妻はその手をはらひのけることもしないであらう。日数が経つてゐる。しかし、正面から謝罪することは、かへつて忘れてゐた彼女の心に火をかきたてることにならないとも限らなかつ

た。大事をとつた方がよい。やはりそれには触れずに、ほかのことから妥協の出る方法を考へた方がよかつた。

偶然だつた。彼が外からかへつてくると、昌代と節が風呂にはいつてゐた。手を洗つてゐた彼は、しばらく迷つた。やがて、脱衣場にはいつた。

「あんまり寒いので、あたたまらうと思つて……」

言訳をもつて磨硝子の湯氣に濡れたのを、開けた。節は思ひがけない父を迎へて、よろこんだ。その時、昌代と節は、檜の角風呂の中にゐた。肩をあらはした妻のからだは、大きく見えた。襟をつよく搔きあげてゐる頸筋は、美しかつた。節が湯と一しよに流し場に出た。小峰は湯をからだにかけた。その目は、妻の美しい肉体を思ふ存分に眺めてゐた。昌代としても、防ぎやうがなかつた。ちよつと工合が悪かつたが、見られることを忌々しいとも思はなかつた。あの夜の直後であつたならば、かう自然に裸体をさらしてゐるわけにはゆかない。もう見られ

てしまつたのである。隙間だらけの都合のわるいところが見られたのである。何か済んでしまつたのである。思ひがけない不意打ちで、夫婦の狎れ狎れしさに一足とびに戻つたのである。いまさら角を立てる方が、をかしかつた。昌代は立上つた。

・「代ります」

「いいんだよ、ゆつくりおはいり」

せまい湯船で、互に裸では、何もものかくしてゐるわけにいかない。感情をかかふらせる隙もなかつた。小峰が代つて、中にひたつた。彼は湯にぬれた妻のからだを、しみじみと眺めやつた。妻と共に風呂にはいつたといふ経験は何度もあるが、いつになつても彼女は大胆不敵にふるまふといふことがなかつた。つつましい一線は維持してゐた。良人に対して、もはやみぢんも羞恥はないはずであつたが、風呂の場合、女らしい仕種をとつた。その感じが、よかつた。小峰は妥協

のついた安堵から、昌代を知つてから一途にのぼせあがつた当時のことを思ひ出した。節が出来てゐながらも、自分は昌代の肉体の祕密をことごとく知つてゐるとは思へない。美しく、力強い裸形は、湯に光つてゐた。驚異を感じる。くめどもつくせないものを感じさせる。力強い、大柄な裸体には、また逞しい意欲が巢喰つてゐるのだ。飽くことを知らないものがある。希望がある。伸びていくものがある。それが柔かく、暖かく、薄紅色に染まつてゐた。

「久振りだから、お背中、ながませうか」

小峰はくすぐつたい氣持で、やがて背中を向けた。つるつるした逞しい腕が、背中にふれた。

「いつまでも怒つてゐたつてはじまらないわ」

小峰は、頷いた。

その夜、二階のベッドに横になりながら、昌代が言つた。

「これから、あたし、働きますわ」

「働くつて、どこかに勤める氣？」

「いいえ、この家で出来る職業よ」

「何を考へ出したのか、見当がつかない」

「いろいろ考へた結果よ。幸ひうちには電蓄もあるし、レコードも豊富だし、應接間のセットを片付けたら、二十組は踊れるでせう」

「ダンスか」

「バアティちやないの。それも時にはするんだけど、どこかに教習所を開きたいの」

小峰は、どう考へてよいか判らなかつた。

「看板を出して、大つぴらにするんぢやないの。初めの間は極く少数の人に教へます。知つた人ばかりで、教習所にいくほど勇氣のない人。そんな人は案外多い

のよ。お姉さんだつて、さうなんですもの」

「教習所といふ以上は、月謝のやうなものを取るのだらう」

「一ヶ月三百円。高くないんです。週に一回で、月三百円。うちなら、通つてくるんだつて氣軽でせう。時には、お紅茶ぐらゐ出してあげてもいいわ」

「そんなことを考へてゐたのか」

「さう、あなたが階下で寝てゐる間に、考へついたことよ。章さん達、いつおかけり？」

「いつになるか。伊豆を歩いてゐるからね。予定よりおくれるだらう」

「是非杉子さんにも手傳つて貰ふつもりよ」

「そんなことまで考へてゐたのか」

「杉子さんなら、舞台慣れがしてゐるから、教へることもお上手だと思ふわ」

「いつたい何人ぐらゐ来るだらうか」

「十人にしたつて、月三千円でせう。ちよつとしたお小遣になるわ。お姉さんに頼んで、さういふ人をかり集めて貰ひます」

「週に一回なら、いいね。僕も習はうか」

「さうなさい。あなたのお友達も、うちで習ふのなら、氣持が軽いでせう。一方でレッスンをとりながら、一方では、パーティといふ形でやつてもいいと思ふわ」

「さういふ計画が、この胸の中に」と、小峰は妻の乳と乳の間を、指の先で押し

た。「考へ出されてゐようとは、夢にも知らなかつた。損をした」

「損？ 何ですの」

「いや、僕はまたどうしたら奥さんの機嫌が直るか、苦心慘憺してゐたのだ」

「仕方がないわ。自業自得なんですもの。さういふことは、殿方の責任よ」

彼は不意に、今後二十年も自分は生きるだらうかと考へた。その間には、再びこのやうなことを経験しなければならぬのか。夫婦とは、かうしたことを次々

に経験していくものなのか。しかし、生を自分からやめるわけにはいかない。

夫婦は章夫婦の帰京を待つてゐたが、湯ヶ島から寄せ書の葉書が届いたきりで、いつかへるとも書いてなかつた。

日曜の朝早く、小峰は、伊豆子が来たとき起こされた。

顔を洗つて應接間にいくと、伊豆子が天晶家あまあきの長男の直嗣と、ソファに並んで腰かけてゐた。中野の家で、彼は天晶直嗣と二三回逢つてゐた。好意をもつてゐる青年である。

「どうした、こんなに朝早く」

「いくところがなくなつちやつた」

伊豆子がからだをゆすぶつた。

「こんな朝早くから、どこへ出かけた」

「神宮外苑です」

天晶直嗣は、氣まり悪るげに微笑してゐた。

「朝早く神宮外苑へ、何しにいつた」

「坐りに……」

「坐る？」

「お父さんには理解が出来ないんですわ」

「もつとくはしく説明してごらん」

「つまり時代の相違」と、くすつと伊豆子が首を竦めた。すらりと脊が高く、顔は小さく、いつまでも少女少女した子だった。「天晶さんのお家も、財産税でこちらと同じにべちやんこの組でせう」

邸一つをもてあましてゐる生活者であつた。

「こちらと同じとは、失礼だ」

「いいの。そのため、軍資金がいつも欠乏してるんですわ。あたしも、さうさう

お母さんにおねだり出来ないでせう。ないものを有るやうに見栄をはることはやめましょうつて言ふことになつてるの。あたしたちはもう自然を相手にするより他はないんです。だつて銀座を縦に一回歩いてごらんなさい、二三百円は消えてしまひます。横に歩いたらそれこそ大変でせう。さういふことは、お父さんの時代にはなかつた心配でせう。神宮外苑の樹の下へ坐りにいくんですけれど、今朝早く出かけたら、もう先客にとられてしまつてたんです。方々さがしたんだけど、適当なところがなくて、お父さんのところへ足をのばしてしまひました」

小峰は、わが娘ではない若い女と向かひ合つてゐる氣がした。伊豆子の口から、他日このやうなことが聞かされやうとは、夢にも考へてゐなかつた。これが告白か。天真爛漫なのか。事後承諾の意味か。彼は改めて、天晶直嗣の顔を見た。

以下は、書齋で、伊豆子が友達の経験として語つたアヴァンチュールである。小峰烈はダンヒルのパイプをくはへ、おだやかに娘の顔を眺めてゐた。

——「もうおそいわ、かへりませう」

と言つたのは、まる味のある涼子の声である。相手の大木は白い顔に酔ひをみなぎらせて、恋愛論のつづきを喋つてゐた。自分の意見に夢中になつてゐる。

「おや、もうそんな時間ですか。今夜はとても愉快だつた。またのみませう」

大木に誘はれて、銀座の裏をのみ歩いたのは、これで三度目であつた。彼は勸定をすましてゐる間に、涼子は裏手の手洗ひ場で、手鏡に顔をうつした。脂肪が

ういて、小鼻が光つてゐた。ハンカチで抑へて、粉をはたいた。少しも酔つてゐないと自分に囁いた。得意なやうな氣もした。

大木のうしろ二歩ぐらゐの間隔を保つて、涼子は胸を張つて歩いた。彼は幸福な家庭人で、社会的地位もある三十八歳である。二十三歳の涼子は、一種のかんで、この人は話のわかる、うるさくない、或る域を越えず淡々とつき合へる男性だと判断してゐた。S 駅は電燈の光もつかれたやうに淡く、人影も少なかつた。駅前の商店街は、灯をつけてゐる店もあつた。酔客が通る。リntaxがかたまつてゐる。ゆるゆると動いてゐる車もあつた。夜風が頬に快かつた。

「涼子さん」と、ライターを手にした大木が呼んだ。

涼子は切符を買はねばならない。

「ね、涼子さん、リntaxなるものに乗つたことがありますか。僕はないんです。

「駅まで乗りませうか」

「ええ、のりませう」

この思ひつきが、氣に入つた。大木が交渉をはじめらうしので、涼子はにやにやしてゐた。大木がのりこむ。涼子がお尻をはこぶやうにして割り込んだ。せまい箱の中で、肉体が触れ合つた。涼子はへんに眞面目な顔をして、前方を眺めてゐた。両手は膝に、鞆を押へてゐる。緩慢な速度であつた。歩いてゐるよりも、もどかしい。時間が逆に動き出したやうである。若い体温が野放図に相手の肌の流れこんでいくのは、防ぎやうもなかつた。わざと氣のつかない顔をしてゐた。大木は重心を保つため、涼子の肩に手をまはして、二つの肉体がばらばらに動かないやうにした。街は夜更のやうにひつそりとしてゐた。リントクは軋みながら、あへぎ、ゆるい坂を登つた。

「ここは、A B 通り」

方向の判らなくなつた涼子に、大木は言つた。涼子は正面から吹きこむ風を、

胸いつばいに入れようと胸を張った。

「つめたくて、いい氣持。夜の大通りはきれいなね。これでペダルをふんで、息を荒くしてゐる人の姿が見えなかつたら、理想的なね。つらさうなね。搾取つて感じな。肉体労働の搾取でせう」

薄いシャツ一枚の男は、背中を上下させ、満身の力を足に入れる。大木はそんな涼子の横顔を眺めて黙つてゐた。この若い素人娘がいま何を考へてゐるのか、この胸に何が生じてゐるのか、のぞきこむことは不可能な氣がした。ただ深い調子の眸の色と、酔ひざめの青白い顔が、街燈のあかりに時々照らされた。T 駅についた。二人は改札口をとほつて、ホームに出た。あたりがひっそりとしてゐて何かへんだつた。人影がなさすぎる。おやと大木が言つた。涼子も同じものを感じた。駅員に訊ねると、終電車は出てしまつたといふ。

「困つちやつた。どうしようかしら。大木さんの方は、まだ終電車があるでせう。

どうぞおかへり下さいまし。あたしは駅の待合室で、時間をすごします。どうせ三時間もすれば、始発が出るでせう」

「そんなことが出来ますか」

強い語氣であつた。彼はちよつと考へてゐたが、合点すると、「いらつしやい」と言ひ、ホームを降りはじめた。涼子はつづいた。駅を出て、かへりかけてゐたリntaxを呼びとめた。そして自分が先にのりこんだ。

「どこへ」

涼子が腰を下ろした彼をのぞきこむと、大木が彼女の手をつかんだ。

「知つてゐる家があるんです。学生時代の知合だから、いつてみないと判らないけれど、多分大丈夫だらうと思ひます。駅で夜明しなんか出来るものですか」

三原橋のたもとで、リntaxは捨てた。二人は寢静まつた町を、あちらこちらと探して歩いた。やつと、探しあてた。待合だつた。台所口を叩いた。寢巻の上

に羽織をひっかけ現れた女主人は、肥つた、五十年配に見えた。大木の顔をさぐるやうに見つめてゐるが、

「まあ、浩ちやん？ 浩ちやんね、おひさしぶり……」

記憶が一氣にもどつた、なつかしさを全身にあらはした。涼子は、自分の立場に困つた。夜更の待合へ来る若い女といへば、相場はきまつてしまふ。街の女と見られないにしても、良家の娘とはうけとれない。表情に困つた。が女主人は事情をきくと、のみこんで、涼子を正視することなく、長い廊下をぬけて庭の飛石を踏み、一番奥の四疊半に案内した。

「ここしきや部屋がないの。しかも明日の朝五時に着くお客さんがあるのよ。だからそれまでに空けてもらはないと困るの。いいでせう？ ひさしぶりなのに、虐待してお氣の毒ね」

「いや、重々こちらが無理なんだから」

女主人がさがると、間もなく女中が、廣蓋をはこんで來た。ビールとつまみもののがつてゐた。南天の葉が障子に映つてゐる。女中は扉に面した窓の硝子戸を開け、簾を下ろすと、ひきさがつた。雨がくるのか、生温い風が流れた。

大木は自分でコップにつき、窓に腰かけてゐる涼子を目顔で呼んだ。涼子は首をふつた。なんで振つたのか、理由はない。手をのばして、コップをとつた。ひと口したが、まづい。朱塗の机、桐の箆筒、姿見、床の水墨画、彼女はちがひ棚の團扇をとつて、姿見に顔を映した。蒼味を帯びた顔、緊張してゐる感じが露骨に出てゐる。頭の中には、弓のやうに張つたものがあつた。心の位置は凶々しく、横着にかまへてゐるが、顔付が、女の生理か、微妙に何かを嗅ぎつけ、怖れ、用心をしてゐる。まだ十分に消えてゐない酔ひが、本人に覚悟を持たせることを、阻んでゐるやうだつた。大木は上着をとり、シャツであぐらをかき、扇風機にあつた。涼子は團扇をつかつてゐるが、信用といひ、安心といふ限界線をどこに

引いてよいものか、見当がつかない。なまめかしい部屋の雰囲氣、十分にお膳立てのそろつた舞台の上で、酔ひも加勢して、若い肉体をそそのかし、理性のたがをゆるめにかかるのが感じられる。思ひすごしであるやうな氣もした。こはいもの知らずの大胆さではないか。初めての經驗だ。しかし相手は紳士だ、疑ふことは相手を侮辱することになると、涼子は固くならうとする心持をゆるめにかかつた。背のびを一つして、机に向つた。塩豆を五六粒つまんで、口にはふりこむ。

「涼子さんは、強い。とてもおつき合ひが出来ない。いつたいどこまでのめるんだらう」

と言ひ、失礼とからだを横にした。「いかがはしい職業の女が酒が強いのは、判るとしても、良家のお嬢さんが、こんなに酒が強いとは思はなかつた。おどろいた。いつもかうなんですか」

「いいえ。自分でもよく判らないが、酔つばらふのがどんなものか、知らないの

ね。無茶苦茶……。大丈夫？」

「いや、僕はまあ、大丈夫です。しかし、こんなにのんだのは、実にひさしぶりです」

そして、もつと何か言ひたげな顔をした。が、口に出させない線をかちんと引いたやうに、涼子はそしらぬ顔をした。薄いドレスの下には、柔かく手應へのある実体が動いてゐた。大木の年齢では、勿論未知である筈がなかつた。心やすいものであり、それを扱ふ手心も十分に心得てゐるつもりである。彼は類似の若い肉体を描いた。が、自信はもてなかつた。目の前の未知の実体には、すげなくはねつけられる、巧みにそらされてしまひさうに感じられる。忌々しいのである。怯えてゐる。それでゐてこの不安な不可能な悲壯な雰囲気をつつそりと享樂もしてゐた。切れの長い、細く光つた眼で下から見上げてゐる。涼子は廣くあけたワンプーの胸もとが、氣になつた。

女中が来て、机を隅に片付け、蒲團をのべはじめた。派手な夜具である。白いカバーをつけた枕を二つ並べた。涼子は、唇が乾いた。妙に焦るのだった。が、言葉にはまとまらなかつた。違ふ、違ふと、喉のところて叫ぶのだが、彼女の目は、敷蒲團を二枚重ねた一つしか敷かれぬ夜具をぼんやりと眺めてゐた。抗議する余裕は十分にあつたが、この世界に来て、それでは野暮ではないかと、黙つてゐることにした。

「疲れたでせう、着換へて、お休み」大木はこともなげに言つた。「しかし大丈夫ですか。黙つて家を明けて？」

「かまひません。以前にも二三度、だまつてお友達のところへ泊つて来たことがありますから」

「随分解放的ですね。とにかく、おやすみなさい」

「あたし、いいんですの。大木さんこそ」

「いや、君が着換へなくちや……」

「眠れさうにないから、このまま起きてますよ」

「これちや僕が眠れない」

といふことを、二人はくりかへした。しまひに涼子は、切口上で、起きてゐるとつづばなした。しかし、大木はしつこかつた。子供をなだめるやうにくりかへす。やりきれなくなると、涼子は立ち上り、いきなり、「かうすれば、よろしいでせう」掛蒲團をはぎ、敷蒲團の二枚の内、一枚を引きすつて、床の間と障子の間に、二人分の床をつくつた。涼子は、これで区切りがついた氣である。せまい部屋が、蒲團でいつぱいになつた。大木は不意をうたれた顔付で、黙つて立ち上ると、浴衣に着換へた。涼子は部屋の外に出た。障子を楯にして、廂の下の飛石に降り、ひきすらせて浴衣を着た。ワンピースを脱ぐだけにしておかうと思つたが、汗ばんだ肌にシミーズで氣味悪く、それも脱いだ。紅い紐を二タ巻にして、前で堅い

片結びにする。ふかく呼吸をしてから部屋にはいつた。シミーズとワンピースは重ねて、靴下を脱ぎ、腕時計を外した。床の間よりの隅に鞆などと一しよに整然と置いた。そして、コップを持って洗面所にはいつた。戻ると、つつ立つたまま電燈を見あげて言つた。

「このままつけて置きませうね」

枕もとの僅かにあいた疊のところに行儀よく坐ると、手をつき、「お休みなさい」幼い時からの躰のままふるまつてゐるやうだつた。

大木はシーツの敷いてない方の敷蒲團に、横むきになつてゐた。涼子が薄い夏蒲團を腹のあたりにかけ、仰向けに、人形のやうに足をのばしてゐるのを眺めてゐた。両手は掛蒲團の上に、両脇に添へて、自然と伸ばしてゐる。細かい雨が降り出した。大木は息苦しくなつて、いく度も寝返りをうつた。涼子は動かない。大木は突然手をのばして、涼子の右手をつかんだ。ひきよせるやうにした。さう

しないではゐられなかつたのだ。涼子は右手を任せて、顔を向けると、おだやかに笑つて何か言はうとした。間髪を入れさせずに、かぶさつてきた。涼子は胸を押しつけられた。烈しい接吻をうけた。身動きが出来ないのである。涼子は己の唇に反應を示すまいと力んだ。下唇は愛撫されるままに任せた。自分のものではない動悸が次第に音高くうち出したのを聞いた。唇が離れるのを待つたが、甘い快さが、自分を裏切つて、永かれとのぞむやうだつた。無意識に上下の唇を我から動かしたのかも知れなかつた。丸い乳房が押されて、徐々に抵抗しがたい勢ひで、或る興奮が体中を走り出すのを覚えた。が、燃え上らなかつた。はめを外さない程度に肉体を支配してゐる何かがあつた。からだの一部分に、冷めきつたものがあつた。それは、ぞつとするほど冷淡なものだつた。涼子は薄い掛蒲團をしつかりと下半身にまきつけてゐた。やつと顔を離した顔を、涼子は追ふやうに見た。

「僕はあなたを愛してゐる。逢ひ初めの時から、心を惹かれてゐた。親しくお酒

をのむやうになつてしまつて、告白する機会を失つてゐたのだが、しかしあなたにとつて、僕は何ものでもなかつたのだ」

くると背を向けると、自分の床にもどつた。涼子はいまになつて、胸の動悸があやしく乱れてゐるのに氣が付いた。鎮めるためにながいきをした。耳が熱くなつた。そこが、かつかつと鳴つてゐる。すまないやうな、とぼけてしまひたい氣がした。すぐには口が利けなかつた。背中を向け合ひ、二人はいつとき身動きしなかつた。

涼子はその手を動かして、團扇をとつた。靜かに、掌を動かした。蒸暑い。背は向けたまま、時々大木の方へ風を送つた。大木がふり向いた。涼子は、名を呼ばれたやうな氣がしたので、ふりかへつた。大木の眼の中に、訴へる、甘え求める色を読んだ。再び涼子の手は握りしめられた。

「いや、いや」

ふりきつて涼子は、障子の方へからだをこころがせて逃げて。追つてきた。障子際に追ひつめられた涼子は、

「まあ、動けないわ、意地悪ね。大木さん、ご自分の方へいらつしやいよ。……ぢやいいわ、あたしがそちらへ行きます」

起き上らうとした。脇の下から抱きすくめられた。大木のかからだの上にのせられたかと思ふと、とんと隣の蒲團へ軽々と移される。

「ふふふ」と涼子は言つた。「らくちん、らくちん！」

大木も笑つた。どこかの部屋で、ゆつくりと三時を打つのが聞えた。細かい雨が降つてゐる。涼子の胸に顔をのせてきたが、さからはなかつた。彼女は頭が痛く、つかれてゐることがよく判つた。ぢつとしてゐたかつた。意識の底に、反省がうかんでゐた。ものうい。段々と無感動になつていく。自己放棄に似てゐた。むしろやうに眠りたかつた。涼子は敷かれてゐない方の右手をのばして、掛蒲團を

尻の下にまはした。浴衣の襟もとから手がすべつてきた。乳房がむき出しにされた。涼子はあつと思つたが、されるままにしておく。強い力が柏餅の皮をはぎとらうとし、組みしいた。獣めいた兇暴の中に轉落を急いだ。

「大木さん」

叱咤するやうに、短く低い声で叫んだ。涼子は思ひきり足に力をこめ、蹴つた。大木のからだがよろめき離れた。彼女は起き上つた。怒りと興奮で、蒼ざめ、あらい息をくりかへした。憎悪の眸を、相手の全身にたたきつけた。怒りは、すぐに消えた。言ひ知れぬ悲しみが、胸に湧いた。判断のつかない、説明のしやうのない氣持で、涙が一つ頬を走つた。大木はそむけてゐる撫肩を眺めて、きびしい拒絶に遭ひ、困惑をつづけてゐる。

「ごめんよ」

涼子はうなづいた。

「もうすぐ夜が明けますわ」嵐がやんだやうに言つた。「五時までには、一時間と
いくらもないわ。今度こそおとなしく休みませう」

「ああ、もうしない。本当にごめんよ」

頷いて涼子は、最初の時のやうに正しく仰向けになり、目をつむつた。

廊下を通る女中の足音がした。上体を起し、目をこすつてゐると、段々と意識
がさめてきた。横を見ると、大木は顔をこちらに向け、枕を両手でかかへるやう
にうつ向いて、ぐうつりと眠つてゐる。立上らうとして、軽い暈がした。手早く
着換へて、洗面所に行く。白いタイル張りの鏡に、充血した眼の、疲労の濃い、
冴えない顔を映した。昨夜の出来事を思ひうかべる。嫌な気分だつた。工合が悪
いのだ。それをつらぬく若い屈托のなさが、滑稽な味をつけた。くくくつと喉が
鳴つた。

洗面器に水をいつばい張る。清潔な水が、疲れた眸に快い。上体だけ裸になり、

ハンカチを濡らして、頸筋、胸、腕を拭つた。小豆のやうにぼつんとつき出した乳首を、くるむやうにした。指先で、はじいてみる。鏡の中の乳房は丸くて、光沢があつた。化粧道具をひろげる。眉をひき、頬紅をつける。唇をひくと、いつもの快活な若々しい顔にもどつた。髪をとき、眼を見張る。鏡の中に笑ひかけると、齒が光つた。さつぱりした氣になり部屋に戻つた。大木はまだ先程の姿勢で眠つてゐた。音を立てぬやうに簾をまき上げてゐると、女中が起こしに來た。廂の方の障子が開けられたままになつてゐるので、女中は不審がる顔になつた。二つの蒲團と、涼子をふり分けに見た。ぎごちない笑ひを、女中はうかべた。涼子は微笑でうなづくと、

「大木さん、五時ですよ」と言ふ。

目をさました大木が、浴衣のまま洗面所に行く。涼子は一ト足先に女中に案内され、三階の部屋に移つた。磨硝子を開けると、濕つた路を自轉車の男が小さく

走つていく。

大木が、上衣と靴下をぶらさげて上つて來た。朝の挨拶を、どちらからともなく微笑で交した。二人とも照れてゐる。涼子はわだかまりがとけた氣だつたが、はつきりしないものは依然のこつてゐた。

女中が朝飯をはこんで來た。小さな茶餉台に並べられると、涼子は食慾を覺えた。おみおつけと卵の目玉焼で、軽く二杯を食べた。熱い番茶がおいしかつた。大木は半ぜんほどで置き、サイダーをのんだ。奥の部屋から頭髮の薄い男と、洋髪の和服の女が出てきて、階段を降りていくのが見えた。

「男は土建屋、女は藝者」

大木が言つた。

「つれ込み宿ね」今氣がついたやうに言つた。「あたしのこと、女中さん達、どう思つてるでせうか」

「ちよつと見当がつかないでせう」

「ばんばんぢやなし藝者ぢやなし、ダンサーでもないし、女優にもみえないし、職業婦人の型とも違ふでせう」

いづれにしても、良家の子女の來るところではない。しかし、この経験は思ひがけないことながら、面白かつたし、自分を反省する材料になると、涼子らしい考へに落ちた。両親に無断で家を明けたことのやましさは、大して感じてゐない。涼子は自分の胸の中には、白い桔梗の花が咲いてゐると思つた。肌色の花ではない。眞紅の花を咲かせたいと思ふが、当分は白い花に限るやうな氣がする。

「ほんたうにとんだご迷惑をおかけしましたわ」

「いや、僕の方こそ」

二人は同時に笑ひ出した。笑ひながら、自然ひとりの考へにふけてゐたことを、すまなく思つた。大木は煙草をふかした。

「さあ、そろそろ出かけませうか」

こんな朝に慣れた人のやうに腰をあげた。

二人は肩を並べて、歩いた。

「僕ちよつと床屋に寄ります。出勤するのは早すぎるから」

髭の痛かつたことを思ひ出して、涼子はくすつとした。

駅近くにくると、ビル街に殺到する人の波が一種異様な空気をかもし出してゐた。清々しい朝だ。四角にくると、

「ちや、また、僕、こちらだから」

大木は青信号に従ひ、向ふ側に渡つた。涼子はうしろ姿に右手をふつた。

語り終へた娘の顔を、あらためて眺めながら、小峰は、

「それは、本当に伊豆子のお友達の経験談？」

喉に何かからんでゐるやうな声に出したが、しまつたと思つた。

「お友達の経験よ」

さう答へるより他はないだらう。友達から聴かされた話か、本人の経験か、その区別がつけられない小峰ではなかつた。が、やはり一應は訊かすにはゐられなかつた。彼は腹の底から、驚いてゐた。想像もしなかつた世界である。

——この娘の大切な成長の場合に、親が自分のことにかまけてゐた罰ではないか。

さう考へることは、古いやうだ。が、小峰には依然として力のある思考の方法であつた。

「伊豆子の胸の中も、そのお友達のやうに白い桔梗の花が諧調になつてゐるのではないか」

「さうかも知れません。あたしひとりでなくて、お友達は、たいていさうなんで

すもの」

「さういふことを、お互に語合つてゐるのだね」

「恋愛は若い人と、結婚はなるべく年よりと……ふふふ」

母親似の、しまりのない、甘つたるい、顔の奥に、このやうな打算がひそんでゐることが小峰には驚異だつた。平凡かも知れない。驚く方がをかしいだらうが、この子の成長に、すつかり不案内になつてゐたと、あわてる。

「伊豆子の胸に、眞紅の花が咲くのは、いつのことか。天晶君は、さうぢやないのか」

「お友達にすぎないわ」

「しかし伊豆子は、朝の外苑で、人目につかない場所をさがしに行くではないか。人民廣場の愛用者ではないのか」

「アメリカ風のボーイフレンドではありません」

「しかし、伊豆子の友達の中には……？」

「勿論そんなのもあります。もつと大胆のもゐてよ。言葉の通じないボーイフレンドがゐて、しよつ中高價なものをプレゼントされてゐる方もあります」

「さういふ人を、軽蔑しないのか」

「だつて、自分がいつさういふことになるかも知れないんだもの。ただチャンスがないだけでせう」

小峰は唸つた。伊豆子が椅子をはなれて、書齋を歩きまはつた。

「お父さまの頭の中にある言葉、あててみませうか」

「天晶君に対する伊豆子の氣持が、お父さんには判らない」

「伊豆子の奴、早く結婚させるに限るつて……」

「否定はしない。さうだ、若し良縁があれば、いまずぐにも結婚させたい」

「良縁、本人の主観でせう」

「それもあるが……」

「はい、結婚します」けろりとしてゐる。

「天晶君は、いいのか」

「お父さま、どうしてさう天晶さんに拘泥るのか知ら。あれは擬似恋愛よ。お友達より少しばかり親狎なだけ。だつて、天晶さんとほんたうに結婚が出来ますか。天晶さんのお姉さまは、もと男爵の千葉家に嫁いでいらつしやるでせう。お小遣に困つて、お嫁入りの時のつづれの帯を賣りにお出しになつたわ。それでもなほお困りで、お父さまにつくつて戴いたスーツをまたお父さまに買つて下さいつて頼んで……そんな家庭では、結婚どころの騒ぎではないでせう。どこの家庭も、火の車でせう」

間もなく伊豆子は部屋を出た。玄関のあたりで昌代と陽氣に話合つてゐる様子だつたが、小峰は憂鬱だつた。情なく、醜いことだと鼻腔をひろくした。理解の出

來ない限度のある憂鬱のかたまりを胸に抱いてゐるやうだ。天晶直嗣との交際を心配し、改めて娘を呼びよせ、安心がしたかつたのだが、かへつて未解決な問題を押しつけられた。しかし、一概に放縦とは言へないであらう。結構打算的でもある。いつ伊豆子とそのやうな娘に成長してゐたのか小峰には見当がつかない。

「何のお話でしたの。大変お話がもててゐたので、遠慮してましたわ」

昌代が、かはつて伊豆子の椅子にかけた。

「僕には、いまどきの娘の心に何が生じてゐるのか、見当がつかなくなつた。あれは決して馬鹿ではない。人生を甘く見てゐるとも思へないが、することが大胆不敵で、はらはらさせられる。本人はまるで周囲のもの心配を勘定に入れてゐない。何しろ不敵すぎる。三十八の男と待合に泊つて、平氣なのだ」

「伊豆子さんが？」と目を輝やかせた。

「あの調子では、しよつ中家を明けてゐるだらう。中野は、何も言はないのか」

「それで、伊豆子さん、どうしたの。その人が恋人ですか」

「いや、無事に切り抜けて来た。その経験を友達の経験談として、微に入り、細をうがって話してきかせたが、自分が経験しないでは観察の出来ない描写や説明をしてゐるのだから、語るに落ちたが、はらはらもするし、腹もたつし、怯えもするし、忌々しく情なくなつた。本人も、健康な経験とは思つてゐないのだが、あの子が、お酒をこのむといふことも、初めて知つた」

「いま時の花柳界つて、どんなか知ら。随分變つたでせうね。若い妓はゐないんですつてね」

小峰は、嫌な顔をした。古疵にさはられた思ひだ。昌代がその世界の出であることをしよつ中忘れてゐたいのだつた。昌代の過去を憎悪してゐる。昌代はまだ、過去を恥ぢてはゐなかつた。昔は、と、何でもないことのやうに触れる。恥ぢる心は少しもない。小峰は意外に思つてゐる。何か精神的に脱落したものがあ

か。低さを思はせる。彼女は過去を嫌悪してゐるといふのでもなかつた。まるで一般大衆にとつて自由であらうと不自由であらうと、いつかうに差支ないやうに、習慣と暗愚から、その区別を感じる精神がないやうに、それを切なく感じるのが僅かに知識人に限られてゐるのと同じ工合であつた。そこで育つた習慣と、のんきな氣性から過去を恥ぢるところか、何の批判も加へてゐないのだ。過去を絶えず傷として忘れずゐるのが、小峰ひとりといふことになる。昌代は好奇心から、伊豆子の經驗をくはしく話してくれと言つた。またとない興味だが拒絶することは出来なかつた。

彼は忌々しさを交へて、大体、聞いたとほりを細かく話した。昌代はにやにやしながら聽いてゐる。蒲團のあたりの説明になると、夫婦の遠慮のなさから、小峰はかなり露骨な描写をした。忌々しさと、腹立たしさから、露骨に話すことが復讐してゐるやうであつた。話しながら父親は、わが娘がなげやりな、むらな歩

調で、口笛を吹きながら人生の道を歩いてゐると思へてならなかつた。伊豆子は本道を見失つてゐる。そんなものは存在してゐないと思つてゐるのだらうか。道に迷ふといふことも、伊豆子の場合にはあり得ない風がある。そのくせ、どんな生活様式が、伊豆子には可能と考へられてゐるのか。自分に対する誠実といふことをどう考へてゐるのだらうか。自虐的に小峰は話しながら、そのことで、心からの驚きと幻滅を新しく感じた。

「それで、その後伊豆子さんは、その三十八の人に会はないのですか」

小峰は、あつと思つた。何故今まで、そのことに氣が付かなかつたのか。その方がもつと肝腎なことではないか。

「多分逢つてゐるでせうね。女は、氣の向かない相手にでも、その人から十遍好きだどくりかへされると、何となく路傍の石のやうには思へなくなるものですかね。ことにそんなことがあるば、はつきりと相手は自分を愛してゐる、自分が

あの時拒絶したのだ、今もなほ愛しつづけてゐるだらうといふことを、女は決して忘れはしませんわ。何となくその人に逢ひにいくものですよ。はつきりとした目的もなく、とにかく疎遠にはなれないといふ困つた心理を持つものですよ。それは夏の出来事でせう。それから何ヶ月も経つてゐる。伊豆子さんは、三四度は、何といふことなしに逢ひにいつてるでせうね。一しよにお酒をのんでゐるでせうね。自分に惚れた男と行動を共にすることぐらゐ、女にとつて愉しいことはないわ。だつて生殺與奪の権は女の手にあるのでせう。活かすも殺すも自分のままだといふ心理は、とても魅力的だわ」

「こはいことだが、君のいふ心理はたしかだ。さうだ、冷淡、無関心、嫌厭の念がはいつてゐるにしても、女は十分虚栄心を満足させることは出来るのだからね」
「あぶないわ。もうおそいかも知れないわ。この次に來る時には、その告白ぢやないか知ら」

「まさか。親に話すことは出来まい」痛みが、心をひらめき走つた。刺すやうな後悔の感じだつた。が、その名と由來をたづねるには、あまり永い時間が埋まつてゐる、さまざまな出来事があり、この場合一つ一つを引き出してゐるわけにいか
なかつた。

「こんな話を聞いたことがあります。或る素人のお嬢さんよ。とにかく待合までつれこむまでは成功したんですつて。女の人はその人を尊敬もし、愛してもゐたんですが、何しろ初めてのことで、びつくりして、恐怖にふるへ上つて、ふり切つて、逃げかへつたといふの。伊豆子さんは、そこを、巧みに外したといふから、素人娘にしては大した役者だけど、すると待合の女中が、逃げられた男をかういつて慰めたといふの。この次にはきつと女の方から誘ひ出しにくるか、心配しないで待つていらつしやいつて……そのとほりに、女の方から誘ひ出しに來て、しかも同じ待合で、さうなつてしまつたといふのよ。面白いでせう。

それが女の心理よ。伊豆子さんの方から、それとなくその待合へ誘はないとも限らないわね」

小峰はパイプの口を強くくはへて、不快に耐へた。昌代らしい考へ方、妓らしきものの見方には、嘲りをこめて忌々しがつた。娘のことだと思ひ、鋭い息詰まるやうな苦痛が胸を占めた。伊豆子は夏の夜の冒険から、無事に、まごつかずに引き上げてきた。そのことは、信じよう。しかし、伊豆子は事柄が複雑に、悲しくなり始めるところまでは見抜くことは出来ないのだ。彼女の行爲と言語の背後にあるものを、本人はよく知らないであらう。そこにあるものは滑稽と、世間にあるふれた悲惨だけだ。そんなあたりまへなことが見透せられないために、かへつて伊豆子は昂然と朝歸りの無事をよろこんでゐるのだらう。悔いであつたにしても、それはかへつて得意の感情をひき立てる道具にすぎないので、夏の夜のスリルだと、友達の経験として話をする事が出来るためには、伊豆子は愚鈍でな

ければならないのだ。だから男に愛されるのだらう。衝動的なだらしのなさが、愛嬌になつてゐたのだ。と云つて、このことは自分の娘に限つたことではあるまい。すると、伊豆子といふ年頃の異常な危険を宿した存在からは、いつときも目が離せられないと。

——中野に相談にいかう。

昌代に内緒で、彼は心を極めた。

10

四ヶ月が経つた。

毎日曜日の午後、ダンスのレッスンのため、伊豆子は小峰の家に現れた。が、その後は父に告白するといふ氣配をみせなかつた。小峰も強ひて、自分の方から

は訊ねない。伊豆子は、あのやうな告白をしたといふことも忘れてゐるらしかつた。

小峰も初めの内は、杉子や昌代に手をとられ、皆といつしよにステップを踏んでゐたが、熱心になれず、いつからか書齋に引きこもつた。年とともに潔癖に、繊細に、調子と趣味といふ点では、敏感になつてゐた。このごろは、お茶をはじめてゐる。お茶の会に招かれて、方々に出向く。大学教授や、美術館のやめた館長や、バージで公職を退いた人々の集まる茶席であつた。生きんがために働いてゐる感じを與へる人は、一人もゐなかつた。晩年をたのしんでゐる人、無聊をもてあましてゐる人、生きてゐる人間としての自己には何の價値も置いてゐない人、素顔にもどつた俳優のやうに、血なまぐさい現実を離れることのみが当面の目的といふ風にして、一同は風流を愛した。活氣がある筈はなかつた。年齢は小峰が一番若かつたが、彼らの仲間にある時は、灰色にひつそりと歩いてゐる人のやう

に自分を感じた。

一ト間しか日本間がなかつたが、そこにろりを切らせて、彼はひとりで釜の鳴る音を聴いてゐる時が多かつた。——今日も、釜の音を聴いてゐた。椅子セツトを片附けた應接間からは、電蓄がひつきりなしに鳴つてゐた。時々、若い笑ひ声が聞えた。彼は釜の音を聞きながら、壁にかけた振袖を眺めてゐた。鴨居から疊にいつぱいに垂れて、見事な振袖であつた。

黒い地に、朱色の疋田鹿子が雲形にはいつてゐた。裾には御所車、松が散つてゐるが、金糸銀糸で縫ひとりかしてある。豪華絢爛たる振袖だつた。裾のところには、包紙にはいつたままの西陣の丸帯が置いてある。

「三万五千円で賣りたいと仰言るの。買手があるか知ら。一生に一度しか着ないお振袖でせう。よほどの闇成金でなければ、手が出ないでせうね」

昌代は最初から小峰の氣持を封じようとした。伊豆子の婚礼のためと、大分小

峰の心は動いてゐた。

「笠家といへば、家柄もたしかだし、そこから出たものとすれば、お古でもかまはない。いま時これだけのものを作らうとすれば、十万以上は出るだらう。十万円出しても、これだけの藝術品が出来るかどうか判らない」

笠家が全盛の時、長女を飾つた振袖である。現金に困り、長女が賣りに出した。いづれ伊豆子の結婚となれば、現金をもたない彼は土地をいくらか賣らねばならないのである。長女には振袖を着せてやりたく、見る度に、この振袖を手離す氣がしなくなつた。

「あたしなんか、こんなお振袖なんか一度も着たことがなかつた。残念だわ、一生に一度は着てみたいわね」

さうも昌代は言つた。

「でも、これからの花嫁は、ほとんど洋装でせう。経済的だし、重い髪なんか結

ひたがらないでせうね」

伊豆子もさうだとは、小峰はきめてゐなかつた。中野は勿論、文金高島田をのぞむ組である。小峰は釜の音を聞き、あかずに振袖を眺めてゐたが、やがて部屋を出た。

應接間では、ワルツの番になつてゐた。伊豆子をそれとなく誘ひ出すつもりで、扉を開けた時、恰度伊豆子がこちらに向けて歩いてくるところであつた。彼は目顔で招いた。

「何かご用」

と言ひながら伊豆子が、ついて來た。

「ついておいで」

日本間にはいつた。

「まあ、素敵！ どなたの」

伊豆子は顔をかがやかせ、そつと長い袖を探るやうに両手にのせた。すしりと重い手触りだつた。

「伊豆子は、洋装で式を挙げたいかね」

「さあ、どちらにしようか知ら。一生に一度のことだから、高島田に結つてみたわ。こんな立派なお振袖を見ると、着てみたいわ」

「氣に入つたなら、買つてあげる。笠家から出たものだ。出どころがはつきりしてゐるから、よいと思ふ。いまどきこれほど立派なものはない出来」

「高價なものでせうね」

「しかし、伊豆子の結婚だから……」

先日、或る美術館からラブラードを十五万円で賣りにきたのを思ひ出した。金もないので、断つたが、三万五千円なら安いものだ和小峰は心を極めた。

「新品と同じね」

「一度しか袖を通してゐないのだから、新しいのも同様だ。紋は染めかへることが出来る。中野も、お振袖の伊豆子をみたら満足だらう」

「買っていただくか知ら」

「笠家でも、伊豆子を当てにして持ちこんだものだ」

「ちよつと着てみませう」

小峰が外してやつた。伊豆子が服の上から羽織つた。顔にあたるところに生地
の黒が出てゐるので、顔は白くひき立つた。伊豆子は裾をひきずつて、二三歩
いた。夢見心地がするらしい。内側から合はせて、伊豆子は目をつむつた。目
前に揺曳するものを享樂してゐる顔だ。豪華な振袖に包まれて、凝然と立つて
る姿には、あふれるばかりの貞潔な淨福が感じられ、小峰は喜びを覚えた。

「和服にきめるかね」

ぱつと鳴つたやうに目を開け、

「お願い、買つて頂戴」

娘らしい調子で力をこめた。

人の氣配を感じたので、小峰がふりかへると、闕のところに大柄な昌代がつつ立つてゐた。いつもより大柄に見えた。ものも言はない。顔色は蒼かつた。すると、小峰の顔を後悔めかしい反省の色が掠めた。今のいままで、昌代を、親子の尋常一様の境から閉め出してゐたからだ。見破られたと、小峰は怯えた。

「今日は笠さんそこから取りにくる筈だつたでせう。疊んで、もどどほりにしておいて下さい」

さういふと、昌代は廊下を鳴らして遠去かつた。

小峰は切炬燵にのせられた一枚板のつやを撫でたり、大きさを両手ではかつたり、ちよつと引つばつてみたりして、馴染のない板をたしかめてゐる。半分は無意識の状態にあつた。中野の茶の間である。八疊の部屋の片隅につくられた炬燵だが、脚を入れてゐるのは彼とたき子である。章や杉子は何をしてゐるのか、自分らの部屋にはいつて、わざとのやうに出て來ない。丹も伊豆子も、大分前から座を外してゐた。父と母を並べてみることに、氣持に副はないやうである。

「火を直しませうか」

「いや、十分暖い」

お茶と一しよに出されたおもだかの蒔絵のある銘々皿の最中が、そのままになつてゐた。たき子がお茶を入れ直した。

「二寸ほど大きくなりました」と板のことを言つた。

「ああ、これね」

「この間、やつと出来てきました」

「見慣れないと思つてゐたが、この板、最近のものだつたのだね」

「以前のがすつかり乾燥してしまつて、一枚板と思つてゐましたのに、まん中から割れて来て、年々すき間がひろくなりましたので、これを注文しました。以前のにくらべると、二寸ほど四方に大きくなつてゐます」

「さうだ、うつかりしてゐた」

この家で泊らなくなつてから、十年近く経つてゐた。籍の上では今だに立派に妻だが、たき子と夫婦のまじはりを断つてから十年近い月日が過ぎてゐる。かうして向かひ合つてゐると、胸に去來する感情が一つ一つ少しづつ勝手がちがつてゐた。どの感情にしても、どぎついといふのではなかつた。よく打耕された畑を見るやうな、おだやかなものが、感情の基調になつてゐる。この五十に近い女性の祕密は、何もかも知りつくしてゐるのである。年々に老けていく速度も、小峰は

それに手をそへてゐるやうに間違ひなく言ひあてることが出来た。一顰一笑も、わがもののやうに近しいのだ。この妻でない妻には十年前夫婦の關係を絶つた時から、何ら成長がなかつたやうに思はれる。成長を停めてしまつた存在である。その祕密は自分だけが預つてゐる。どこにも不案内なところはない。しかも、いつでも待機のやうな姿勢でゐる。妻としての意味と位置とあたたかさを、彼のためにとつておいてゐてくれる。彼がその氣になれば、十年間は瞬間にふつとんでしまふのだ。この夜からでも世間の夫婦のやうに還へることは可能である。妻はこばむまい。躊躇も示すまい。良人に対してのみひそかに忘れた羞恥感は、十年前の妻の形のままだに残されてゐる。何年間も会はなかつた男女が出会い、焼ぼう杖に火がつくといはれる情熱も、自分等の場合はもつと自然に行はれるにちがひなかつた。妻は昔から、自分を主張しない性格だつた。と言つて妻の中に拒絶が準備されてゐるかも知れないと疑ふのではない。妻の方から誘ひかけるといふこ

とは、金輪際出来ないのだが、従順であることは、また性格である。ただ小峰がさうしないだけである。かうして妻と向き合つてゐる感情は、若い頃血道をあげ、周囲をこまらせた男女が老年にはいつて、偶然に出会ひ、しみじみと互の顔を眺める心境に似てゐるやうな氣がする。しかし、たき子が老婆といふわけではなかつた。粉がふいたやうに色が白いの、生れつきであり、醜くない程度に贅肉をつけてゐる。が、更年期がとうに終つたといふ感じもあまり與へない。香水をつけてゐたにしても、をかしくない。うすく白粉をつけてゐるのも、ふさはしいのである。眦の皺はさすがにかくしやうはないが、その血管の中には、まだいくらか情熱を流すことも出来るのだ。十年の空聞のために駆け足で老いこんでしまつたといふことは、世間にままだる例だが、たき子がさうでないのを、小峰はこつそりと喜んでゐた。残酷な、利己的な、口には出して云へない感情である。

「二十二ですものね、決して早くはありません」

たき子が思ひ出したやうに言つた。

「勿論早くはない」

「をかしいですね。どうして躊躇なさるんですか」

「考へすぎることかも知れない」

「伊豆子は、お父さまに任せると言つてゐます」

「だから、よけいに困るのだ」

「火がついたやうに騒ぎ出したのは、あなたの方でせう」

「それには、それだけの理由があつた」

「それとこれとは、関係がないと仰言るのですか。それこそ、判らないお話ですわ」

「そちらは、どうなんだ」

「伊豆子と同じです」

「いや、自分自身の考へが知りたい」

「決して早くはありませんし、結構なお話と思ひます」

「伊豆子は困つてゐるのではないだらうね」

「むしろ反対ですわ」

「だから、よけいに判らなくなつた。いまどきの若い女性が、見合をしただけで結婚する氣になるなんて、不見識きはまる。僕らの二の舞ひを進んでやる氣が知れないのだ」

「度々会つてゐます」

「えつ、そんなこと……櫻井の方から、伊豆子を誘ひ出すのか」

「お見合の時、これからしよつ中会つて、お互をよく理解し合はうといふ約束でしたから。伊豆子はその内に、ごこへもお連れしてよいかと訊いてゐました」

たき子は笑顔になつた。

「天晶さんにも、鑑定をして貰ふのだと言つてますわ」

「天晶の直嗣君、そのことを知つてるのだね」

「伊豆子が話してました」

「いよいよ判らない。それでゐて僕に、最後の断を下してほしいといふのだね。いまごろの娘は、いつたいどんなことを考へてゐるのか、判らなくなつた」

「いつかの待合にいつた伊豆子の友達のお話、あれはたしかに伊豆子のことです。でも、伊豆子には強いところがありますから、信用してゐます」

「女親は娘の成長の祕密が、男親以上によく判つてゐるからだね。僕は、章や丹のことではそんなに心配しない。何をやつても、理解が出来る。といふことは、危険の程度が知れてゐるといふことだが、娘となると、まるで判らない。必要以上心配する。それで何かね、伊豆子は、天晶君以上に櫻井辰夫君が好きになつたといふのか。天晶直嗣と早朝の外苑で会つたりしながら、二人はいつたいどん

な話をしてたのだらう。單にあそんでゐたのだらうか。擬似恋愛だつたのか」

「お見合といふ古い形式に拘泥つてはいけなと思ひますわ。古い形式を單に借りただけです。双方の親たちは、單に、誰かお友達に紹介されたとか、パーティで偶然お話をするやうになつたとか、日本には外國流の社交会といふものがありませんか、その代役をお見合ひがやつたのだと軽く考へてゐた方がいいのでせう」

「若し相手が氣に入らなかつたら、伊豆子は遠慮なくさう言つたらうね」

「もちろんですわ」

「それなら、僕らの二の舞ひではない」

「お見合つて、面白いわ、まるで百万円の籤みたいで、新鮮な興味がもてたと、伊豆子は笑つてゐました」

「待合にいつた話から、一刻も早く伊豆子を片付けようと、君をせめたてたが、

結果は、後悔しなくてもいいのだね」

「動機がどうあらうと、結果がよければ、よろこぶべきこととせう。わたしの方としては、別にせきたてられたとは思つてゐません。かういふお話は、相手をさがしに鐘や太鼓で歩きまはれるものではございませんから」

「偶然よい相手が早く見付かつて、よかつたね」

「ほんたうに仕合はせです。とても先方は、のり氣なんですから、伊豆子は仕合はせになります。伊豆子も娘時代に何も思ひのこりは無いでせう。したいだけのことはしてゐるのですから」

「さういふことが判つてゐて、黙つて眺めてゐたのだね」

「不干涉主義でしたわ。それでよかつたと思つてゐます」

「僕も、それを素直によるこばう」

「わたしのやうな生ひ立ちとか、娘時代、そして結婚は、わたし一代でやめてし

まひたいものです」

小峰は眼を伏せた。たき子としては、別にいやみを言ふつもりではなかつた。

「杉子はうまくやつてゐるか」

「今年の内には、どうやら、おばあさんになります」

「さうだつたのか」

何んだかひとごとのやうに小峰は感じる。

「レヴェーの踊子をしてゐた杉子ですから、そのことでつまらない負目を感じるのではないか、若しさうだつたら、思ひすごしだと、多少心配して見てゐたのですが、今日では、レヴェーの踊子も一般の女子の職業と同じやうですね。さう考へるわたしたちの方が、古いんですわ。とても朗かです。小峰家にはないものを、

あの子は持つてきてくれましたわ」

「みんなうまくいつてゐるのだね」

「伊豆子は、あれで料理に興味もあります、デザイナーとしても才能をもつてゐます。杉子のは、大抵伊豆子が作ります」

「後顧の憂なしだ。うれしいことだ」

「せめて子供たちでも仕合はせになつてくれなかつたら、わたしの立瀬がありません」

もうかへる機会だと、小峰は切炬燵から脚を抜いた。

玄関に出ると、伊豆子と章と杉子と丹がどやどやと出てきて、母親と並んで見送つた。小峰は靴をはき終り、一同に向かつて立つた。

「あの振袖が早く着られるやうになつて、よかつたね」

と、伊豆子に云つたが、彼女はけろりとして、子供のやうな頷き方をした。並んでゐた杉子が、伊豆子の肩を両手で抱いた。

「おめでたう」

小峰は寢静まつたせまい通りを歩いた。省電から降りてくる人々はあるが、駅に向かつて歩いてゐるのは、彼ひとりである。彼の眼には、一家の写真が焼きついてゐた。父親だけが抜けてゐる小峰家の顔顔である。どこかでそんな写真を見かけたやうな氣がする。自分はすでに小峰家の一員ではなくなつてゐるからだらうか。彼は、不意に胸の中心をつかまれた。その一点がきゆつとしめつけられると、やがて胸全部に痛みがひろがつた。

——さて、この話を、昌代にどう報告すべきか。

知合から振袖を買つたといふだけで、すでに小峰と昌代の間には溝が出来た。返せば、子供のやうに昌代の感情はもとに戻るのだが、伊豆子の手に渡つてしまつたといふ事実を、昌代は忘れてはゐないのだ。燠あきは残つてゐる。いつでもかあつと焰をあげるのだ。章の場合の苦い経験はくりかへしたくなかつた。しかし、避けられないことである。と言つて、伊豆子の結婚式には父親が欠席するわけに

はいかない。

——伊豆子のあとには、まだ丹がある。同じことを三度もくりかへす運命にある。

ベッドの上でむちやくちやに殴られたことを、小峰は忘れてはゐない。眼を吊し上げ、憎悪でゆがんだ昌代の形相は、忘れられない。あんな形相はめつたに見るものではない。殺し合ふ人間同士にも、あの顔は見られないだらう。あの凄惨な、思ひ切つた憎悪の形相には、愛情が裏返しになつてゐるからだ。何もかも知りつくした、妻の位置でなければ判らない、その位置でなければ示すことの出来ないものがあつた。ねちねちとして、かきまはされた、臍物の臭氣と醜悪さと兇暴なものがあつた。他人には通じないものである。主義や、欲望から相手を殺す人間には、まだどこか説明のつく、すくはれる余地もあるだらうが、あの若い妻の形相には、妻自身が己をさらけ出した極限が感じられた。あの形相にとつては、

殺人といふことはその手前の出来ごとだ。殺人でも、あの形相は埋められないに
ちがひない……。

小峰は悄然と、乗客の少ない歩廊に立つてゐた。

12

或る日、外出はしたが、夕食に間に合ふやうに小峰が帰宅すると、昌代がゐな
かつた。

「どちらへ行くとも仰言らないで、おでかけになりました」と女中がいふ。

珍しいことだ。無断で外出する時には、それだけの理由のある場合に限られて
ゐた。昌代は夕食で親子が顔を合はせることを、一日の中でももつとも大切な愉
しいことに考へ、料理にも氣を使つた。夕飯の支度をして待つてゐたが、或る時、

小峰がなかなか戻らなかつた。電話も來なかつた。昌代は二時間待つた。節にも箸をもたせなかつたが、眠たげな幼い子供を、大人の感情の犠牲にするには忍びず、節だけはすませて、たうとう小峰の帰宅まで食事をしないでゐた。小峰も氣にかけてゐたが、夕飯の時間が過ぎてしまふと、待ちつかれて食事をすませてくれただらうと、のんきに考へてゐた。わが家にもどると、そんなのんきなものでなかつたことを思ひ知らされた。昌代は血相を変へてゐた。血相を変へてから随分時間が経つてゐる風だつた。

「電話といふものがありますよ。ちよつとした努力で、済むことではありませんか」

「僕は、軽い氣持だつた。さう君のやうに咎められると、すまなかつたとは思ふが、何もそれほど拘泥することではないといふ氣がする。をかしいよ」

昌代の憤怒には、空腹からくる苛立たしさも多くまじつてゐた。ちよつとした

出來事だつたが、言葉のいきがかりで、遂に愛情の本質論にまで發展した。小峰も苦笑ですませられなくなつた。昌代が昂奮して泣いた。寢てゐた節が泣き出した。女中たちは女中部屋で身をひそめた。無意識のやうに何氣なく犯した過失が、そこまで發展するのも、女ごころとしては無理もないことだと、以後は、必ず帰るか、電話をかけることにした。さう仕向けた本人が、無断で外出し、夕飯時にもかへらないのである。小峰は食堂で、節と向き合つた。節は食べ終ると、電蓄のダイヤルを廻して、短波のを鳴らした。小峰は一時間待つた。歸つて來さうにないので、食べた。

昌代は、九時前に歸つて來た。

「どこへ行つてたのか」

「お友達のところ。あそびすぎて、氣が付くと、もう八時すぎでせう。あわててかへつて來ましたの」

これが立場を変へてゐたならば、大騒ぎだと、しかし自分は何ごともいふまい。さうすることで、小峰は意地の悪い、寛大な態度からくるいい心もちになった。昌代が、かつて慍つたことを忘れてゐるのも痛快であつた。

その後、小峰は何となくをかしい暗合だと氣が付いたのだが、自分が外出をする日に限つて、昌代が無断で外出をするのである。かへりは、おそかつた。或る時は昂奮のさめやらぬ顔をもつて來た。或る夜は、眼のふちをうすく染めてゐた。歩きつかれた人のやうに疲れてゐる場合もあつた。帰宅すると早々、

「背中が痛い。どうかしたのかしら。かがめないくらゐ痛いわ。電気マッサージかけて頂戴」

女中にいつてゐる声が聞えた。女中がやがて電気マッサージをはじめ氣配だつた。「さう、そこのところを。胃の恰度うしろね。氣持がいいわ。別にいつもと變つた姿勢はしてなかつただけど、段々痛くなつてきて、耐らなかつたわ」

四つ足のある電氣マッサージが強く肉体に押しつけられる時の、地をくぐつて響いてくる律動が、小峰のところまで聞えた。その器械をもつばら使用するのは、彼である。昌代の年齢でマッサージは、滑稽に思はれた。逞しく、疲れを知らない若々しい肉体ではないか。

「椅子のせるだつたかしら。さういへば、あまりかけたことのない、ちよつと変つた椅子だつたわ。それにかけてゐたから、へんに背中を圧迫したのね」

その声の限りでは、小峰の氣に入るやうな想像は組み立てられなかつた。昌代はいつたいこの頃何をしてゐるのか。外出先をくはしく説明もしない。節と良人が、さびしく夕飯の卓につくのを無視出来るほど、何ごとかに氣を奪はれてゐる風であつた。自分のまるで知らない世界で、おそろしいことが進行してゐるのではないか。彼が外出する日に限つて、昌代も外出する。鬼のぬ間に洗濯といつた、かくれて行ふ情熱が漠然と感じられるのは、どうしたといふのだらうか。彼

が家にゐる時の彼女の外出の場合は、いちいち行先を明瞭に言つた。かへりの時間も正確に守つた。

小峰は余儀なく昌代をうたがつて見なければならぬやうに仕向けられた。そのことが、不快だつた。業腹である。昌代の外泊の、二種の使ひ分けは、計画のやうにつづけられた。妻があやまちを犯した。良人はその復讐をして、妾をかこつた。といふ或る小説家の例を思ひ出して、憂鬱になつた。かりに昌代があやまちを犯した場合、復讐するために別の女をかこふだけの勇氣が自分に出るだらうか。心細いのである。彼がこのやうな場合、特に、都合の悪い小説家の例を思ひ出したといふのも、小説家の妻も昌代も、水商賣の出であるといふ事實に據るのである。小説家の妻も昌代も、身を固めるまで、処女であつたとは言へないからである。あやまちを、普通の女性が犯す場合よりは容易に犯せる境遇に育ち、さうしたことゝに潔癖を失つてゐるからである。とすれば、小峰が嫉妬をするのも、

それほど不自然ではない。

——ダンスの講習会を、このうちで開くことになったのが、そもそもことの発端ではないのか。

講習会については、初めから不賛成であつたのだと、小峰は自分に言つてみる。講習会は、毎週つづいてゐた。その時間になると、小峰は書齋か、藏書室にひつこもつてしまふ。が、電蓄は聞えて來た。

彼は藏書室で、一冊の洋書を長い膝にのせてゐる。右手の灰皿からは、吸ひかけの煙草がすでに一センチも灰になつてゐた。この本は、フランス大使館に入る友達が、大使館の誰かに借りてきたものをまた借りたものである。戦後フランスの知識人、文化人に與へたアメリカ文化の影響といつたテーマの、ごく新しい本であつた。三十頁も読み進み、とまつてしまつた。客間のブルースが氣にかかる。今日は、最初からブルースばかりかけてゐる。

「サイドステップ、サイドステップ」

といふ昌代の声が聞える。あとは、黒板に何か書いてゐるチョークの音だけになつた。台所に使ふ黒板を、講習会には客間にもち出し、男女の靴型を書き、番号をつけ、ステップを図解することになつてゐた。

「……二歩左によつてから、また一步右へもどるのです」昌代の声だ。その間にも、ブルースのレコードは唱つてゐた。「この時の右足は、ただ左足の方へよせただけで、体重は左足にかけたまま、右足はういてゐるのです」

やがて図解のやうに、曲に合はせて、昌代がひとりですテップをふむ氣配であつた。

「杉子さん、ちよつと」

その声のあと、あたらしいレコードに変わった。星を数へたこの指で、涙ぬぐうてとかす口紅よ、泣かないで泣かないで、風にまかせて、ゆけばあいてる庭の門。

聞いてゐる小峰には、その歌詞が何を云つてゐるのか判らなかつた。意味はないのだ。ただ言葉の感覚だけである。

「ね、もう一度……右側シャツセウオール……左廻り、リヴアース・ターン……サイドステップ……ナチュラル・ターン」

といふ昌代の註釈が歌詞の間に入つた。先生の踊りの場合、昌代が男となり、杉子が相手になつた。二人とも日本の女性にしては腰が高いところについてゐた。ステップに伸びる足は、颯爽として、美しかった。ふだんは見かけない感覚があつた。ことにこの二人がタンゴを踊る場合は、小峰は惚々と見とれてしまふ。長い、美しい線をもつた足が互に一個の生きもののやうに呼吸を合はせて、ぴたりとくつついたまま、滑らかにリズムにのる。昌代の肉体とその動きには、もはや何一つ知らないものはない筈だつたが、踊りとなると、未知の線や躍動が次々に発見されて、別人のやうに思はれる。しみじみ美しいと思ふ。昌代を見直すとい

ふ氣持になるが、踊りそのものの美しさにも目が醒める思ひがする。深夜、妻の踊りを一人で観賞し、手をたたき良人の話を、昔の本で読んだことがあるが、妻の肉体、その線と躍動を公衆の眼前にさらして、美しい感動を新たにすることは残念なほどである。と考へた小峰は、ふいにどきりとなつた。どきりとなつた自分を、いそいで言ひ紛らしにくるものがあつた。

——陰山といふ男！

厚い地のカーテンによりそひ、陰山なる人間が、自分と同じ感情をもつて昌代を眺めてゐるだらうと想ふと、小峰はかうして落着いて読書してゐることがいつべんに嘘になりさうだつた。陰山なる男に拘泥することは、いやである。自尊心を傷つける。さう思ふしりから、拘泥つてゐるわが心の動きには、もはやとぼけてみせることも出来ない。昌代の声や、レコードがいちいち聞えてくるこの藏書室にはいつてゐるといふことさへ、自分を裏切つてゐる行爲だつた。拘泥つてゐな

いのなら、この時間だけでも外出してゐる筈である。芝公園を歩いてゐる筈である。外出しないまでも、客間の物音が聞えない部屋に逃避すべきであつた。拘泥つてゐるのだと口惜しがり、恥しがりながら、拘泥らずにはゐられないのである。「馬鹿」と自分に云ふ。「何をお前は見てゐるのか」

「矛盾だ。僕自身だ。怠惰の終りだ。退嬰の極が見たい」と小峰は應へる。「僕はこの生活を、決してよいものだとは考へてゐない。しかし、僕は動き出さない。ね、僕の影、僕の分身、いや、僕よ、他人よ、自分だけに許されてゐる生活、つまり個性的な生活と今日の今日まで考へてゐた生活が、何とレディメイドになつてゐることか。さうは思はないか。僕のやうなのを失はれた世代といふのだらう」

すると、彼の思つた通りをもう一人の彼が答へた。「その通りだ、君はいふことと、なすこと、考へること、すべてが戦争前の言葉で今でも話してゐるよ。外に

言葉を知らないのだ」

ところで、ブルースは次から次に流行の歌をくりかへしてゐる。……やさしあ
の腫が忘れぬ、ああ霧の灯がうるむ、さらばまぶたのおもかげよ……

「数字が書いてない初めの足型は、前のところの、この78と910です。つまり
78、910から、この12とつづけてステップをふめばいいわけです。廻轉の時
は棲先で、踵はちよつと挙げるだけです」

昌代の声が、大勢の踊つてゐる間から聞えた。陰山は、誰と組んでゐるのか。
三十七歳の陰山は、すでに五十年配のやうな落着きをもつてゐた。昌代の姉の紹
介で、この講習会に出入するやうになつた。薬品のブローカーをやつてゐるとい
ふが、軽薄な派手な印象は與へない。声に出して笑ふといふこともあまりなかつ
た。慇懃だ。誰にも一應は好意をもたれる型である。声は一種独特のもので、余
韻をのこした。濕りと、何となく力が感じられた。小峰は一ト目見た時から、い

はゆる花柳界の女たちに好かれる型だと思つた。さうあらうと努めてゐるわけではないだらうが、ブローカーがうまくいつてゐるのか、服装にも、挙措動作にもゆたかなものが感じられた。

この日、講習会が終ると、一同がかへるのと一しよに昌代が外出の支度をはじめた。

「銀座にいつて來ます。夕飯はどうぞお先に」

そして十時すぎに自動車でかへつて來た。「さようなら」玄関の外で、言つてゐるのを、小峰は寢室で聞いた。誰に送られてきたのか。昌代は何か口ずさみながら、しばらく二階に上つて來なかつた。愉快だつた氣分を失ふのが、惜しい風である。踊るやうな梵音をたて、二階に上つて來た。廊下のスキッチが鳴つた。暫く、靜かになる。節の部屋をのぞいてゐるらしい。それから寢室のとなりにはいり、着換へを始めたやうすであつた。三面鏡に小さい壘が鳴る音が起つた。小

峰は枕許のスタンドを消してゐたが、つけようか、眠つたふりをしてゐようかと迷つた。扉が開いた。隣室のあかりで、横になつてゐる小峰の顔が浮き上つた。

「お休みではなかつたのね」

それを少しも意外に思つてゐない口調であつた。うつかり眼を開いてゐて、彼
は一番分の悪い恰好を見られた。

「どこにいつてたのか。もう十時すぎだね」

サイドテーブルの置時計を見たが、言ひ方がわざとらしいと、自分がいやになつた。

「陰山さん達とホールへいつてました」

「あれから？」

「あなた、沖繩料理つてご存知？」

「知らないね」

「どこか長崎料理に似てるけど、おいしかったわ」

「ご馳走になつたのか」

「陰山さんに誘はれたので」

ベッドに腰かけ、昌代は目を避けてゐた。長い足を伸ばしたり、ぶらりぶらりとさせて、みごとな形をたのしんでゐる。何かをごまかしてゐるらしい。さう感じられても仕方のないといつた風で、何か事後の感じが微妙に漂つた。

「君ひとりか」

「さう、ひとり……京橋の映画館の裏手に、新しく沖繩料理が開店しましたの。まだ壁も乾いてないで、十分な料理は出来ないと言つてましたけど、おいしかったわ。沖繩美人がゐました」

「それから、陰山君とホールへいつたのか」

「さう」

「それぢや君ひとりだらう」

「さう」

「何故陰山さん達と、複数でいふのか」

「さう云つたかしら」

「時々、ホールへいくのかね」

「ダンスといふものは、習ふより慣れろつていふわ。つまり度胸ね。下手だつて、平氣よ。ホールに慣れてしまふことが肝腎で、自分が下手だつてことを自分が忘れずにゐる間は、いくら習つたところで上達はしませんわ」

「僕は、上手になりたいとは思はない」

「さうでせうね、もうあなたの年齢では……休ませうよ」と言ひ、隣室のあかりを消しに立つた。

——この女とゐる限りは、しよつ中いぢめられてゐるみたいだ。

月が出てゐた。鎧戸の隙間からもれる白い光りに氣が付いたのは、昌代が並んで横になつてから暫く経つてゐた。

「陰山君には、奥さんがあるのだらうね」

すぐには應へなかつたが、大分経つてから、いかにもそのことに興味をもつてゐない声で答へた。

「あるでせうね」

「美和さんの紹介だけど、美和さんは保証出来るだらうか」

「何の保証」

「つまりあの人間に対して……」

答へはなかつた。

「美和さんは、自分もダンスを習ひたいといつてゐながら、自分は來ないで、他人ばかり紹介してよこす。美和さんの昔の知合だと、困るからね」

「大丈夫ですよ。あたしは一銭だつて出しません。みんな陰山さんが拂ひますから」

「何もそんなことを訊いてるんぢやない」

「あら、それが知りたい肝腎なことではなかつたの。さうだと思つたわ」

さういふと、スプリングを軋ませて、昌代がくるりと向ふ向きになつた。

13

昌代に客があつた。應接間で話をしてゐる。書齋口にゐた小峰は、読書に夢中になつて、永い間、そのことを忘れてゐた。思ひ出すと、何となく胸騒ぎがしてきた。

「お客さんは誰か」

「陰山さんおひとりです」

女中が郵便物を置いていつてから、小峰は急に顔が醜くゆがんでしまつたやうな氣がした。この顔をもとに戻すことは出来なかつた。己の家の中を歩くのに、何の氣がねがあらうかと、廊下を不斷の調子で歩き、便所にはいつた。出て來た時には、強がりや、とぼけてゐたいといふ不正直は押しつけて、應接間の扉にはめこみになつてゐる硝子に近付いた。普通のすり硝子でなく、凸凹のある、模様風の硝子のはまつてゐた。應接間は窓から明りをうけて、灯がともつたやうに明るい。が、こちらは廊下の暗さのため、硝子に顔を近付けてゐても判らないのである。すこしはなれて見ると、應接間の長椅子に二人がかけてゐるのが、ぼんやりと見えた。よりそつてゐるとは云々ない。が、差し向かひでない位置が、小峰にをかしいと思はせた。顔を近付けた。凸凹になつてゐる模様の一つが、透明な硝子のやうに中を映し出した。が、それも僅かな一点であり、中の人間はゆがんで

映つた。しかし、比較的よく見えた。二人の間には、二尺ほどの距離があつた。低い声で話をしてゐる。昌代の笑ひ声が聞える。何故低い声で話をしなければならぬのか。二人の表情が十分に見られるほどには硝子は透けてゐなかつた。小峰はジリジリした。聞きたい、知りたいといふ欲望にかられながら、意外に自分が冷靜であるのに氣が付いた。

廊下に誰か近付いたので、小峰は何氣なく離れた。

間もなく、陰山は歸つていつたやうだつた。昌代がいつものやうに女中にもいひ、ふるまつてゐるので、小峰も、ことさら訊き出すわけにはいかなかつた。

陰山は、ダンスの講習会には必ず出て來た。

「たまには君の方で、ご馳走しなければいけないね」

「ふふふ、そんなことしたら、またあとで叱られるわ。あなたのお金は無駄に費ひませんから、安心してて頂戴」

「僕は吝嗇ぢやないよ。理由のある金なら、いくら費つたつてかまはない」

「はい、はい」

陰山が他の日にひとりで訪ねてくる時には、菓子箱や果物をもつて來た。或る時、昌代はレコードをかけ、陰山と踊つてゐた。陰山の來たことで、苛々してゐた小峰は、適当な口実を見付けた思ひで、女中を應接間にやつた。やがて、陰山は歸つていつた。己の意志が昌代を押へつけたことを、半分痛快に思ひ、のこりの分では自己嫌惡になつてゐる時、

「失礼ぢやありませんか」

一 騎討の表情で、昌代が書齋にはいつて來た。

「講習会以外の日に、ダンスレコードをかけて、踊られるのは耐らない。君にはこの氣持が通じてゐた筈だ」

「あたしにはあたしの交際圏があります」

「認めてゐるよ」

「嘘仰言い」

「僕が、何を干渉したといふのか」

「女中に何をいへと仰言つたのですか。ダンスをやめろ、気が散つて本がよめない。それを傳へるには、もつとちがつた穩当な言ひ方があつたでせう。陰山さん、恐縮して、すぐおかへりになりました。おそらく次の講習会に欠席なさるでせう。あたしの顔をつぶして下さいました。恥をかかせて下さいました」

「何もそんなつもりで言つたのではない」

「フランス学者で、進歩的で、良心的で、戦後の世の中に対して誠実の思想をめぐらせてゐるらしいあなただけれど、大うそだわ。あなたの澁面なんか、誰が信用するのですか。下手な役者ですよ。その実は、封建的で、独裁者で、吝嗇で、やきもちやきで、自分さへよければいいといふ人間ではありませんか。こんな人

だとは知らなかつた」

「云ひすぎだらう。いくら良人に対しても、口に出してよい言葉と、さうでない言葉がある。その見分けがつかない君でもないだらう」

「あなたなんか、ちつともこはくない。あなたなんかちつとも尊敬してませんよ。あなたなんか、二タ言目には自意識過剰と仰言るけど、本物の自意識過剰なら、もつと苦しんでゐる筈です。もつときびしいものがある筈ですよ。あなたはさういつて、自分をなぐさめてゐる。ごまかしてゐる。意久地なしと、どれだけ違ふのですか。フランス語がきいてあきれれるわ。あなたは單に、その頭の脳味噌の皺の中に、フランス語をつめこんでゐるにすぎないぢやありませんか。今日までに、それから何がいつたい生れましたか。一度ゆつくり伺ひたいと思つてたわ。あなたのやうな人間にくらべたなら、陰山さんは一分一秒だつて、立派に生きてゐます。あの方は、けちんぼうぢやない。仕事をする。悪いことをしてお金

を儲けるのではないわ。あなたに一銭だつて儲けることが出来ますか。それだけだつて、あなたは陰山さんくらべものにならないわ。あなたのやうなおぢいさんと結婚するんぢやなかつた。あたしはまだ若いのだわ。さうだわ、これからだつて結婚は出来る。今まであなたといふ人間がよく判らなかつたのは、あたしの失敗だけど、失敗と氣が付いたら、早い内にとりかへした方がいい。陰山さんは独身ですよ。奥さんは戦争で亡くなつたんです。妻といふものは、良人の仕事に協力してこそ、はじめて生き甲斐があるんです。あなたに何があります。あたしはまだ三十にならない。今の内だわ。あなたの目をさましてあげるには、今すぐにも別れることだわ。節はつれていきます。いづれ家事審判所でお目にかかりませう。あたしが出たあとで、ゆつくりと、家事審判所詳解といふ本をよんでおいて下さいよ。あたしは、今日を待つてゐたのです。この機会を、今か今かと待つてゐたのです」

小峰は赭くなり、青くなりして、昌代の毒舌を理解しようとした。それに対抗する言葉は見付からない。何故こんなことになつたのか、不思議だつたが、彼女の言葉を全部みとめてしまふものがあつた。頭で毒舌を聞くのではなかつた。皮膚がききつける。彼は瘦せた手を、互に握りしめた。静脈の浮いてゐる掌だつた。半ば口を開け、昌代を眺めてゐる。胸の動悸が烈しかつた。扉にノックがあつた。

「はい」

と、昌代が答へた。女中の顔がのぞいた。

「奥さまのお母さまがおいでになりました」

「ああ、さう、恰度よかつたわ。あたしの部屋にご案内してね」

「何故、母親を呼んだのだ」

窮鼠だつた。

「あたしの母親です。呼ばうと呼ぶまいと、いまさらあなたの許可はうけませ
ん。あたしが勝手に呼んだのです。今日まで、十年近く、自分の生みの母親をよ
せつけないでゐたなんて……口惜しいわ。何故あなたの命令に従つてゐたのか。
自分の出世がそんな土台に立つてゐたのかと思ふと、恥しいわ。こんなもの、玉
の輿でも何でもない。あなたには、恥しいと感じる能力もないでせう」

昌代は立ち上つた。喋りながら椅子の背中にまはつた。それは簡単な、背中の
ある椅子である。背を叩きながら、

「生みの母親を十年間もよせつけないで、それでもなほ幸福でゐたいとは思ひま
せん。こんなものが、何が幸福なものか。さうさうあなたには騙されはしない」
「言葉がすぎる」

「一人前な口はきいてもらひますまい」

「それでも節の母親か。十年前には君もそれを認めたちやないか。今となつて責

任を僕になすりつけるのは、卑怯だ」

「卑怯？ 卑怯といふ言葉の意味を知つてますか」

「馬鹿をいへ」

「それぢや云つて上げませう。中野へいつて、あなたは何をして來ました。伊豆子さんの結婚がきまつた、そのことを何故あたしに報告しないのか。あたしは、杉子さんから聞いた。あたしはあなたから聞いてゐるといふ顔をしてましたよ。

あなたの口からは聞けず、杉子さんから教へられて……」

唇を噛んだ。その時に屈辱を思ひ出して、昌代はふるへながら椅子の背をつかんだ。椅子の脚が異様に鳴つた。重量のかかつた、殺氣立つた音である。小峰は、息をのんだ。からだが顫へた。

「あたしは、それほど無視されたのだ。十年間そんな扱ひをうけてきたのだわ。中野のおめでたい話を、あたしは聞かして戴く資格がなかつたのだわ。あたしは

いつたい何です。あたしは、道ばたの石ころか。金で買はれたばんばんか。肉体だけが必要だったのですか。若い女であれば用はすむのか。一度でこりず、二度までも煮湯をのまさうと、あなたはした。のめのめと、また結婚式に出て、あたしを氣狂ひにさせたかつたのです」

小峰が立ち上つた。この対立を一途に避けたかつた。これ以上みじめになるのは耐へがたい。激昂してゐる昌代の氣をそらすには、憎い存在を眼の前から消すより他にないと考へた。説明はあと廻しだ。青ざめ、彼はよろめいた。

「何故逃げるの」

肩をつかまれて、強くひきもどされた。小峰は机の端に腰がぶつかつた。一輪ざしが倒れた。反射的に前に出た。また、つかまれた。小峰も色をなして、肩をもぎ放した。なほもつかみかからうとする手を叩き伏せた。殺氣立つた。

「卑怯もの、口惜しい」

小峰の頭は、がんと鳴つた。一刻も早くこの場を避けたかつた。彼の目はうはづつてゐた。昌代を押しつけて、扉に近付いた。

「畜生」

尻上りに叫んだ。同時に、背後からとびかかられる氣配を感じた。彼は激越な痛みを背中に受けた。自分がよろめいたのと、をかした姿勢になつたと意識した時には、扉の裾に這ふやうに倒れてゐた。立ち上らうとした。また一つ背中を殴りつけられた。昌代が椅子を両手につかみ全身の力でふりあげた。小峰は頭をかかへて、膝頭で歩いて、逃げた。喚きと一しよに、椅子がふり下ろされた。椅子がみしつと鳴つた。彼のからだも鳴つた。背中といはず、膝といはず、椅子がふつて來た。全身の疼痛に耐へかねて、小峰は、「あつ、あつ」と口走り、膝まづき、滑り、這ひ、リノリユームの床を逃げ歩いた。

「何ですつて」

直角になつてゐる一方のソファにゐる昌代が言つた。

「四日間、僕はベッドでくらしした」と、小峰は静かな口調で應へた。

「それがどうしたの」

「考へあまるほどの時間があつた」

「大袈裟だわ」

「考へないわけにいかなくつた」

「氣が付いたでせう」

「君がのぞんでゐる以上のことを、考へめぐらしたにしても、僕のせるではない」

「あたしは間違つてないんだから」

「打撲傷のため、うんうん唸つてねてゐる間に、君は外出した」

「今までだつて、いちいちあなたに報告はしてなかつたわ」

「あの男の匂ひがする」

「あなたの方は……？　しよつ中中野の匂ひがしてゐるわ」

「それとこれとは、ちがふ」

「あなたの方が、もつと悪い。弁解の余地もないくらゐだわ」

「薬品ブローカーと、何度逢つた」

「陰山さんとはお友達よ」

「僕はベッドにゐて、あの男と逢つてゐる時の君の表情をいちいち言ひ当てることが出来た。さういふことは考へなかつたらう」

「何でもないわ」

「手を握らせたね」

「それや、ホールですもの」

「ちがふ」

「言ひがかりだわ」

「接吻を許したらう」

「さう思ひたいなら、さうしてもいいわ」

「白状したね」

「妄想でせう」

「いや、良人がベッドで呻吟してゐるのを承知で、自分に好意をよせてゐる異性と逢つてゐるといふこと自体が、接吻の程度ではない。それ以上だ」

「言葉のあやです」

「君の良人には、あの男の方がふさはしい。さういふ結論に到着した。やけくそ

ではない」強ひて平静を粧つた。

「さうね、あたしも好きだから」

「素性は、やつぱり争へないものだ」

「何ですつて……、たとへさうでも、そのことはあなたも十分承知の上だつたでせう。猛獸を飼つたつもりぢやなかつたの。猛獸よ。あなたは、下手な猛獸使ひだつたわ」

「それだけの自覚があるなら、結構だ。僕はこの家を出ていかう」

「何ですつて」

「妻に殴られた良人だ。僕はこの齡になるまで、ひとを殴つたこともなければ、殴られた経験もなかつた。しかも街のよたものの喧嘩のやうな、男同士の乱闘のやうな、椅子で殴りつけられたなど、生れてはじめての経験だ。何もかも一挙に、ご破算になつた氣がした」

「猛獸だといつてゐるでせう」

「あの椅子をふりあげた時の君の顔は、忘れられない。殺し合ふ人間にしても、あれだけの冷酷無慘な表情は出来ないだらう。あんな表情が、人間に許されてゐたといふことさへおそろしくなつた」

「意久地なし。それでも、男ですか」

「よしてくれ。僕はいつそ女であつた方がよいと思つた。男が殴られて、手向かひが出来なかつたのだからね」

「殴られて、やつと自尊心のあつたことに、氣が付いたのでせう。殴られなかつたら、生涯忘れてゐたでせう。あたしはまた、しよつ中自尊心をゆすぶられてゐたわ。あたしは、いい妻にならうとしたのよ。ところがあなたは、わがままで、自惚れ屋で、財産があるものだから、どんなことでも自分の思ふやうになると思ひこんでゐたんだわ。あんな商賣から拾ひ上げてやつた、お前はしよつ中俺に感

謝してなくちやいけない。幸福にしてやつたのだ、と言つてたわね。いいえ、口に出さなくたつて、あなたの振舞ひがさうだつた。ちつとも幸福なんかにして貰はなかつたわ。いつだつて陰の人間だつたわ。それに、がまんが出来なくなつただけの話よ。あなたのやうな人とは、一しよになつていけないわね」

「お母さんと呼んだね。僕がねてゐる間にも、毎日のやうに來てみたね」

「自由に振舞ふやうになつた証據よ。つまりあなたに隷屬しないでもいいと腹がきまつたからです」

「その度胸を、どこから拾つて來た。誰にもらつたのか。あの男だね」

「あの人に、関係はありません」

「女は、みんなそんな台詞をいふ。首ねつこを押へられ、証據をつきつけられても、さういふのだ。自分に氣が付いてゐないといふことがある。遠因といふことを、知らない」

「さうかも知れないわ。でも、まだ可愛いでせう。あなたなんかは、十年前から遠因をぶらさげてゐたわ。あなたに出来たことといへば、それだけよ。結局中野が、あなたにふさはしいところだわ」

「何故、必要以上にあの男と親しくするのか。わざわざ僕を苛立たせるためだつた」

「あなたがしてゐることを知つたら、あたしもするわよ」

「何故あの男に、ふか入りさせたのか」

「腹が立つてたからだわ。十年間も二人で努力しておきながら、それをこはしたのはあなたぢやありませんか。十年間であなたはあたしの側の人になり切つたと思つたのは、とんでもない間違ひで、いつだつてあなたは、中野の人間になれるのだわ。あたしは、妾ですよ」

「それを言ひたてに、お母さんが来たのだね」

「さうも言つたわ。いつまでも妾でもあるまいつてね」

「あの男にも、それを言つたのだらう」

「言つたわ。あたしを愛してゐるから」

「花柳界のことでは、あの男よりも君の方がくはしいのだ。あの世界の空気を軽蔑してゐない君だつた。どの家へ行つた」

「瓜田で鞆くわを直したかも知れないわ。李下で冠を正したかも知れないわ。ふふふ」
「しかし、かうした調子で話の出来ることは、大變よいことだ」

「暴力に訴へさせるやうな口は、慎しんで頂戴」

「もう沢山だ」と、小峰は苦笑した。ひさしぶりに見せた笑ひであつた。が、すぐに收めると「笑ひごとではない。僕が苦笑したからつて、それで喧嘩が水に流されたと思つたら、まちがひだ。僕も注意しよう。しかし、君も激さないでほしい。僕は殴られたからつて、君を憎んでゐるのではない」

「判つたわ。嫌ひになつたのね。こんな女に飽きちやつたのね。嫌ひになつたのね。」

「言訳はしない」

「十年間、いつ倦きられるか、いつ嫌はれるか、といふ恐怖を背中にくつつけて、あなたと一しよにくらしてたわけね。あひつ子ね。あたしも、あなたつて人が、嫌になつたわ」

「よからう」

「万事おしまひになるんだわ」

「僕は、四日間ねてゐる間に、さうなるより他に方法がないといふ結論に辿りついた。そして、終りになつたのだ」

「さう思ふ？ 本氣で？」

「君は大道具小道具をそろへて、僕の心を追ひ落しにかけた。あの男、お母さん

……もうたくさんだ。君は十年昔とちつとも変つてなかつたのだ。爆弾を抱いた女だつたんだ」

「何だか、舞台上で聞くみたいね」

「人間の一生の間には、舞台じみた台詞もとび出すだらう。とにかく僕は、もう君にあきらめをつけた。嫉妬もつらい。僕は優秀な猛獣使ひではなかつた。己を知らう」

「そんなでもないわ」

「これだけ言つたので、ほつとした」

「どうしようといふの」

「僕のことか。幸ひ僕には行先がある」

「いやよ」

「僕の血路だ」

「あたしは、どうなるの」

「君は結婚するだらう。大神宮の前で、正々堂々と結婚式をあげるだらう。それがのぞみだつたのだから」

「結婚しないわ」

「するよ、猛獸とは、さういふものだ」

「神経衰弱！」

「いや、君の神経の太さは、僕が誰よりも一番よく理解してゐる。殴られた僕が呻吟してゐることを、君は忘れることが出来たのだ。椅子で、頭といはず、手といはず、めつた打ちに殴打され、僕は二三日、からだを動かす度に呻いた。年齢のせるか、打撲に抵抗する力が弱くなつてゐる。さうだ、君は自身で三日目から、食事をはこんでくれた。哀れみではなかつたらう。強者の顔だつた。さぞ、氣味よかつたらうね。あれだけの神経があるのだ、どうして結婚しないでゐられるも

のか。君はあの薬品ブローカーと、結婚する。年も若く、働き手であり、感じのよい青年紳士だ」

昌代が窓を向いてゐた。眼の先に、女竹が植ゑこみになつてゐた。女竹を眺めてゐなかつた。女竹がちりちりと震へたり、ぼうつと大きくなつたり、霞んだりした。大きく目を開けてゐた。やがてその眸にあらはれた変化が消えた。小峰も黙つた。彼の胸には、空虚が出来てゐた。自分の口から出た言葉が、それも弱々しいので不満であつた。ベッドで、声にならない声をはりあげてゐた時には、どの言葉より烈しく、血まみれになつてゐた。

「あの人に、あたし、現在の悲しい境遇を話したわ」遠いところの思ひ出のやうに彼女は言つた。

「それが一番有力な会話だつたらう。さうなるものだ。想像したとほりだ。勇氣が出たらう？」

「話しながら、あたし、泣いたわ。勇氣どころですか」

「あの男のことを言つてるんだ」

「何故」

「自分の愛する人の不幸に対しては、男はとても勇氣を感じるものだ。これも猛獸の條件か。君は僕と結婚してゐることを、いつだつて、都合よく忘却出來たのだ」

「嘘だわ。だけど、これが結婚？ 一夜妻の延長でせう。結婚は、もつと本格的でせう。あなたは、あたしのお母さんに入入を差しとめた。それを條件にした。お母さんを悲しませたわ。あたし、あなたのために感傷的になつてたのよ。あなたのためなら、たとへ肉親だつて、失望させてよいと思つたわ。無理だつたのね。その無理が今になつて、破裂したのよ。あたしが馬鹿だつたから」

「お母さんは、僕と別れよとすすめに來たのだね」

「この家にお母さんと呼ぶことは、あなたの意志に叛くことだから、さうなるのが当然でせう。十年の自分の心まで失望させてしまつたんだから、仕方ないわ。あたしの夢は破れたわ。のぞみは棄てられた。何もかもあなたのために棄ててゐたのに、また一つ一つ拾ひ直しただわ。その恰好つたら、ないわ。惨めね。十年前の恋愛が、そんなにすばらしかつたのか知ら。誰も持つてゐないやうな愛を、二人がもつたと信じこんだんだけど、嘘つばちだつたのね。嘘の一つだつたのよ。あたしがあなたの全生命だなんて思ひこんでゐたなんて、日曜娯樂版だつて取りあげないでせう。あなたの愛といふのは、いつたい何だつたのか知ら。玉手箱の煙みたいなものだつたのね。をかしくつて……やつぱり裏打がなければ、女は安心しないものよ。あなたの愛に倦きたのよ。もうたくさんだわ。あなたには学問があり、教養もあるから、どこに出したつて立派な知識人だし、文化人といはれるでせうけど、そんな知識人、文化人の愛にはがまんが出来なくなつたわ。小手

先きだけで間に合ふやうな愛には、倦きたわ」

「いつものやうに昂奮しないで、君が腹の中のをみんな言ひ切つてしまふことはいいい。いろいろと君も言ふことを知つたやうだが、その言葉はみんな覚えてゐるよ。忘れないでゐてあげるよ」

「さうお願ひするわ。まちがひのないことだから」

「猛獸と形容したのは、まちがつてゐたかも知れないね。卒直といひ直した方がいい。僕の方がはるかに個人主義で、いけない利己主義者だつた」

「それに氣がつけば、大変な覚醒だわ」

「それが、しかし、直せなくてね。君は他のことはまあ我慢してくれても、これだけは辛抱が出来ないといふのだから、仕方がないよ。ところで、生活とは何だらう。君の考へてゐる生活と、僕の考へる生活とは、大分違つてゐるやうだ。夫婦は、水をぶつかけ合ふものではないと思ふ。水をぶつかけ出したら、きりがな

い。水をぶつかけることは、一番簡単なやり方だからね。妾だ妾だと、二タ言目には君はいふが、十年間、妾だから損をした部分は、得をした分にくらべると、極く僅かなものではなかつたらうか。互によく相手を見なければならなかつたのだ。互に元氣をつけたり、世話をし合つたり、君はおいしい料理をつくつてくれる。いつも朗かで、嬉しさうにしてみせてくれる。僕が怒る時、困つた時、悲しむやうな時は、それを打ち消してくれるべきだつた。愛情とは、互にそだてあげる性質のものだと思つてゐたがね。しかし、君は、あの男と、もう一度それをやつてみようといふのだね。僕で失敗したのだから、今度は成功するかも知れないよ」

「あの人は、若いわ。若いといふことが、あたしとさう年がちがつてないといふことが、何よりも大切なことだと思ふの。親切で、実があると思ふわ。あなたのもつてゐないものを持つてゐるわ。学問はあなたほどでないでせうけど」

「お母さんは、知ってるね」

「知ってるわ。だつて、あたしが話したんですもの。お母さん、この家が押しつけた條件でなければ、万事よろこんで賛成してくれます」

「僕の友達でね、三四年も関係のあつた男女がゐる。その晩も銀座からリンドンにのつて、一時間もゆられて、仲よく別れたといふ。翌日、女から結婚しますから別れて下さいと速達が來たといふのだ。それが、女なんだね。十年間なんか、何でもないのだ」

「あやまちを改めるに、はばかるなかれつていふわ」

「孔子だつて、まさかこの場合に使はれるとは思はなかつたらう」

「あなたはさつそく中野にもどつて、十年間手をつけなかつた、蜘蛛の巣をはつた古女房とよりを戻すのね。ふさはしいわ」

「そんないやらしい言葉は、教へなかつた筈だ。それでは」

「十年前の教養よ。地金が出たんでせう。地金でくらす方が、どんなに氣が樂か
知れないわ」

「節をどうする？」

「あたしが引きうけます。ああ、癩だ」

「何が癩だ。それは僕の台詞だらう」

「中野ぢや、かうなることを、十年間待つてゐたでせう」

「或は、ね」

「何をいつたいあなたから奪つたか知ら。十年かかつて何も奪つてなかつたわ。

あたしが奪はれた。十年間もかけて……」

「奪はれたものがあつたにしても、なに、大したものぢやない」

「こんな調子で話が出来たからつて、それであなたのしてたことが許されると思

はないで頂戴」

「勿論だ」

「何が勿論よ」

「貞操の損害賠償だね。次に来るものは」

「それもあるけど、それだけではないわ。いつものあなたらしくないわね」

「女の人に殴られて、足腰たたなくなつたなんて、初めての経験だから。ひとにも言へない。多少は僕らしくない言葉も出るさ」

悲しげに憤りつづける昌代の顔は、生き生きとして美しかつた。唇が新鮮だつた。何故この時に、甘つたるいうけ唇の形が目につくのだらうかと、小峰は不思議に思つた。

「それで、あなたは、前非を悔いて、もう一度努力しようといふ氣はないんですのね」

「殴られたことが、決定的だ。いや、君を責めてゐるのではない。非は十分僕に

ある。が、殴られたことが、二人の生活を考へ直すきっかけになつた。動機は、君の罪にない」

「それならいいわ」

彼女は卓子にある煙草を、一本抜いた。小峰は、煙草を忘れてゐたことに気が付いた。自分もと、からだを泳がせると、白い線がとんで來た。煙草は小峰の顔に當つた。小峰ははつとなつた。

「そんなことする必要はない」

立ち上つた。

「立つ必要ないわ」

「激さない約束だつたが、女性にそんな約束を強ひることは無理だと気が付いたから」

「そんなにびくびくすることないわ。ここには、あたしがふりあげられるやうな

手輕な椅子もないから」

小峰は、再び腰をかけた。どちらも口を利かなくなつた。庭の影が、ちつとしてゐる。家の中も靜かだつた。小峰は節のことを思つた。昌代も思ひ出してゐるだらうと眺めると、そんな顔をしてゐた。自分の決意が意外に強固なのを、小峰は意識した。しばらくして昌代を見ずに言つた。

「かうならうとは思はなかつた。しかし、もうかへらない。僕が若ければ、もう一度くりかへすことも可能だが、椅子でぶん殴られるのは、一度で沢山だ。それに耐へる体力がない。さうぢやないか」

「さうね、一度やつたことは、二度くりかへさないとも限らないわ。椅子をふりあげて、男のひとを殴りつけるなんて、あたしも初めてだつたけど、二度とくりかへさないとは保証出來ないわ」

「僕以外の男性に対しても、それは、よした方がよい」

「ありがたう」

「いつ殴られるか、さういふ危険はしよつ中あつたのだね。まるで知らなかつた」
「十年間、ちよいちよいとさういふ機会はあつたわ」

「偶然に、そばに軽い椅子がなかつたのだ」

「殴つたのは、ごめんなさい」

「四日目に、かうして起き上がることが出来たのだから、もうすんだことだ。右手をあげると、まだ少し痛い。痣は、さう簡単にとれないだらうね。さようならをいふ代りだ」

「そんなつもりではないわ」

「無償の行爲か。それぢや、いつそう耐らない。僕は行かなければならない」

「お母さん、別れるなら、この家を貰ひなさいと云つたわ」

「お母さんらしいね。二人の覚悟より一ト足先を言ふ。老人には、万事が判るの

だね」

「この家を賣つて、そのお金で、水商賣をはじめるといいと言つてたわ」

「君は、あの人と結婚するのではないか」

「あなたに何も約束しないわ」

「さうだつた、をかしいね、僕つて……、旅行鞆をもつていくよ」

「中野ぢやないの」

「出戻りか」

「ふふふ」

「当分打撲傷を、どこかの温泉で治して來たい」

小峰は立ち上つた。

「今から？」

「車を拾はせてくれないか。温泉にひたり、二三日ぼんやりとしてゐたい。かう

話がすらすらと済んだのだから、この氣分をこはさずに行きたい。僕は、疲れてゐる」

「あなたの氣のすむやうにしたらいいわ」

「僕はいまでも、椅子で殴られるほどのことだったかと不思議に思つてゐるよ。しかし、起きてしまったことだ。僕の身のまはりのものは、一トまとめにして置いてほしい。いづれ、丹にでもとりによこす。章でもいいが。判るやうにしておくこと」

「殴らなかつたら、こんなことにならなかつたのね」

「さうだ、そしてもう一度十年間を送つたかも知れないね。いづれは殴られただらうが。君は二十八だ、いや、九になつたか。五十までには二十年もある。椅子をふりあげる力は、二十年は大丈夫つづくのだ」

「もう終つたのね、二人の仲が」

「あとには、事務的な交渉があるだけだ」

小峰は、黄色の絨氈を歩いた。眺めながら彼女は言った。

「古い奥さんのところに戻つていくの、お氣の毒みたいね」

「君のやうな人には、再びめぐり会へないだらう」

「急に十も老けてしまつてよ。水が切れた木のやうになるわ。可哀相よ」

「僕は疲れてゐる」

「殴られたことを、そんなに重大に考へることないわ。あれが偶然だったのよ。

あなたが、可哀相だわ」

「どこまで残酷だらう」

「殴つたこと、後悔してゐるわ。自分のしたことがあんまりおそろしかつたので、わめきながらとび出したんだわ。陰山さんと街で会つたのも、さうだった。話をしてゐても、あなたのことが忘れられなかつたわ。頭にこびりついてゐて、苦し

かつたわ。辛かつたわ。喚きたかつた。喚くより仕方のない可哀さうな氣持だつたわ。あたし、無茶だつたわね。節に顔向けが出来ないわ」

小峰は歩くのをやめて、昌代の眸を眺めた。

「とにかくもう終つたのだ。君は、実はごまかしたといつたではないか。自分をごまかしては、いけないよ。そんなことをいふのは、椅子で殴られるのよりなほ悪い。せつかく互に目が開いたと思つたのに……」

「いつたい今までは何を喋つたのか知ら」

「いつもに似合はず冷靜に互の胸中を披瀝し合つたのだ。いいことだつた。君は將來のことまで喋つた」

「覚えてないわ。口から出まかせよ。あなたがさうしむけるんだもの」

「しかし、今度はお母さんが登場してゐる。あの男がゐる。今度といふ今度は君一人が役者ではない。ひとり舞台では、すまされなくなつてゐる」

「そんなこと、どうだつていいわ。お姉さんに話す必要があるわ。お姉さんの意見は、絶対だから。これで終つたんぢやないわ。あなた、旅行に出るの。どこへいくの。あたしがあとからいつては、いけない？でも、もう終つちやつたのね」
「君は求婚されてゐる」

「さう、結婚を申しこまれてるわ」

「結婚してもいいよ」

「よして。あなたの世話にならない」

「以後、小峰烈と何の関係もないと一札入れる必要があらう」

「腹いせね」

「冷静だ。こんな自分が意外なくらゐだ」

「強がりよ」

「いつだつて現実に眞向になつてるつもりだつたが、さうぢやなかつたのだね。」

今度といふ今度は、眞向きとはかう向き合ふことだと、しみじみと判つた。君を客観的に眺めることだつて出来るやうになつた」

「からだの痣、やがて消えるわね」

「消えないかも知れない」

「そしたら、忘れてしまふわ」

「僕は、出かけなければならぬ」

「節が学校からかへつてからにして頂戴」

「もつと大切なことだ」

「節に、何の罪があるの」

「子供をもち出すのは、いけないよ」

「いつちやいけないわ」

「行かなければならない」

「こんな別れつて、あるかしら。本氣になれないわ、いつそ喧嘩した方がよかつた。十年間で今が一番いけないわ。そのあなたの冷静なやり方は、罪惡だわ。残酷だわ」

いかにも見納めだといふ風に、小峰は昌代の顔を眺めやつた。いままであのやうに愛してきた顔である。長い睫毛の黒い眸、うけ唇、おくれ毛の一本も落ちてゐない清潔な顔である。若々しい弾力のある皮膚である。泣いても、齧めても醜くならない顔だつた。ソファに深くかけた伸々とした肢体を見下ろした。家庭をすててまで、幸福にしてやつたと思つてゐたのだが、それほどではなかつたのだ。小峰は、部屋を出た。

旅行鞆に必要なものをつめてゐると、扉が開いた。

「行くの」

小峰は頷いた。手は休めなかつた。

「さようなら」

と、昌代が言つた。扉がしまり、やがて寢室の扉の開く音がした。続いて、ベッドのスプリングが烈しく軋む音がとんで來た。

小峰烈は、女中に送られて家を出た。途中で車を拾ふつもりであつたが、たうとう省線の駅まで歩いた。

15

外傷にきくといふので、小峰は湯河原温泉に來た。藤木川の溪流をわたつた、大きな旅館の二階に落着いて、三日が終つた。

朝は九時起床、湯殿に降りていく。階段の上り下りが應へた。ゆつくりと歩く。五つ六つ浴室があるが、客のみない湯殿を選ぶ。岩石をつみ重ねた間から温

泉の流れ出る湯殿が、氣に入つた。泉質は弱アルカリ性反應を呈する塩類泉である。からだは青く染まつて見えた。湯船に頭をもたせて、何ごとも考へずに、こぼれる湯の音を聞いてゐた。のぼせて來ると、流し場に出て、細いからだをふりかへつてみる。薄い筋肉である。女性の肉体の衰へは、一番初めに臀部に現れるといはれてゐる。尻の肉が薄くなるのだ。男もさうであらうと、己のものを撫でてみる。今後は、夫婦のいとなみはたくさんだと思ふ。昌代の記憶がつよく残つてゐる。七十何歳の國学者が三十代の妻をめとり、二兒をまうけたといふ誰かの噂話を思ひ出したが、ひとごとであつた。かう考へる底には、中野に戻り、老妻と再び夫婦の形式にはいつたところで、精神的な面でつながれば済むといふ計算がある。

一日、ほとんど縁側の椅子にかけてゐた。

「お退屈でせう」

「いや」

「お散歩なさいませ」

女中が見かねて、さういふ。

近くに逼つてゐる山を眺めてゐるだけでも、なかなか興味があつた。山は絶えず変貌した。遠く相模湾のあたりが晴れてゐても、山には雨が降つた。白い雲が山肌を撫でて走つた。雲の動きは、早かつた。山容がその度に少しづつ變つて見えるのも、面白い。雨が幕のやうになつて、横に流れた。山肌はまだらな縞をつくつた。或る時は、俄雨になつた。しかし向かひの山には陽が落ちてゐた。そこがうす褐色に、まるで黄塵をかむつたやうに見えた。青い空がのぞいてゐる。白雲が急いで流れる。太陽がのぞく。樹木が光つた。木の葉が寶石のやうだ。屋根も玻璃のやうに光つて、眩しい。かたときの變化であり、予想をゆるさない變化がつづいた。

藤木川の溪流の音にも慣れた。

——自由主義者とは、何ものか。

といふことを、彼は考へてゐた。資本主義社会の胎内から生れたものにはちがひないのだが、自分もその階級の一人と考へて、

——熱狂的なイデオロギーと、猪突的な勢力とが狂乱する社会では、唯一の、冷静に、客観的に判断し、行動の出来る存在である。

ハロルド・ラスキの説を、全面的に支持したのである。

——そのためには、自由主義者はこれまでの消極的態度であつてはいけない。

——自由主義者の特色は、その知性であり、冷静な合理的思考にある。自分の一方的な利益や要求を抑制出来なければならぬのだ。

——自由主義者の知性は、左右両極の主張と要求の合理的であるものを理解して、それにもとづいて社会のうちに合理的進歩的傾向を助長したり、イデオロギ

―や実力の激突を防止しうる事が出来るのだ。

―それにしても、自由主義者は、社会の一つの安定勢力にまでならなければならぬのだ。

しかし、それにはどうしたらよいか、といふ段になると、小峰烈は無力であつた。どうしてよいか判らない。彼がこのやうな思考にとらへられるといふのも、吉祥寺の今泉画伯のことが絶えず念頭にあるからだつた。彼はこの時代に、父の遺産を後生大事にまもり、それで食べてゐる生活が決してよいものだとは思つてゐないからである。何とかしなければならぬのだ。何かしなければならぬと思ひ焦つてゐた。

―だが、お前は、一人の女の始末すら出来ないではないか。

自意識過剰は、十年來のものであつた。彼は毎朝、昌代を思ひ出してゐた。やるせなかつた。虐められる。みごとな鳩胸を思ひ出す。固い乳房は、子供を生ん

だこともないやうだつた。十年間愛撫してきたところを、彼は微細にわたつて覚えてゐた。耐へがたい追憶であつた。彼は思ひ出を拂ひのける勢ひで、床をはなれる。湯にひたる。

——しかし自分は、観念的に悩まされてゐるにすぎないのだ。

この裸をみよと、大鏡に裸形を映す。

そして、椅子によると、自由主義者なるものについて、あれこれと考へをめぐらすのである。話相手がほしかつた。今泉画伯を電報で呼びたかつたが、十分な金は持つてゐない。

一週間経つて、彼は中野に來た。

「金杉橋へいつて、トランクをもらつて來ておくれ」と、丹に言つた。

丹は、トランクを持つて來た。当座必要とするものが、整然とはいつてゐた。

昌代の氣持が知れなかつた。

十年昔のやうに、小峰の生活が大した不自然もなくはじまつた。彼は毎日外出した。

「おかへりなさい」

呼鈴が鳴ると、たき子が十年間さうして迎へてゐたやうに玄関に出迎へた。小峰はこの行動について何も話さなかつた。たき子も訊ねない。それでゐて、形の上では、夫婦らしい会話が自然ととり交された。

丹と伊豆子が、伊豆子の居間で会話をした。

「をかしいわね」

「何とも言はなかつたよ。前々からトランクをとりにくることを判つてゐたやうに、はいつて、すぐに渡してくれたのだから」

「喧嘩したのか知ら」

「お父さん、元氣がないね」

「さういへば、何だか虚脱状態ね」

「蕩兒かへるつて凶だ」

「かへりそこねた蕩兒、漸くかへる凶よ」

「しかし、よく彼女が黙つてゐるね」

「節ちゃん、可哀相ね」

「若し、喧嘩別れをしたんなら、節は僕らと同じ道を歩くのだ」

「あの時、丹が十、あたしが十一だつたわね。泣いちやつたわ」

「だけど、すぐお父さんに逢へたね」

「いけないわね、お父さん、いく先々で、子供に悲しい思ひをさせるのよ」

「兄さんたち、何といつてる」

「触れない方がいいんだつて」

「杉子姉さんも？」

「大人の世界は、判らないわ」

「僕らだつて、もう立派に大人ぢやないか」

「お母さん、とても立派ね」

「うん、一ト言もいはないから？」

「大した腹藝よ」

「感受性がにぶつてゐるんだ」

「ひどいわ」

「お父さんの方が、苦しいだらうさ」

「どうするつもりか知ら」

「お父さんのやり方は、不潔な氣がする」

「ああ、感覺ね」

「子供によい教訓ではない」

「かう批判が出来るんだもの、いまさら親の教訓なんてほしくないわ」

「だけど、責任はある」

「無責任ね」

「いくらお父さんだつて、責任はとらねばならない」

「子供たちがどんな目で眺めてゐるか、気が付かないのでせうね」

そんな話を交した次の日、丹が学校からかへつて來ると、家の近くを昌代が歩いてゐるのを見かけた。丹はいそいで路地を曲つた。そして、昌代に見られないやうにしてわが家にはいつた。

伊豆子の部屋に出向くと、姉はアルバムを整理してゐた。

「うろついてるよ」

「何が」

「例の女性」

「例のつて……ああ、金杉橋？」

「逢ふことが工合悪かつたから、僕、かくれてかへつた」

「電話をかければいいのにね」

「よくよくの理由があるみたいだ」

「お父さんに逢ひに來たのね」

「さうだ」

「お父さんは、知らないのね」

「その内には、氣が付くだらう」

「本当に別れる覚悟かしら。それならあたし達にも意見があるわ」

「あの調子で、うちのまはりをうろつかれては、たまらない」

「お父さんに、話ませうか」

「ことがことだから、僕、いやだな」

「杉子さん、木曜日にいなくなつたわ」

「ダンス？」

「兄さんがとめてるの。お父さん、そのことに気が付いてないわ。お母さんは知つてるんだけど、何も言はないとみえるわね」

「何故お父さん呼び出しにくるのか知ら。それなら、喧嘩しなければいいのに」
「喧嘩かどうか判らないでせう。喧嘩にきめてかかるの、滑稽だわ」

「だけど、いやだね、親の情事を、情事にちがひないのだから、それを子供が話題にするのは耐らない」

「丹、よく不良にならなかつたわね」

「条件はそろつてゐるが、しかし、不良になるのは、その人の性格によるよ。お姉さんだつて、同じことだ」

「お母さんが立派つてことになるわ」

ところが、或る日、章が会社からかへつてくると、うちの近くで昌代を見かけたが、彼女の方で逃げるやうにかくれた。

「何故僕を避けるのかしら」

と章が言ふ。杉子にも、判らなかつた。

「一しよにダンスしたこともあるのに、まるでこはい人間に見つかつたみたい、あの人はいそいで逃げていつた。お父さんは、氣が付いてゐるのか知ら。一度訊いてみよう」

「お母さまのいらつしやらない時にね」

「勿論だ。丹と一しよに訊いてみよう」

しかし、それが実現されない内に、見知らぬ青年が小峰に逢ひに來た。

「手紙をことづかつてきてますが、小峰烈さんでないと渡さないと仰言るので
す」

と女中がとりついだ。

玄関に出てみると、学生学生した青年だった。

「あなたが小峰烈さんですか」

「さうです、正真正銘の小峰烈です」

「この手紙を頼まりました」

封書の宛名を一ト目見て、昌代と知れた。

「手紙の主と知合ですか」

「いいえ、そこで頼まりました」

「ありがたう」

見知らぬ青年は帰つていった。手紙をよんだ彼は、下駄をつつかけた。一丁ほどいくと、神社の境内があつた。遠くから昌代が、にこにことして迎へた。

「あんなこととしては困る」

「逢ひたかつたの」

「近い内に弁護士にいつてもらふつもりだった」

「逢ひたかつたわ」

「うちのまはりを、うろろうされては困る。子供に見付かるではないか」

「章さんに見付かつたわ」

「章は何事もいはない。さうか。みんな知つてたのだね。君はもうそんなにうろついてゐたのか」

「夜も眠れないわ」

「さようならといつたではないか」

「節が逢ひたがつてるわ」

「子供を出してはいけない」

「本当ですもの」

「僕の氣持は、あれ以來落着いてゐる」

「あたしは、あべこべね。日がたつにしたがつて、慘めだわ」

「とにかく、うろつかないでほしい」

「ぢや逢つて下さる？」

苛々として、美しい顔だつた。顔の背景に小さい社殿があつた。子供もあそんでゐない。小峰は軽く息をとめた。

16

湯河原の駅頭で、昌代は馴染のある旅館名を襟に書いた番頭を見出して近付いた。

「どちらさまで……」

「申込んではないのですが、以前お世話になつた小峰」

「はあ、小峰さまで……毎度ありがたうございます。おひとりさまで？」

商賣柄そらさぬ挨拶だが、この番頭に記憶されてゐる筈はないと、をかしかつた。

「泊らないのですが、お晝をお願ひしようと思つて」

「はい、さつそくそのやうに宿に電話いたします。お静かなお部屋を用意させておきます」。

昌代は自動車にのつた。番頭の挨拶の仕方で、その宿に小峰が投宿してゐないことが判つた。一つの落胆を抱いて車にゆられていく目には、春の山野が、あかるすぎる色彩感で流れた。藤木川のところどころに、この前の暴風雨の被害を残してゐた。嵐の直後は、人々も自然の暴威におそれを新にしたであらうが、一年近くも経つと、おそれは忘れられてゐる。被害の箇所をながめても、ぢかに恐怖と

つながらない。時たま通りかかった昌代が新聞記事を思ひ出して、自然のおそろしさを思ふのだつたが、彼女の感慨も通りすぎると、この藤木川の溪流を聞きながら、どこかの宿に小峰があると想像して、切なくなるのである。或は、ゐないかも知れなかつた。

宿の風呂にはいつた。透明な湯の中で、白い、のびのびとしたからだをのぼして、心配ごとの少しもない顔をしてゐる自分が信じられなかつた。小峰をさがし出し、その顔を見るまでは落着けない筈の自分が、かうして湯の中に静かにならだを沈めてゐる。内心の焦燥が、顔付が、行爲が、皮膚の上にも多少あらはれてゐて差支ないのである。鏡の前に立つた。みごとな肢体である。腕をあげてみる。上体をねぢつてみた。小峰の好きな襟足を、軽く叩いてみた。氣になるやうな負目は、どこにも発見出来なかつた。小峰は足の指を氣にした。彼女は丹念に、足指を拭つた。宿の浴衣が、美しい実体をわざわざ凡俗に蔽つてしまつた。

「湯河原の宿の、目ぼしいところの番号を教へて頂戴」

電話帳を持つてきた女中をとらへて、昌代は、大きな旅館、小さくとも一流旅館をしらべあげた。

「室内電話では、いちいち宿の交換手をわづらはせてお氣の毒だから、電話室があつたら、案内して頂戴」

そして彼女は、階下の電話室にはいつた。相手が出ると、

「あなたのところに、小峰烈は泊つてゐないでせうか」

「さういふお方は、お泊りになつて居りません」

次の宿を呼び出した。

「お泊りでございません」

三番目、四番目も、泊つてゐないといふ返事であつた。昌代は電話をかけることの無意味な努力に、追ひ落される。きりがないと思はれた。湯河原、奥湯河原

の宿屋といふ宿をことごとく呼び出すことは、大変な努力である。いつそ警察へいけば、昨夜からの投宿者が一ト目で判るだらうが、警察沙汰には出来なかつた。漫然と、伊豆へいつたと聞いてきただけである。湯河原とはきまつてゐないのだ。東京を発つ時には、伊豆中の温泉地をしらみつぶしに歩いて、なほ小峰をさがし出さずにはおかない覚悟であつた。が、その努力の第一歩で、空しい努力が思はれて、それに耐へる力が自分にありさうには思へなかつた。

「さういふ方は、当方には滞在ではありません」

これがこの湯河原の最後だと己に言ひきかせて電話をかけてみたが、その宿でも、失望の返事であつた。小峰は贅沢になれてゐて、趣味も第一級を心がけてゐる故、二流以下の宿にとまる筈はなかつた。この点だけは、思ひちがひしてゐないのだ。

バスで熱海に行くことにした。駅前でのりかへた。門川を過ぎ、バスが山にさ

しかかると、左手に海が濃紺色に展けた。手の染まりさうな濃い紺色であつた。初島が置き忘られたやうに濃紺に浮いてゐた。胸襷が少しづつひろがつていくやうな氣がする。その感じを言葉に托したい誘惑を覺えたが、喋る相手がない。昌代は自分の席を見出しかねて、うろうろしてゐるやうである。この焦燥にかられた旅は、東京にかへるまで、自分の座席が見付からず、うろうろと過すのではないかと心細いのだ。

熱海駅をすぎ、海岸通りに來た。そこからゆつくりと銀座通りを彼女は歩いた。いそがねばならない氣がする。いそいそでも仕方がない氣がする。どちらにもきめるわけにはいかない、埒外に置かれたやうで、昌代は苛々とした。苛々しながら、しかし早い内に小峰に会はねばならないと思ひこんでゐた。中野から伊豆温泉に逃避した小峰は、いはば迷ひの最中にゐるのだ。自分が打擲したことが、彼を逃避させた直接の原因であらうとは考へられなかつた。あれは單にきつかけ

であり、中途半端な小峰烈の生き方に解決の一步を踏み出させる手段にすぎなかつたと思つてゐる。彼を中野に追ひやつたと考へることは、耐らないのだ。さうは思ひたくない。断じて中野に追ひかへしてはならない。節のためにも、是非ともつれ戻さねばならない。自分も彼が欲しいのだ。夫婦喧嘩のたびに、生活を根底からくつがへすやうな騒ぎを招くことは、利口ではない。と、あくまで椅子をふりあげた側から彼女は考へてゐた。彼女の足は、郵便局から右に曲つた。來宮の坂道をゆつくりと歩いた。

「おかみさま、小峰さまの奥さまがいらつしやいました」

女中がおかみを呼んでゐる時、昌代は度々來てゐる稻毛屋旅館の高い式台に向かつて、微笑をうかべてゐた。ここでも、失望した。小峰が來てゐないのは、女中の應接の仕方に感じられた。

二階に案内された。失望と、これからこの湯の町でさがしまはらねばならない

悲しさを思つて、彼女は縁側の椅子にかけた。右手に山が廻つてゐた。山のいただきまで畠になつてゐて、午後の光線で、畠のうねが一段づつくつきりと線を引いてゐた。屋根屋根が、光つて見えた。海は、隣家の竹藪と檜を越えて見えた。女中がお茶をはこんで来たが、手もつけない。庭には、白い沈丁花と、ダリヤのやうに深紅の八重椿が一輪咲いてゐた。

おかみが挨拶に来た時、昌代は椅子をはなれた。痩せ型の美しいおかみは、小峰のことを訊いた。節のことを言つた。喉にせきあげてくる思ひを押へてゐるのは、つらかつた。悲しさが、顔色にあらはれるのは、自分にもよく判つた。何となく、いつもと様子のかはつてゐる昌代がおかみの眼に不審に映るのは、仕方がなかつた。いつそ打ち明けた方がよいと、昌代は心をきめた。

「実は、その小峰をさがしにまゐりましたの。伊豆へいくと言つて出たきりで、どこへいくとも言つていかなかつたものですから、雲をつかむやうに心細いんで

すの。お晝は湯河原で、目ぼしい宿はみんなしらべたのですが、どこにも來てゐませんの」

「どんなご事情か存知ませんが、それぢやさぞお困りでいらつしやいませう。熱海に來ていらつしやるのなら、いづれ判りませう。小峰さまのおいでになる旅館なら、さうたくさんある筈もございませんから。さつそく、心あたりをしらべてみませう」

電話をかけるたびに失望をくりかへすことは、自信を削るやうにやる瀬ないの
で、それからのがれるために再び昌代は湯殿に下りた。ここの湯殿は、長い廊下の端にあつた。廊下の両側の窓には、一つ一つ堅固な錠が下りてゐた。湯殿は二つ、客はゐなかつた。彼女はひろい方の、疊大の、半円形の湯船を選んだ。清潔な湯殿であつた。窓をあけると、竹が植わつてゐた。天井までタイル張りである。いはゆる客目当ての湯殿でなく、自家用の感じのするのが好ましい。ここは以前、

個人の別荘であつたと聞く。六室か七室の宿であり、小峰烈は大旅館の、劃一的な扱ひをうけることを嫌つてゐた。この宿の庭も、素人素人してゐる。それがよかつた。終戦後は、この種の、別荘を改築した宿が熱海に多いと言はれてゐる。「おいでになりさうではありませんね。二十軒近くも電話で訊き合はせてみたのですが、どちらにもお泊りではございません。熱海ではないのかも知れませんね」と、おかみが言つた。

「熱海でないとすると……」

「伊東ではございませんか」

「海の好きな人ですから、山の中の温泉とは思へませんの。ふつと熱川ではないかといふ氣がするんですけど」

「伊東ではございませんか」

「さうですわね、ここにゐないとすると、伊東か知ら」

「伊東は、どちらかご存知ですか」

「いいえ」

「それでは適当な宿をご紹介申し上げますわ。いらつしやるまでに、電話をかけておきますから」

「伊東にゐなかつたなら、熱川、蓮台寺までさがしにいかうと思ひます」

「まあ、大変でございますわね。伊東においでになるといいのですが。おかへりを、お待ち申し上げます」

來宮から、昌代は汽車にのつた。

紹介された伊東の宿で、彼女は方々の宿に電話をかけてみた。どこにも小峰はゐなかつた。夕方に近くなつた。海の色もどことなく變つてきた。下田行の最終のバスに間に合ふことが判つた。

「人をさがしに來たのですから、今夜ご厄介になるわけにいかないの。これから

熱川にいきます。熱川の旅館を紹介して下さい」

彼女はバスにのりこんだ。

うらぶれた心持である。顔色も、それだった。行先もなくさまよふ人の心も、かくあらうかと思はれた。海は夜を迎へるために、刻々に変色してみえた。空が逆に分るく見えた。うつろな腰で、外を眺めてゐた。車内には、土地の人々と湯治客もまじつてゐた。車掌も一日の疲れから、金棒に腕をとほして、荷物のやうにゆられてゐた。うらぶれた氣持にふさはしく、花も実もないバスのゆれ方であつた。リズムもなくゆすぶられてゐると、段々と、何でもない人の心までが荒涼と歪み、荒んでいく感じであつた。

熱川の旅館は、車道からはるか下にあつた。昌代は初めての道を、一步一步細い谷間に降りていく氣で歩いた。一ト足毎に、波の音が大きくなつた。暗いので、目ざす宿をさがすために骨が折れた。

「おひとりさままで？」

昌代はハンドバックを小脇にかかへ、慍つたやうに玄関先で頷いた。小峰といへば、少ない名なので、若し彼がゐるのなら、この時、何か言はれる筈だつた。やはりこの宿にもゐないのだ。

食事の時、給仕にきた少女に、

「伊東にいくバスはないの」

と訊いた。

「今夜はもうありません」

ここの旅館を全部しらべたところで、数の少ない旅館である。頼んでおいた女中が、現れた。

「小峰烈さんと仰言る方は、どこの宿にもありません」

枕の下に、浪の音を聞いた。昌代は眠る氣になれなかつた。椅子をふりあげた

報いが、この結果を招いたとは考へられないのである。あのことは、川の面に浮んだ藁屑にすぎなかつた。川は流れてゐる。小峰はさがされてゐることを、すでに知つてゐるのではないか。かくれてゐるにちがひない。或は、偽名でゐるかも知れなかつた。偽名でゐるなら、さがしやうがない。若しかしたら小峰は中野にゐるのであつて、子供達に、伊豆へいつたと言ひつけてあるのかも知れない。そこまで疑へば、きりがなかつた。疑ひは一應抱いてみるのだが、やはり騙されたにしても、伊豆の温泉地を、海に面した温泉をしらみつぶしにさがしてまはるのがいかにも自分だといふ思ひが強いのである。それ以外の、処置は考へられなかつた。單に男をさがして歩きまはるといふ氣はしなかつた。泣いたり、笑つたり、喧嘩をしたりすることは、生活の末の末の出來事であり、自分をこのやうに苛立たせ、さがしまはらす動機は、節を加へた親子三人の生活といふ大きな不変の問題に心を占められてゐるからだと思ふ。この問題は派手ではないが、これだ

けはまともに、責任をもつて押し進め、きつき上げねばならない大切なものだった。人間生活の基本的なものが問題だった。籍のことも、自尊心も、椅子をふりあげた暴力も、結局は、生活の根本をまつすぐに立て直したい欲求から出たものにすぎない。彼女は馴染のない部屋で、薄い牀で、寝がへりをうつつた。以上の感慨を筋道たてて胸に描いたのではなかつたが、その感じだけが胸の中心にとつかと腰を据ゑてゐる。それを感じするだけだ。

浪は弱くも強くもならず、夜中鳴つてゐた。

昌代は最初のバスで、伊東に戻つた。いくらか痩せてゐた。あれ以來、彼女は一ト夜ものびのびと眠つたことがなかつた。肉体の一部が蝕んでゐる。苛立ちがつづいてゐる。尋常にふるまへない。節までが、「ママ、どうしてさうおこるの。さよやも、きよやも、ママがかはつたつて言つてるよ」といふ。氣をつけてゐるつもりでも、さうはならぬものか。小峰が中野に戻つた日以來、陰山が來ても逢

はないことにしてゐた。母親には、通知を出すまで来てくれるなど断つてある。

「かういふ場合、女がいくらじたばたしたところで、考へつくことはたかの知れたことです。ちつとおとなしく時を過すのが一番利口です」と美和はなだめるのである。「あなたはダンスを教へる場合、女の方から先に動き出してはいけません。あくまでリードされて動くのだと、よく言つてゐるぢやありませんか。リードされて動くのは、ダンスの場合だけではないわ。リードされて動く方が、自分が先に動き出すよりも、自分のぞんでゐる本当の動き方が出来るのだわ。あなたはよく自我つて言葉を使ふけれど、自我つて、主張することだけにあるものぢやないでせう」熱海に戻る車中、姉の言葉が思ひ出された。

「いらつしやらなかつたのですか」

と、稻毛屋の玄関に現れたおかみが、氣の毒さうに言つた。

「少し休ませて頂戴。とても疲れてます」

「さつそくお風呂へ……。その間に、お牀のべておきませう。ご食事は」

「何もたべたくありません」

湯にひたりながら、昨日からの行動を考へると、何か、人事を盡したといふ氣がした。結果はいつそうみじめになつたが、努力したといふことが自分に向かつて一つの言訳になつてゐた。小峰をしたふ自分に、一つの申開きも出來て、嬉しいやうな氣がする。と言つて、このまま姉の忠告どほりに手を拱いて、判決を待つことの出來ない自分であることは十分承知してゐた。

牀につくと、すぐに眠つた。

目がさめた時、窓の外は暗くなつてゐた。

「おめざめですか」

はいつて來た女中に、

「伊豆山温泉が残つてゐたわ」

「さうですわね。あそこも、海に面した温泉でございます」

「二階へ電話、切りかへて頂戴。序でに電話帳をね」

心のこりなくさがして置きたかつた。一ヶ所でも忘れてゐたならば、さがし方が悪かつたと悔いねばならない。それは、嫌だ。彼女は浴衣に丹前を着、洗面所の横の切換電話をつかつた。

伊豆山温泉にも一流から三流までの旅館があつた。電話帳には、聞いてゐる名もあり、初めての旅館も多かつた。有名のにいちいちかけた。

「さういふ方は、おいでになりません」

「すみません」

電話を切つた。あと何回、すみませんをくりかへすことか。何回もくりかへすのだと、次のを呼び出した。

「おいでになりません」

「すみません」

その度に、卓上電話器が鳴った。意地になつてゐるやうだ。執拗にくひさがつてゐる。しかし、五回六回と、すみませんをくりかへす頃になると、努力の結果が判明してゐるだけに、空しく、受話器をはふり出したくなつた。十軒近い宿をしらべた。もうたくさんだ。たとへ小峰がどこかの宿にゐたにしても、それはもはや努力以外のことである。これだけ電話をかけてみれば、わざわざ伊豆まで追ひかけて来たといふ名目は成り立つのだ。もうやめようと思つた。聽濤館といふのが目についた。いづれ二流の旅館であらう。どんな旅館か知らないが、小峰がゐる筈はなかつた。しかし、念のためである。己の努力の最後の仕上げをするつもりで、電話をかけた。

「小峰烈といふのが、泊つてゐないでせうか」

「小峰さま？ はあ、おいでになります」

「え？ ゐるのですか。小峰がゐるのですか」大きな声になった。

「三日前からお泊りでございます」

「ああ」

その場にしゃがんでしまひたかつた。全身の血が、どつと流れ出したやうだ。

「いまからすぐ伺ひます」

「はあ、どなたさまで」

「昌代です。昌代がすぐそちらへいくと傳へて下さい」

「はあ、どなたさまで」

「家内です。妻です、昌代です」

「奥さまでいらつしやいますか。はい、承知しました。さつそくお部屋へ申し上

げます」

大股に、部屋に戻つた。鏡に向かつた。その眼に、涙がうかんでゐた。微笑し

ようとする。パフで小鼻を抑へた。顔を傾ける。瞳が笑ふ。泪は、小指の先で拭つた。よかつた、よかつたと、からだ中で言つてゐた。見付かつたことを喜んでゐるが、見付けるまでの努力が、よかつたのだ。椅子で殴つたことは忘れてゐる。

「小峰さま、伊豆山にいらしたのですか」

おかみが現れた。

「ありがたう、見付かつたわ。たうとう見付かつたわ。あたしの努力、無駄にならなかつた」

「どちらのお宿でございますか」

「聽濤館」

「あんまり聞いたことのない名でございますわね」

「あたしも、投げた氣で、念のたふかけてみましたの。そしたら、ゐるつて……」

「自動車の用意しておきませうか」

「お願ひします」

着換へをすませた頃には、すでに自動車が出来てゐた。車は賑やかな、夜の道を走つた。気があせつた。絶えず警笛を鳴らした。温泉町はどこも不景氣といふのだが、歩いてゐる人もなかなか多かつた。駅前から海岸を見下ろす道に出た。熱海ホテルの灯が、樹間に見えかくれした。海上にも、漁火がまたたいてゐる。波の静かな、釣にふさはしい夜だつた。自動車は右に曲ると、いきなり急傾斜を徐行した。二三回急カーブを切つた。百米も一氣にくだるせらう。車がとまり、扉が開けられると、波の音がすぐ近くで聞えた。大巾の波が岸壁にぶつかる、力強い音だつた。地ひびきをたてる。

「小峰ですが」

と、聽濤館の玄関に立つた。

「お待ちでございます」

廊下をいく時、小峰が待つてゐてくれたことをよろこんでゐる自分に気がついた。さんざんさがさせておいて、いまさら、待つてゐるといふのをかしいことだ。番頭の平凡な挨拶にすぎない。一刻も早く顔が見たいと駆けつけた思ひが、萎れた。さんざんさがしまはつたことを、恩に着せたいのもやまやまだが、初めから小峰の歓迎しないことで自分があくせくとしてゐたのである。小峰は迷惑に感じてゐるかも知れないと、

「おいでになりました」

次の部屋の襖のところ、膝をつき、さういふ番頭の背後で、昌代は固い顔になつた。

「さがしたわ、さんざん……」

坐るなり、思はず恨めしい眼差になつた。

「さがし出さなければならぬほどの急な用があつたのか」

小峰は、冷淡であつた。

「どこへいくとも仰言らないんだもの。湯河原、熱海、伊東、熱川と、昨夜は熱川で泊りました」

「君ひとりで？」

「もちろんですわ」

「節は」

「うちにゐます」

「それはいけない。節をひとりではふり出しておくのは、可哀さうではないか。

僕がどこへ行かうと、君に報告する義務はなかつた。この前は湯河原にゐたが、また出かけて來たのだ。僕には、休養が必要だ。漫然と氣のすむまで、波の音が聞いてゐたい。誰にも心を見だされたくない。すてておいてほしいのだ」

「もうあたしには会つて下さらないのかと思つて……」

「逢ふ必要が生じたら、会ふ」

「でも、よかつたわ。たうとう逢へたから」

「くだらないことをするひとだ」

「生命がけだわ」

「誇張をいふ」

「いいえ、本当、若しあなたが見付からなくて、これ以上苛々してゐたら、危いわ。どんなことになるか、あたし自身にも判らないんだもの」

「僕に会へたら、それで氣がすんだだらう。おかへり」

「あたしまだ、ごはんを食べてゐません」

「稻毛屋か」

「ええ、さう、稻毛屋のおかみさんが、心配して下さつたわ」

「不名誉なことを、自分で吹聴して歩いてゐるやうなものだ。君がそんなにむき

になつて僕をさがし廻らうとは、思ひがけなかつた。さういふ氣持があるのなら……」

「昔からさうですわ」

小峰は苦笑した。それと椅子をふりあげた形相とは、同一人とは考へられないのである。昌代は、椅子を思ひ出さなかつた。本人にも氣のつかない正体を、小峰は冷靜に見抜いてゐる氣だつた。

「節が可哀さうではないか」

「かへります」

「さうしなさい」

「でも、おなかがすいてるんですもの。ここで、ごはんを食べてかへります」

「それちやさつそく言ひつけよう」

小峰はタオルをもつて、部屋を出た。帳場で、夕食を言ひつけ、湯殿にはいつ

た。円形の三坪ほどの湯船には客がない。湯気が乱れてゐた。くらい電燈が右手の柱にともつてゐる。浪の音が、窓の外に聞えた。嵐を聯想させる物凄い音である。この音にもすでに慣れてゐた。ほととぎすが、あの声で、蛙を食べるといふ句を思ひ出した。昨日から自分をさがしまはつたといふ行爲には、心を打たれた。嬉しかった。しかし、その顔を見ると、恐怖を感じ、用心をする氣が先づ現れるではないか。愛情はすうつと後方に押しやられてゐる。危険を少しも感じさせないといふ点だけでも、現在では中野の妻の方が、自分の心に近いのである。椅子で打擲されたことは、生涯忘れないだらう。嫌悪してゐるといふのでは誇張になるが、一途に避けてゐたいのだ。危険から己を守りたい。さういふ兇暴なことが、性格的に厭ひだと、瘦せたからだを湯から引きあげた。二十代三十代であるなら、多少乱暴な眞似もかへつて愛情の刺戟になるだらうが、この年齢になれば耐へがたいと、肉の薄くなつた腿を撫でた。部屋に待たせてある昌代のことか、いつか

うに氣にならなかつた。理窟よりも、この感情の方が正直で、これに従ふより他はないのだと、再び湯にはいるのである。

部屋に戻ると、昌代がひとりで食事をとつてゐた。

「おいしくいただけけるわ」

「うん、腹がすいてゐるからだ」

「お晝から食べてなかつたから」

現金に空腹を感じ、健啖ぶりを示すのも、女の感情だらうと、第三者の眼で彼は眺めた。服も着換へてゐないのだ。口唇が強すぎる。陰山なる男を思ひ出したが、そんなに忌々しくなかつた。大柄な女には、同じに女の残忍さも大柄に仕組まれてゐるやうである。自分が第三者の目になつても、結構魅力のある、迫るやうに美しい女性に見えた。自分の眼になると、齒のならび方、耳の形、足指の形、節を生んでから腹に汚点の出来た肉体を知りつくしてゐるので、いまさら何の発

見のしやうもない。重苦しい相手だ。空々しい魅力に映つた。

「あやし、かへります」

「さうしなさい。節が可哀さうだ」

子供が可哀さうなのも実感だつたが、追ひかへすといふ無情な振舞ひに是非出たいのである。ひそかな復讐だつた。

「中野と一しよでなかつたことが、嬉しかつたわ。そんなこと、夢にも考へなかつただけど、あり得ないことではなかつたでせう。もしさうだつたら、この部屋にはいつたとたんに、あやし、どうしたでせう。さう思つて、どきんとしちやつた」

「なるほどね」

「夫婦づれを追ひかけまはしてゐるんだつたら、滑稽だわ。みじめだわ。ぞつとしちやつた」

「君のためによろこばう」

「本当にあたし、かへります」

「おかへり、車を呼んであげる。汽車はまだある。東京にはおそくなるだらうが、節がよろこぶ。節には、淋しい思ひをさせてはならない」

「かへります」

そして二十分後には、熱海の歩廊に昌代は立つてゐた。乗客も晝間よりは少なかつた。ハンドバックをきつく小脇にかかへて、彼女は暗い街路の一点を眺めてゐた。女であることが、残念な氣がした。日本の習慣を不自由だと思つた。外人にしても、夫婦間で解決のつかない氣持の時には、抱擁をするといふではないか。理解し合ふ唯一の方法だといふ。寢室だけに抱擁のかぎられてゐる日本人の生活習慣は、不自然であつた。妻が言葉で言ひあらはせないやうな場合には、良人のからだを抱けばよい。抱けば黙つてゐても、おのづと通ふものがある。それはい

ますぐのぞめないことであるにしても、若し立場を変へてゐたならば、妥協と安心は得られたのである。男ならば妻を抱くことは、何でもなく出来る。妻の固い決心を、腕力に訴へてでも、ときほごすことは可能である。良人に抱かれてしまへば、いくら固い覚悟もおのづと崩れてしまふのだ。意志の作用でなく、意志以上に自然にうまく溶けにかかるのである。昌代は、点晴を忘れてきたやうに心のこりだつた。無念であつた。そのやうにして自分の氣持をほぐされた経験は、この十年間に度々あつたと思ふ。

——強引に、泊つてもよかつたのだわ。

子役を使はれて、もろく言ひまかされたやうで、汽車が動き出すと急に腹立たしくなつた。しかし、小峰の心に何かは残した筈だつた。いまはそれを当てにするより仕方はなかつた。

何かが残されたのは、たしかであつたが、昌代を送り出すと、すぐに小峰は牀

にはいつた。段々と腹が立つてきた。不愉快になつた。自分をさがし廻つた可憐な振舞ひをとりあげ、情狀酌量といふ寛容な氣持になるどころか、執拗だと忌々しがつた。頭が判断を下す二三歩前を、嫌惡の情が先走りする。寛大に任せるよりも、この感情に従つてゐる方がたしかな氣がした。

浪が岸壁にぶつかると、三階のこの部屋まで震へた。いまの氣持には、浪の音もふさはしかつた。

17

伊豆山温泉からかへつた当座の小峰烈は、或る目的を實行したいと、その折を狙つてゐた。彼はたき子の一挙一動を追つてゐた。悪いたくらみのやうに、胸騒ぎがした。たのしい期待ではないが、それ以外に血路のひらきやうがなかつた。

相手を不幸に叩き落すことにはならず、結果は相手も満足してくれるであらうと考へると、氣まりの悪さや、多少の専制は許されてよいやうに思はれた。子供達が留守になり、そんな時、たき子が偶然彼の部屋にはいつて來ると、胸がどきどきとした。まともに古い妻の顔が眺められなかつた。たき子は十年前妻であつた時のやうに振舞つてゐるにすぎなかつた。その氣になるなら、何でもなかつた。が、なれないのである。油断をうかがつてゐるやうで、不逞な心を抱いてゐる自分が氣に入らないのだ。しかし、決行しなければならなかつた。

——勇氣を！　勇氣を出すこと。

氣にして、それとなし妻を眺めるせみか、たき子の上に十年間氣付かすにゐたデリケートなものがいろいろと発見出來るのだつた。たき子は四十八歳である。手も白かつた。粉をふいたやうに白いのである。皮膚がすつかり弛緩してゐるためか、固い筋肉はどこにも感じられなかつた。時間と物質にめぐまれてゐるので、

骨までが柔かになつてゐるらしい。何となく贅沢の中でゆだりすぎたものを感じさせる。一人の異性だけしか知らない四十女の、きれいな疲れ方であつた。

昔から、小峰と彼女は別室で眠る習慣であつた。十年目に戻つて來てからも、その習慣であり、女中が牀をとつた。二十代の時には、小峰は顔をちよつと動かすだけで、良人の意志が妻に通じた。現在ではたとへ口に出すことになつても、相手は素直に従はないにちがひなかつた。毎夜、小峰は寐につくと決心を新にした。

——妻ではないか。誰に遠慮があるものか。妻を抱くのだ。是非妻を抱かねばならない。妻を抱けば自づと血路は開いてくる。それ以外に、自分の生涯は残されてゐない。

ところで、遠慮しないではゐられないのは、当のたき子の心に対してであるのも、皮肉だつた。彼は、夜になると、その機会を狙つたが、たき子が用心をして避けてゐるやうに、その折がなかつた。結婚の日を迎へてゐる伊豆子が、母親と

一室に眠つた。若夫婦の章たち、伊豆子、丹でつくり出す家庭の雰囲氣では、小峰のひそかな願望がいつ達せられるか判らなかつた。

——たき子を抱くことによつて、昌代に対する優柔不斷にとどめが刺したいのだ。一挙に解決がしたいのだ。それ以外にもう手段はない。

昌代が女中を使つて電話をかけてよこすのだつたが、小峰は居留守をつかふことにしてゐた。家のまはりをうろついてゐるらしいのは、章たちの顔色で、それと判つた。かへつて小峰の心は、意估地になつていく。椅子で殴られたことを、忘れてはゐない。

夜おそく電話がかかつて來た。

「ゐると答へたのか」

「はい」

と、女中が言つた。

「何か急用か。こんな時間に電話をかける非常識なことほしないでほしい」

小峰はつつ放した。

「会つて頂戴。もう何日もあなたの顔を見ないんですもの。逢つて頂戴。來て下さらないなら、あたしがそちらへいきます」

「來てはいけない」

「それぢや会つて頂戴」

会はないといふもつともな理由がなく、小峰は言葉につまつた。

「うちにいらつしやるのが厭だつたら、外で逢つて頂戴。節も逢ひたがつてゐます」

子供には、さからひかねた。

「外で、用件を片付けよう」

「明日逢つて下さいますか」

「明日は都合が悪い」

「それちや明後日」

「明後日も駄目だ」

「それちやその次の日」

永久に都合が悪いと言ひたかつた。

「弁護士に話がしてあるから、用は弁護士を通じてしてほしいのだ」

「いいえ、あたしではありません。節のことです。節が会ひたがつてゐます」

五日目の日本橋の喫茶店を約束することになつた。

用があるわけでなく、小峰は次の日も庫にはいつて、先代が蒐集した和漢の書籍をしらべてゐた。保存には十分注意をはらつてゐたが、中には、開くと、衣魚が走り出したりする。一日古い和紙の匂ひに包まれてゐると、煩惱から隔つてゐる実感が強かつた。この方が、白髪のに増えてきた自分には段々とふさはしく

なつた。

或る朝のことだつた。小峰が牀をはなれるのは、いつも十時がすぎてる。目をさますと、家の中は静かであつた。杉子も伊豆子も、ゐないやうである。障子に陽が当つてゐた。ぢかの光線でないので、部屋の空氣まで柔かに、温かい。温室にゐるやうだつた。たき子の電音が、部屋の前でとまつた。小峰は眼をとちた。静かに、はいつてきた。

「電報です」

いま目をさましたといふ風に目をあけると、たき子が枕許に膝をついてゐた。

「誰から」

「開いても差支ありませんか」

「何の遠慮がゐるものか」

好機ではないか、と勝手に小峰の胸がどきどきと鳴り出した。

「一二ヒノカイエンキアトフミシオダ」と読んだ。「会場が決定しないと仰言つてましたが、やつぱりきまらなかつたのでせうね」

小峰は氣をたかぶらせて、両手をついて、半分からだを起した。計画をもつて、手を出した。たき子は電報を差し出した。その意味ではなかつた。電報をもつた彼女の手をつかんだ。そして、引きよせた。

「いけませんわ」

不意だつたので、構へる暇もなく、たき子は身を泳がせた。小峰はかぶりを振つた。たき子は抵抗をはじめた。小峰は腕に力をこめた。焦るので、喉がせいぜいと鳴つた。妻の抵抗はすぐにやんだ。

意外な氣もした。が、当然のことをしたにすぎない。氣まりの悪さは、一瞬で片が付いたやうである。たき子は従順になつた。口も利かなかつた。小峰はものしく構へたものだが、むしろ拍子抜けであつた。小峰が部屋を出たあとで、

たき子は牀を片付けてゐた。

茶の間で、二人は顔を会はせた。彼がお茶を口にしてゐる時、

「妻ですから、やむを得ないことですけど、二度とは困ります」

どつと恥しさが來た。小峰は赧くなつた。思ひがけない一撃であつた。何故と口に出かかつたが、それすらびたりと押へつけてしまふきびしいものが感じられた。たき子は下腹を抑へて言つた。

「おかげで、おなかが痛くなりました。困ります」

「すまなかつた」

たき子は微笑もしないのである。情熱をこめて抱いてみたのだが、何の反應も生じなかつたことを、彼は思ひ出した。唇も單に任せてゐるといふにすぎなかつたのだ。羞恥で固くなつてゐるのだと解釈したのは、甘すぎた。丸太棒を抱いてゐたのである。どんなに己の計画が甘く、一方的であつたかといふことが思ひ知

らされた。

「あなたとは、十年前に別れてゐた方がよかつたのです。もつと前から別れてゐた方がよかつたのです。父も母も、それをすすめたのですが、わたしが反対をしたからです」

「君が反対をした？ 意外なことを聞くよ。君は何度も実家にかへつた。勿論僕の不行が原因だったが、しかしいつか戻つて來た。両親になだめられて戻つて來たものとはかり考へてゐたが、違つてゐたのか」

「反対です」

小峰は、息を吸ひこんだ。

「両親は初めから、末の見込がないから別れなさいとすすめてました。両親には先見の明があつたわけですわ」

「知らなかつた。まるで反対を考へてゐた」

「最初の放蕩の時に別れてゐたら、わたしの一生もつとちがつてゐたかと思ひます。あなたに未練があつたからです。その内には心を入れ直して下さると、実家にもどる度に、あべこべにわたしが希望をもち出すので、両親はしまひに何も言はなくなりました」

「知らなかつた」

「ですけど、あなたと別れてしまつたにしても、第二の結婚がはたして仕合はせにいつたかどうか、判りませんからね。現在かうして子供たちと不自由もなくらしてゐる方が、仕合はせのやうにも思はれます」

「どうしてさういふことを、僕に話さなかつたのか」

「お知りになれば、心を入れ直したと仰言るのですか」

この時、たき子は微笑した。皮肉ではなかつた。

「相変らずぐれつづけてゐただらうが、しかし、僕らはかうした話を、しみじみ

と交した経験がまるでなかつたね」

「お顔を見てゐると、ただもうにくらしくて、にくらしくて、心の中の半分も話す氣になれなかつたものです」

「無理もない」

「かうして心の中を打ち開けて話の出来るのは、初めてのやうな氣がしますわね。いつも、一定の距離を保つて、あなたを見てゐましたから」

「すると、僕がそれをいいことにして……」

「でも、昔にかへすことは止ませうね。あたしはこのままで、結構幸福ですから」
「さうしよう」

「あなたを束縛しませんわ」

「つまり僕を必要としない生活の中で、うまく巢を見付けたといふのだね」

「あなたがさう仕向けたのです。余儀ない保身の結果でせう」

「それにちがひない」

「ほんたうにかうしてお話の出来るのが、不思議な氣がします」

「茶のみ友達の心境だらう」と笑ふ。

「パンのお仕度、しませうか」

「食べながら、もつと話がしたい。この調子で、話がしたい」

「わたしもさう思ひます」と、立ち上つた。

18

階下の廊下で、女中が誰かと話してゐる声が上がってきた。昌代は聞き耳をたてたが、やがて、それが母親の茂女であることが判つた。女はかけた腰を、椅子にもどした。不快な顔付が、三面鏡に映つた。苛々としてゐる。瘦せてゐる。へん

に皮膚が乾いてゐるのを眺めると、彼女はひとの顔のやうに、そこにあるパフをとりあげた。小鼻から鼻の下を押へる場合は、習慣的にそこを長くした。をかしくも何ともなかつた。

氣がねをしながら、一步一步階段を上つてくる様子だつた。昌代は我儘からいよいよ不快になつた。口を利くまいと思つた。ひかへめに、扉を叩く。返事がなければ、あきらめて引きかへしていく相手でなく、強引に、はいりこんでくることとが判つてゐるので、それを予定した上で昌代は腹を立てるのである。案の定、ノックしたのは、單なる形式で、やがてノブが鳴り、

「今日は」

猫なで声で、茂女がはいつて來た。三面鏡に、へりくだつた顔が映つた。目をきよろきよろとさせてゐる。その眼は、時に應じて兇器となる性質をもつてゐた。開き直ると、獯猛な光りが、その目からとんだ。油断のならない眼差であり、い

つたんその眼が憎惡にもえ上ると、終生仲直りは出来ないやうな絶望を感じさせた。

「腰かけて、いいかね」

「どうぞ」

間を置いてから、昌代は膝の向きをかへた。

「小峰さんは、かへつた來ないやうだね」

彼が帰つて來ないことを、この母親は予定にきめてゐる。茂女はことごとくに、小峰烈が戻らないことを希望してゐた。

「節ちゃん、可哀さうだね」

口先だけの同情が、果して昌代に見すかされてゐないとしても考へてゐるのか。見抜かれてゐても、平氣である。もつとごゆつくりしていらつしやいよ、ごはんを食べていらつしやいよ、お泊りなさいよと、腹からの歓迎を示しながら、その

実、永居をされたなら、かみつくやうに悪口をたたくのが本心の、口先だけの愛想の類である。昌代は辛抱する思ひで、一杯だった。

「昌代さんから、許しがあるまでは、この家に來てはならないと言はれてゐるだけ、わたしとしたら、母親としたら、娘の心配事に、冷淡に、見て見ぬふりをしてゐるわけにもいかないからね。心配で、心配で、夜もおちおち眠れやしない。浮くか、沈むかの、今が一番肝腎な場合だからね。昌代さんの腹一つで、仕合せにもなれるし、不幸にもなつてしまふのだからね」

「それで、お母さんの考へは、どうなの」

「わたしは、ね」

顔色をうかがふ。昌代は無意識に、マニキュア・セットの先の曲つた鋏を、開いたり、しめたりした。

「この家は、いつたいいくらぐらゐに賣れるだらうかね」

意外なことを聞くと、昌代は思つた。

「捨て値にしても、百五十万円以上だらうね」

母親が何を考へてゐるのか、およその見当がついた。昌代の昨今の心のありかと、母親の心の位置が、とんでもない距離をつけてしまつたのを、をかく思ふ。

「この家は、あたしの名儀ぢやないわ」

「だからさ、是非ともこの家を貰ふんだよ」

「くれやしない」

「まさか、裸で追ひ出されることもあるまい。小峰さんが中野にゐついてしまへば、この家は要らなくなる。当然昌代さんからもらつてもよいものだ。だけど、この家は、節ちやんと二人には大きすぎるからね。値打のある内に、賣つてしまふんだ。百七八十万円までは、いくのぢやないかね」

「お母さんは、あたしが夢にも考へてゐないことをいふわ。思ひがけない言葉を、

心の中へ、打ちこんでくる」

「若い内は、それでもいいさ。だけど、年をとることを忘れちゃいけないよ。年よりのいふことは、たしかだからね」

「この家を賣つて、どうするの」

「どこかで、商賣をはじめることだね。あそんでゐたんぢや、いくらお金があつたつて、たまらない」

「何の商賣」

「昌代さんに、何が出来る」

「その商賣まで、お母さんには、ちゃんと見通しがついてるみたいね」

「娘のことは、一番親が知つてるからね」

「何があたしに向くの」

「やつぱり水商賣だね」

忘れてゐた昔のことが、昌代の心に來た。過去から完全にきりはなされてゐるつもりでゐたが、周囲のものが、忘れずにゐる。すると、妻として、母親として、十年をすごしたことは、仮染の姿にすぎなかつたのか。耐らないことだ。

「昔の水商賣？」

「いいえさ、まさか、その年齢で、出られやしないさ。水商賣にもいろいろある。酒場を開くんだね。節ちゃんのために、小さい家を買つてね」

昌代の心は少しも誘はれなかつたが、小峰に話す話題が一つふえるといふほどの考へから、

「台所は、一切、お母さんがとりしまるのね」

「昌代さんは、まだ若い。三十にもならないぢやないかね。小峰さんのやうな人は、いくらも代りがあるよ。ほら、何とかいふ熱心なひとがあるぢやないかね、しよつ中ダンスを習ひにきた人といふ……？」

「陰山さんのこと？」

「四十前といふことだね。若くて、やり手らしい。昌代さんには、さういふ人が似合ひなんだよ。薬品のブローカーをやつてるんだつて？ 年齢も、男と女は、あんまりかけちがつては、不幸の始まりだよ。今度のことだつて、結局は、さうぢやないかね。今になつて、やつと目がさめたといふものだ。十年間、わたしは、今日の日の來ることを待つてゐたよ、きつと來る。來なければ嘘だと思つてゐたからね。そのとほりになつた」

「まだ、判らないわ。小峰はかへつてくるかも知れないわ」

「まだそんなことをいつてゐるのかね。呆れてしまふ。馬鹿馬鹿しいにもほどがある。中野のことを知らないのかね。もとの奥さんと、よりを戻して、お前のことは、忘れてゐるよ。おめでたいよ。まだ目がさめないのかね。ぢりぢりしちやぶよ。それにさ、十年前に、この家に入出をしなさいといふ約束で、あの時、お金は

もらつたさ。でも、それは戦争中だつたからね。金の値打がさがつた。あんな金
が、いつまであるものかね。終戦後のインフレに、当然お金はましてもらへさう
なものなのに、小峰は、知らない顔をしてゐたぢやないか。薄情なんだよ。根が、
けちんぼうなんだよ。わたしには、よく判つてゐた」

いつか小峰と呼びすてにしてゐたが、語氣の烈しさから、かへつてその方が自
然に聞えるので、昌代も聞き流した。

「陰山さんは、どうして來ないのさ」

「來て下さるなと断つてあるわ」

「馬鹿げたことだよ。小峰だつて、先の奥さんとぬくぬくと、よりを戻してゐる
といふのに、何も昌代さんだけが、精進料理をたべてゐる手はないよ。おめでた
いよ。どうせ熱のさめた相手ぢやないかね」

「別れるとなれば、こちらだつて、法律に訴へるわ。取るものだけは、取つてや

る。新しい法律は、味方になつてくれるから」

「さうだよ、さうするんだよ。十年間も、一番いいところを搾りとられてゐたんだからね。取れるだけ取るんだ。第一、自分の苦勞で一錢も稼いだことのない男なんだ。そのくせ、人一倍、きれいな、若い女をしばりつけておくなんて、贅沢だよ。まちがつてるよ。町内から、何かで、調べものが廻つてきたことがあつたが、商賣を書くところに、無職かどうかを書きこむところがあつたがね、無職つて、商賣ぢやないからね。へえ、そんな結構な人がゐるのかと思つたが、小峰といへば、無職だからね。今ぢや、誰だつて働くご時世だよ。親の遺産で、のんびりと食べてゐるなんて、申訳が立たないやね。そんな男にいつまでもくつついてるぢや、いつかは、泣くやうになるさ。喧嘩をしないで、これから何年かくらしでゐるにしろ、いつかは、食へなくなつて、二進も三進もいかなくなる。それが、目に見えてゐるよ。悪いことは言はない。見きりをつけることだ。その陰山さん

といふ人と、相談するのもいいね。わたしが、会つてもいいよ」

「陰山さんを、どうかうするなんて、考へてないわ。迷惑かけたくないの」

「だけど、立派な候補者ぢやないかね。先の目当もなしにとび出すなんて、馬鹿氣てゐるよ。とび出すにはとび出すやうに、何か、目当はつくつておくものだ」

「よく考へておくわ」

「今日は、ゆつくりさせて貰はうと思つてね」

「さうね、みんなと一しよにごはんを食べませう」

「わたしは、もつと言ひたいことがあるんだよ」

「そろそろ節が帰つてくる時間だから、おやつを用意しておかなければなら
ないわ」

「わたしは、台所にいかう」

二人は、部屋を出た。昌代が先に立ち、母親の饒舌に少しも心を動搖させてゐ

ないわが氣持をたしかめながら、いつそ悲しく、一ト足毎に体重が二倍に感じられた。痩せてもゐるが、氣力が喪失してゐた。がくんがくんと足が鳴る思ひで、階段を下りたが、降りきつたところで、はつと息をのんだ。いつの間に来てゐたのか、小峰烈が立つてゐた。

小峰だと知ると、茂女はろくろく挨拶もせず、からだを踞めて、小走りに去つた。無言で、小峰は應接間にはいつた。昌代は言葉を失ひ、あとにつづいた。

「節はまだ学校からかへつて來ないのか」

小峰は、長椅子にかけた。両肘を互の膝に立て、顔を動かさない。この家を出て以來、心のやすらかな日はなかつたものか、彼の顔も憔悴してゐた。昌代は複雑な氣持で、つつ立つたまま小峰を眺めてゐた。からだがふるへた。もどつてくれた喜びも大きかつた。何日かの間いらさせられた腹立たしさもあつた。別れるのではないかと絶望にさいなまれたことも、忘れてはゐない。悲喜こもごもの

感情が、言葉になるきつかけを奪つた。十年間の愛情が、一氣に胸にかけ上るやうだつた。別れるなど、十年間の努力の前では、滑稽なほどの氣紛れに思はれた。そんなものではなかつたと、しみじみと判る。

「お母さんが出入してゐるのだね」

昌代は、首を振つた。その意味が、果して通じたものか。その時、いきなり扉が開いて、小さいものが駆けこんだ。

「ババ、ババ！」

「おう、節！ いまかへり？」

小峰は、小さいからだを膝に抱いた。ランドセルを背負つてゐた。

「図画、Aの三重丸だつた」

ランドセルを外さうとする。じれつたがつて、

「ババ、出してよ。図画がはいつてるの」

「ここに？」

おとなしくしてゐる。小峰は蓋をあけ、二つに折つた図画をとり出した。

「なるほど、上手だね。これは、富士山？」

「うん」

「富士山が紫色に塗つてあるね」

「さう見えたんだもの」

「感じがよく出てゐる。節には、絵の才能があるやうだ。紫色の富士山は、思ひつきだが、勇敢だ。正直だ。いい画だ。これは額に入れて、飾つておかうね」

昌代は、小峰とならんで腰かけた。

節が出ていつてから暫く、昌代も小峰もだまつてゐた。彼には、昌代の氣がよく判らなかつたし、彼女にも小峰の感情に自信がもてなかつた。さぐるのではなく、このままちつとして居れば、自づと判つてくるといふ風に黙つてゐた。

「陰山君は」

「あれ以來、來ませんわ。來て下さるなど、お断りしました」

「お母さんは、何といつてる」

昌代は、氣弱に微笑をうかべた。「この家を賣つて、酒場を出さうとすすめま
す」

「お母さんらしい考へ方だ。娘を藝者に賣る精神だ」

また、いつとき沈黙になつた。

「伊豆山から、まつすぐに歸つたのか」

「かへりました」

「薄情なことをしたと思つた。氣にかかつてゐたのだ」

「いいえ、あたし、やつと会へたものだから、安心してかへりました」

「恨んだらう」

昌代は、その顔を見つめた。小峰は絨氈に目を注いでゐた。昌代の両手がのびて、小峰の腰を撫でるやうにした。小峰は、その感覚を靜かに味はつた。魂を轉倒させるほど彼女の腕力にはおそれをなしたものだ、それが忘られてゐた。青白い、美しい両手をそこに置くので、勢ひ彼女は横向きの姿をつづけた。突然、すべり落ちて膝をついた。上半身の重みが、小峰の膝にかかつた。膝を撫でてゐたが、腕がのび、両腕で膝を抱きかかへた。彼女は膝に、顔を押しつけた。意外な成行であつた。小峰は膝に押しつけてくる顔が、細い頸が、やがて顫へるのを見た。小峰の好みであるところの襟をきれいに搔きあげた、頸が長く見えた。昌代のからだ、びくつと動いた。両腕に力はいつた。彼女は泣き出した。声を出すまいとし、膝に声を埋めた。泣きの発作だつた。小峰は、しやくりあげて泣く頭に、手を置いた。髪を透して、生地の温かさが感じられた。頭蓋骨を蔽つてゐる肉の厚さが感じられた。どこよりもゆたかな感じがした。彼も、泣きたいや

うな氣がした。すると、再びこの家にはいつて來てからも、はつきりとした覺悟は出來てゐなかつたのだが、かうなることをひそかに願つてゐたやうな氣もした。大柄の、美しい、若い肉体が、魂の聲のままにもだえて、泣いてゐる。見栄も、強がりも、意地もすてて、小峰の魂にぢかに映る姿勢で、本当のことを喋つてゐる。彼は、感動した。十年間の夫婦生活に、一度も見せなかつた昌代の弱々しさである。男の膝を抱き、泣きくづれることが自分に出來るなど、寸前までの彼女には思ひも及ばぬことであつたらう。ここまで素直に、正直にふるまへるには、どれほどの苦惱を味はつたことか。

小峰は、中野の妻を抱いたことを思ひ出した。あの妻とは他人だつたと、いまさらに思つた。二度とくりかへすなとたしなめられた恥しさも併せて思ひ出し、昌代の肩に手を置いた。泪は服地をとほつて、肌に感じられた。大袈裟な氣もしたが、この感覺！ 彼は両手で若い妻を抱くやうにした。この温かさ、この手應

へ、これだけが己の世界だった。

「もういい、泣かないでおくれ。判った、判ったよ」

さういひながら、小峰は腕に力をこめた。窮屈な姿勢であつたが、やめられなかつた。昌代はいつそう声を放つて、しがみついた。

「節がはいつて来る。ね、顔をふいて、ちゃんと腰かけてゐないと、をかしい」
事実、その心配はあつた。自分がかへつてゐることで、節は安心してゐる。それ以上、大人の複雑な心の推移を分けて持たせるなど、情知らずである。小峰は力を入れて、やはらかい肩を押した。

昌代は、長椅子にもどつた。泣きながら、微笑した。

「お母さん、もうかへつたらうね」

「かへつたでせう」それから、いたづらつぽい顔になつた。「お母さんのことも、陰山さんのことも、みんな計略だつたの」

「計略？」

「あなたをいらいらさせてあげようと思つて……ごめんなさい」

「ミイラとりがミイラにならなかつたのは、せめてもの喜びだ」

「大丈夫だつたわ」

「ここへ来るまでは、自分の心ながら、半信半疑だつた。どうなることか判らなかつたのだ。しかし、かうしてゐると、やつぱり自分の場所はここより他にないといふことが、はつきり判る。もう大丈夫だ。中野とは、法律上にはつきりさせることにきめた。さうなることを、中野も要求してゐる」

「あなたがもどつて来て下すつたことだけで、こんなにうれしいのに、その上……」

「永年の希望の実現？」

「あなたつて、こんな時にも、冗談がいへるのね。にくらしい」

その時、窓の外を、二人の女が走つてゐるのが見えた。一人が笑ひながら逃げ
るのを、追つてゐる。声はよく聞えなかつた。

「お留守の間は、女中たち、笑ひ声も立てなかつたのに、あんなことしてゐる。
やはり、嬉しいんでせうね」

小峰は昂奮のさめない顔で、頷いた。一人の女中は、顔の形が崩れるほど笑ひ
どほしてゐる。その内に、うづくまつた。もう一人のが、その肩を打ちはじめた。
打つてゐる方も、笑つてゐた。

19

「若し夫婦が、協議上の離婚をした場合、その家の墓はどうなるのだらうか。つ
まり、誰が世話する義務があるだらうか」

小峰烈が、画家の今泉曉に言つた。今泉の背後には、天井の高い硝子戸があり、外氣の明るさをそのままに運んでゐた。沈丁花は茂り、花蘇芳の葉がのびてゐた。この木が可憐な花をつけてゐた期間を、つい見のがしたと、小峰はこの画室を訪ねなかつた期間を思つた。

「当事者その他の関係者の協議で、決定することではないか」

「協議がまとまらない時は、どうなるだらうか」

「家庭裁判所が、その権利の承継者を定めてくれるよ」

「日本の社会感情では、墓や祖先の祭祀は、その家つきのものがするといふことになつてゐるからね」

「民法だつて、社会感情にもとるやうにはしてないよ。出来るだけそれに沿つたやり方だ。君がそれをするのだらう。現に、してゐるのではないか」

「今後は、どうなるか判らない」

今泉画伯が、ちがつた物音をきいたやうな表情になつた。かくしてゐるのではないが、小峰も、いきなり持ち出しにくかつたのだ。

「近々に、いよいよ中野と、正式に離別することにした」

「うん」

何の意見も示さなかつた。

「中野の妻を抱いてみた」

「前の奥さん？」

「臆節を抱いたみたいだつた。抱きながら、白々しい氣持に襲はれた。悪いことをした。妻は最後まで抵抗はしなかつたがね」

「氣紛れかね」

「昌代と喧嘩をしてね、僕は椅子でぶんなぐられた。黒痣になつた。女はかあつとなると、何をするか判らない。こはくなつたし、自分に勇氣をつけるため、中

野の妻を抱いてみたのだ。いけなかつた。妻の方では、とうからそんな氣持は消滅してゐたのだよ」

「それで、昌代さんは」

「僕が中野に来てゐると、うちのまはりをうろつくのだ。子供たちにも知れてしまつた。伊豆に逃げ出したが、伊豆の温泉地をさがしまはつて、たうとう居所を見付けてしまつた。女の一念はおそろしい。椅子でぶん殴るなんて、よくよくのことだからね。もう最後だと思つたが、血眼になつて、僕をさがしまはるのだ。女の心が判らない」

「殴つたのも、愛情だらう」

「これからは殴らないと言つてゐるが」

「君は昌代さんと結婚すべきだ。中野の息子さん達は、もう大人だ。親の責任は解除されてゐる。昌代さんとの間には、小さいのがゐるたね。親の責任もある」

「節が小さいから、可哀さうだ、かへつて來てくれと昌代は言つてゐたものだが、節より、本人の方が、淋しくてやりきれなかつたのだ。うろろう家のまはりを歩かれるのには、参つてしまつた」

「昌代さんは、まだ若い。老いらくの恋の歌人は、六十六で、人妻の家のまはりを喪家の犬のやうにうろつきまはつたといふぢやないか。人間、いくつになつても同じことをする。男も女もだ」

「それで僕も、正式に離別し、正式に結婚することに腹をきめたのだが、墓の問題など、うるさい問題がたくさんにある」

「金持の苦勞だらう。贅沢な苦勞だね」

「財産を、頭数で分割しようと思ふが、中野は妻を入れて、四人、昌代とその子、それに僕だから、七等分だ。等分に分けたいと思ふ。土地がかなり面倒だ。それに、いまずぐそれをやつては、相続税がどかんとかかつてくるだらう。躊躇する

んだよ」

「墓は、長男に任せるがいいだらうね。章君とか言つたね」

「僕は、働くよ」

「働く必要にせまられて？」

「たかの知れた財産だ。僕の語学を役立てたい。何かには使はれるだらう」

「翻訳、学校の先生、個人教授と、いろいろとある。しかし、よい傾向だね。君が自分の身についたもので生活費を稼ぐといふ精神は、大した進歩だ」

「さうすれば自分自身に、いくらか言訳もたつ」

「結婚式を挙げるのだね」

「それは考へてなかつた。昌代は、さうは言はないよ。節まであるんだ。いまさら」

「氣持の問題だ。さうすれば、昌代さんは満足だ。君の心にも、きまりがつく。

何も大袈裟にやることはないが、やつた方がいいね」

「考へてみよう」

「僕は、すすめるね。教会で、簡単にやるがいい。すぐその足で、友達をよんで、披露をやる。君らは新婚旅行に出る。子供をつれていつてもよいがね」

「形式といふことも、馬鹿にはならないからね」

「七人前の財産を、自分ひとりの自由にしてゐた君が、いきなり七分の一に墜落するのだ。つらからうが、今日、財産なんか持つてゐない人々が圧倒的に多いのだ。君の考へ方も特権階級からそろそろ下りる頃だ。いい潮時だ。君は典型的な自由主義者だ。財産があるから、自由主義者でゐられたといふことが、肝腎だね。七分の一にならうと、結構自由主義はつづくよ。極右には反撥してゐる君だが、自由主義をもちつづける内には、別な方面で、全く思ひがけないものが徐々につくられていくのだ。氣がついた時には、右翼の考へ方とあんまり違つてゐな

かつたといふことになる。いまだつてさうした結果は、想像がつく。しかし、君が額に汗をするといふ精神は、或は、君を生れ直させるかも知れないね。君が思想人として、はつきり行動をとると思へないが、さうなれば、死ぬ間際まで、骨の髄まで自由主義者でゐられるだらう。結婚式には、僕も出席したいね」

「君にすすめられてゐる内に、式をあげた方がいいといふ氣持になつて來たよ」
「あげたまへ。悪いことではない。人間は、形式を輕蔑出來るほど利口にはなつてゐないのだ」

「教会がいいね、君、どこか知らないか」

「この近所にも、教会はある。何だつたら、頼んでみてあげようか」

「信者でなくとも、かまはないのか」

「かまはないだらう。信者の方がいいがね」

「宗教の必要は感じてゐないが、昌代は、クリスチャンの洗礼をうけたがつてゐる」

る。あれの姉の美和さんが、クリスチャンだからね。そんなこと、今まで別に重大に考へてなかつたよ」

「宗教同様に、政治に対してもだらう」

「働くことになれば、余儀なく政治に関心をもつだらうね。そんな氣がするよ。知識人の文化擁護、基本人格権の擁護確立と、度々新聞で見えてゐるが、ひとごとだつたからね。若し式を挙げることになれば、君、仲人をやつてくれないか」

「他にもつと適当な人がゐるだらう。新郎より年が若い仲人も、滑稽だ」

「どうせ滑稽な一面もある結婚式ではないか」

二人は、快く笑つた。小峰は、自由主義者といふものの立場に関して、意見をたたかはしたいと思つた。いつもは刀折れ、矢盡きたといつたみじめな感慨で引きあげたものだが、今日はちがふ。己をことさら防禦する必要は感じてゐない。棄身といへば、誇張になるが、それに近い心の持ち方だつた。すると、今泉が、

最近轉向をした或る洋画家のことを話し出した。

20

小峰は三十年前につくつたモーニングを着て、控室の長椅子にかけてゐた。冠婚祭礼に度々袖を通したものだ、最近では、章の結婚式に着てゐる。その同じモーニングが二度目の結婚式に役立つといふことが、ひとごとのやうであつた。自分が結婚式を挙げるのである。眼の前には、洋装も軽やかに、純白で、清楚な、別人のやうに床しさを與へる昌代が、ヴェールをかむり、オレンジフラワーをつけてゐる。白い宝石の頸飾り、膝にカーネーションの花束をもつてゐた。小峰はにやにやと笑つた。昌代も誘はれて、しめし合はせ、これからいたづらを始める子供のやうだつた。

「やつぱり驚異だね。新鮮な驚異を発見したよ」

「何のこと」

「いや、君のその恰好から、君の中で今まで氣のつかなくつたものが発見出來たやうな氣がする」

「ふふふ、思ひ出したわ」

「何を思ひ出した」

「老いらくの恋の歌人の相手がね、コキユーにされた良人に向かつて、今度の事件であなたははじめてあたしつてももの値打が判つたでせうと言つたの。歌人から、歴史にのこるロマンスだ、つまりぬ女と關係はしたくない、自分はあなたを私の相手として、如何に世間に知られても恥しくない立派な女性だと折紙をつけられて、すつかり自信をつけちやつたのね」

「不謹慎だよ。ここをどこだと心得てゐる」

小峰は、めつと睨んだ。「神聖なるべき教会の控室、僕らはこれから、神の前で式をあげようとしてゐる。」

花嫁姿が、首を竦めた。

式場の支度が出来た。すでに親戚、知人、子供たち、近所の信者たちは席についてゐた。仲人の今泉が呼びに来た。小峰は会場にのぞむ時になり、胸を張り、襟を軽くひつぱつた。結婚行進曲が鳴つてゐた。彼は今泉と並んで、白布を敷いた通路に一步を踏み出した。曲に合はせて、ゆつくりと歩かねばならなかつた。

まんに、白布の通路がのびてゐる。左右の席の人々は立つてゐた。小峰はちらりと右側の人々を見た。モーニングが多く、二人若い女が見えた。彼ははるか向ふの正面に待ちかまへてゐる牧師に、まっすぐ目を注いだ。ゆつくり、ゆつくりと歩く。外国映画の結婚式は、度々見てゐるが、舞台の人のやうな、格にはまつた、仰々しい歩き方を、他日おのれがしようとは夢にも考へてゐなかつた。段

段と、牧師に近付いた。歩いてゐる男は、どちらも初老だ。顔につかれが出てゐる。皺もあり、人生の苦勞がにじみ出てゐた。その顔が、敬虔な表情を湛へてゐた。彼は牧師の前に立つた。今泉は、右手に立つた。少しおくれて、昌代が彼と並んだ。その左手の今泉の細君が、花嫁からカーネーションの花束を預つた。

新教なので、正面には何の飾りもなかつた。教会には十字架があるものと旧教を見なれてゐる眼には、もの足りなかつたが、小峰はかへつて氣持がよかつた。

讚美歌第八〇番になつた。司式の牧師がオルガンに合はせて、唄ひ出した。すると、式場から合唱が起つた。彼の子供、親戚、知人の中には、唄へるものはゐない筈だつた。近所の信者が、應援のために來てゐる。

式辞、聖書朗読、祈禱と、二人を前にして、牧師は順々にすすめた。その間、小峰は直立不動の姿勢だ。固くはなつてゐないのだが、直立不動をつづけることは苦痛であつた。からだが一ひとりで揺れてくる。醜体をさらすまいと、緊張し

た。

「二人の結婚に対して、若し異議を申立てたい人があるならば、いまずぐ申し出てくれ」

といった牧師の言葉に、小峰は拘泥つた。形式的にしろ、何か適切な気がした。聞き流しには出来ず、異議を申出る人は一人もゐないと判つてゐても、いつばいになるやうな不安を覚えた。何故だらうか。おのれの心の中の不消化なせゐだといふ気がする。

彼は改めて昌代と手を握り合つた。その上に牧師が手を添へた。

讚美歌第四三〇番になつた。

きよきいもせの・まじはりは

なぐさめとはに　つきせじな

世のおもにをも　ともにになひて

よろこびすすめ 主のみちに

「アーメン」

信者達も唱へた。

メンデルスゾーンの行進曲で、小峰は昌代と並び、またゆつくりと白布の通路を歩いた。一同は屹立してゐた。

出口に来て、調子をとつた歩調をやめると、そこで人々のかへるのを待つ姿勢になつた。小峰は、ほつとして、やがて人々が椅子をはなれるのを待つた。

「おめでたうございます」

「おめでたう」

「おめでたう」

人々は改めて、新郎新婦に挨拶をして、式場を出た。小峰はこの機にのぞんで、この結婚式がなみなみのものでなかつた感じがつよく來た。昌代は、昂奮してゐ

た。そこへ節をつれた姉の美和が、主人の和歌山と一しよに來かかり、

「おめでたうございます」

小峰は頭を下げて、節と目を会はせた。節は何といつてよいか判らない顔をしてゐた。が、歪められてゐる表情ではなかつた。昌代は、自分の子供ではないかのやうに、頭を下げてゐる。節は美和に手をひかれ、ふりかへり、出ていつた。

「おめでたうございます」

「おめでたう、お父さん」

つい、うつかり言つてしまつて、章と並んだ丹が、はつとする風だつた。

「ありがたう」

無慘な氣が、小峰はちよつとした。勇氣を、とすぐ思ひ直した。

「おめでたうございます」

「おめでたう、お父さん」

杉子につづいて、伊豆子が素直に言つた。父と子であるきづなは、切れるわけではないのだと、この新風！ 小峰はわが子とのきづなが少しも重味になつてゐないのを知つた。

控室で、昌代は着換へた。忽ち、ふだんの昌代が出現した。が、昂奮をつづけてゐるので、その顔は若々しかつた。女中に、ときはきとトランクの始末を命じてゐる。声だけ聞いてゐると、花嫁は他にゐるやうであつた。

やがて、小峰は今泉夫妻と自動車にのり、披露会場に向かつた。車が広い道路に出ると、章と杉子、伊豆子、丹が歩いていくのが見えた。通りすぎる時、丹が氣が付いて、手をふつた。

「子供たちは、何とも思つてゐないやうだね」

今泉が小峰に言つた。

「ありがたいことだ。深刻に考へられては、耐らないからね」

「不倫の延長にはちがひないからね。しかし、子供たちが親に求める純情は、年齢的に成長するから、大丈夫だ。父もまた一個の男性なりと判つてくれたら、いいのだね。解決は樂だ」

自動車を目送しながら、歩いていく連中の中では、次の会話が起つた。

「その内に、あたしの結婚だわ。いつたいどちらが出席するのか知ら」

「お母さんは、必ず出るよ」

「お父さんを臨時に借りるのか知ら」

「僕の時、そのことで、お父さんたち、えらい騒ぎだつたらしいが、こん度の場合は条件がちがふから、案外簡単に貸してくれるかも知れないよ」

「借りものぢや、をかしいよ」

「それぢや、二度、式をあげようかしら。一度はお振袖。一度は洋装で。金杉橋のを見てたら、あたしもヴェールをかむりたくなつたわ」

「花嫁の衣裳で、二度も式をあげられては、耐らない。披露を二度すればよいだらう」

「要するに、形式ね」

また一台、高級車が通りすぎた。その中には、昌代と節と美和が並んでゐた。ほこりをかむつて、丹が顔をしかめた。

「節ちゃんがゐる」

車内では、

「どう、感想は」

美和が笑ひかけてゐた。

「ふふふ」

「やつぱりあたしの言つたとほりになつたでせう」

昌代は、暫く考へてから頷いた。

「焦つてはいけない。自然に任せなさいと、すすめたでせう。いくらじたばたしたところで、女の考へは、どうせ浅はかなんだから、自然のなりゆきを、辛抱づよく待つのが一番利口だつて」

しかし、じたばたを始めたばかりに、急轉したのではないかと、昌代は一概に承服出来なかつたが、今はさからふ氣になれず、姉の言葉をみとめた。寛大に、やさしく、親切にふるまひたい氣持でいつばいだつた。

披露を終へてから、小峰は昌代と節をつれ、新婚旅行に発つた。

車中で、

「これが、挨拶状の原稿だが」と、彼は便箋を示した。「ふちを金にして、豪華な挨拶状にしたい」

便箋には、次の文字があつた。

謹啓 初夏の候となりました。愈々御清祥のことと存じます。永らくご配慮い

ただいてをりました私共も、去る六月十五日、荻窪教会で、結婚式を挙げました。今後とも宜しくお願ひします。御暇の折、是非お立ちより下さい。略儀ながら、書面をもつて、御挨拶にかへます。

年月日、住所、小峰烈、小峰昌代と並んで書かれてゐた。

「今泉君が、落鮎のやうだと言つた」

「鮎とあなたが似てますの」

「いや、産卵して、もう用のなくなつた鮎は川を落ちるのだ。海にはいつて、章魚や他の魚にくはれてしまふ鮎をいふ」

「ひどいわ」

「但し、註がある。或る川の鮎は、いつたん海にはいつても、また色つやがよくなり、旺盛になり、産卵のために川をのぼるといふことだ。その方の意味だと、笑つてゐた」

それが何の意味を含んでゐるのか、判らないまま節は、誘はれて、ほほゑんだ。

扉
繪

佐
藤

敬